隔週評論 發行

白表女學雜誌改題

四月八日第一號發

女學雜誌世に出でゝより既に九年、逆境に長成し漸次に發達して各專門に分れたり。去年赤白二色を翻し去月新に文學界を出したるは是なり。今日機到れり、白表女學雜誌を改題して「評論」とし、年來の主義精神を以て社會政治道德敎育の事を評論せんとす、政黨の權策に據りて、一日の掛引を激論するは、他に其人あり。吾黨は政治上革新の根本を穿ち、社會的改良の本道に皈り、人心の秘奧と世路の歸趣とに則りて、堂々論明する所あらん。而して文界時事、書齋今昔、史論評傳の如きは文學上に於て自から一種の別色を呈せん。若し夫れ講壇の欄內、神學及び道德の聖理を奉じて時事に慨し當世に告ぐる所の講論の如きは、植村正久巖本善治二人專ら任じて所懷を吐かん。其他、欄の區別、論の部署、旗の色、鎧の袖なんどは今ま一々之を告げず。冀はくは、四月八日、吾黨第一陣の門を出るを待つて、之を評せよと、望む。

隔週評論 發行

第一號預告畧

「時事」欄內には、社會、政治、敎育、宗敎等の近事に對する評論あるべし。

「講壇」欄內には、植村正久氏等が諸道理想の比較。及び、巖本善治氏が、敎會論あるべし。

「文學史骨」欄內には、透谷子、日本文學史の想像說を揭げ且つ文界時事を添えて同好者の近況を報ずるものあるべし。

「時論」欄內には、千島拓殖上の意見、日本農業に對する意見等皆な專門家の手によりて出づべし。名士訪問錄、時論要領の如きも見るべきものあらん。

「書架」欄內には、日本宗敎迫害史の調査に讀むべき書目を指示し、文豪著作中の逸話を談じ、最近新書の批評紹介を爲すべし。

「雜錄」欄內には、安東太郎氏殖民上の意見、伊藤爲吉氏職工軍團の運動、某學士が調査したる酒が道德上に及ぼす諸害果の一覽統計表、及び大學生社會改良新策の如き事あるべし。

「隨筆」欄內には、天地發見、獨嘯偶錄、英詩の譯、その他隨時の雜筆あり。

「史論」史傳欄內には、戰國以後の佛敎、明治十七年の朝鮮の亂の二文あり。

「海外時事」は、內國時事と相對して、遺す所なけん。

是れ等の要略のみ、或は、增すことあるべし。又或は減らすとあるべし。爰に知友に其一斑を豫告する耳。

島田三郎君
巖本善治君同著

公娼可滅

本書は廿三年三月五日、木挽町厚生館に於て廢娼大演説會を開き、其際に賣捌きたる入場券の餘金を以て本書を出版し、同日の演説の趣意を普く公になさんが爲之を實價にて分たんとす。

正價金四錢
郵税金二錢

島田三郎君
故植木枝盛君

廢娼演説

本書も亦明治廿二年十二月九日、厚生館に於て、島田三郎、故植木枝盛君等が、なしたる廢娼演説の筆記なり。

正價金五錢
郵税金貳錢

安枝武雄君編輯

正義の反響

正價金十五錢
無郵税

目次

發賣所　東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

第三卷第一號(三月十七日發行)目次

週刊雜誌 福音新報

生命の水(歌)…戸川殘花

社説 郡司大尉と佛教○シカゴ博覽會と日本の基督教

教報 横濱、大坂、京都、高知、馬關、長崎、雲伯二州仙臺、北海道各地方通信○加藤交氏○日端同盟傳道の近況 ○原田助氏と番町教會

日曜日の午後 苦惱—愛の標準…

説苑 新聞事業の快樂英雄圖集

團欒 新教外典キーブル

教の栞 の君主アドルフアス○子供の祈 基督教の研究…植村正久

定價一冊二錢五厘○廿六冊(六ヶ月分)六十錢○五十二冊(一ヶ年分)一圓十四錢○府外一大冊に付郵税五厘を要す

前金にて半ヶ年分の注文をなす方には「基督のすがた」一冊四十五錢なるを無郵税卅錢にて送る

(前號卅六錢は誤)

發行所　麴町區三番町三十五番地

福音新報社

有益なる**蔬菜**或は珍奇なる**草花**種子拾種入一袋各廿錢宛御送金次第郵送す郵劵にても宜し其外善良なる種苗類も澤山あり

東京赤阪區溜池町五番地

東京興農園種苗店

女學雜誌 第三百四十一號 明治二十六年三月廿五日發兌

社説

白表女學雜誌留別の辭

茲に白表女學雜誌第十七卷を終る。其新衣を裝ほひ、更めて戰塲に出でんとするに臨み、一言留別の辭なかる可からず。汝、九年前、吾社内に生れし時、社貧にして汝を包むの裝ひを重ぬると能はず。稍や長ずれども、人少なふして汝に敎ゆるに多くの學を以てすると能はざりき。然れども、汝親から世路の辛酸を嘗め、一度び牢獄に入り、三度び家を移し、十度び逆境に處し、幾度か困躓して、而して數度び勃興し、年を經ると九、月を過すと九十二、齡ひを重ぬると三百四十一にして、初めて今日あり。

汝、初めて生れし時、汝は双子なりき。汝は、其同躰たり分身たる其妹と相抱きて生れたるなり。爾來、汝兄妹切に同愛し、出る時は相伴ひ、語る時は相應じ、嘗て些さかも違ふ所なかりき。余、其親愛の切なると、其相助の睦なるとを見て常に樂しみとなしぬ。

去年、余、西方を旅して家に歸れる時、汝等共に迎へて曰く、請ふ之より双立し、兩々發育して、家父の左右に侍べらんと。余曰く、可。則はち、汝に與ふるに源家の冑を以てし、汝が妹に平氏の旗を以てせり。余は汝等が雄々しく、亦優しきを見て、感謝せり。

爾來一年、汝は當に家を出で丶大ひに戰ふべく、汝が妹は當に家に留まりて大ひに家政を理むべきの時となりぬ。茲に、明治二十六年、春三月、汝に冠せしめて、新に名を與ふ。汝は、自今「評論」と稱ふべし。

惟ふに、將來、汝が遭遇すべき困厄は、之を過去に比らべて更に太甚しからんとす。然れども、汝が筋骨既に固く、汝が歩武既に確かなり。汝が、精神は、恐らく友を集むるに足らん、汝が氣力は盖し逆流を溯ぼるに堪へん、而して汝が經驗し學得せる識見は、汝が針路を正示するに足らん哉。但だ夫れ、人は流の葦の如く、友は客舍の旅伴に異ならず。汝、常に號告して、天に祈るべし。汝が、頭上に明光々あり、汝が

胸中に赤誠あらん限り、汝は倒るゝとも尚ほ起くべし、死すとも尚生くべし、滅すとも尚存らふべし。

敢て、一言を汝に餞す。汝たとひ政界に入るとも、斷じて政黨に列すべからず。汝たとひ時事を論ずとも、決して政客と競ふべからず。余よく汝を知る。汝が使命は必らずや、此に存せざる也。

政黨の爲に掛引して、蘇張の辨を揮ひ、瞬忽の政機を察して風雨を日々に警報するが如きとは、他に其人あり。汝もとより之に慣れず、亦決して慣る可らざる也。

但夫れ、政海の大流を指示し、當時の常風を標針し、正確にして健全なる輿論を發表し、ことに下層に埋もれて塵芥の下に隱れたる清溪の音に耳を寄せ、鬱勃して而して未だ發せざる忠誠赤心の情に鼓動を通じ、病弊の根元を診察して其の當藥を量議するとの如きは、汝は或ひは希がひて以て之に任ずるとを得べきか。

且つ、今の世は、社會問題の世なり。近時の日本は、彌よ其の解釋を要求すると切なり。世上、誰か之に向つて應答するとを爲す。一觀するに、其人多し。然れども、吾黨同主義の友にして、斷じて之に當るもの、未だ多しとせず。汝、亦勉めて之に任ずべし。

汝亦知れり、人は最高の所より着眼して、最下の底に眼を徹せしめざる可らざるとを。然れども、今の人、未だ最上至高の觀念を信念すると深からずして、而して、單に平俗凡一の地歩に立つ。其着眼は地平線的なり。高く上を望見せざるが如く、亦深く足下を穿つとあらざる也。汝は是れ、神學の眼を開きて、社會の暗黑界を觀察すべし。哲學道義の腦力を刻して、凡俗通常の事務を議すべし。詩神歌精の翼に抱かれて鋼鉄の利を朝たの市場に求むべし。

余が、愛子たる汝「評論」。茲に汝が舊衣を納めて、新たに汝に鎧裳を與ふ。一枝の筆以て汝の釼とすべし、十枚の紙以て汝が旗とすべし。之れを纏ひ、之をかざし、之を揮ひ、以て新戰場に打出でよ。余、手を擧て、汝が祝福を祈る。

小說

ローレンス

第二回（下）

インヂロー作
若松しづ子譯

さて世は麗らかなる春の時節となり、四月の頃には妹背を固むる式を擧げんとして、婦人は心に湛ゆる愛々しさに、己が嬉しさは世を誘ふて一際の幸福を増せしかと疑がひ、百花咲きにほふ林に逍遙きしては美とに愛らしき眺めが我が心に浸み渡る心地し、草木と共に和らかく、温かき日光に逢ひ初めて、伸〳〵と生ひ立つ嬉しさをさとり、待詫た春の長閑な日和に瓣、一瓣、開け行く花の床しき樂しみを味はひ升た。深くも望を置いて己が生涯を全ふするになくてならぬものと假さだめたものが突然失せ行いた時心の結ぼるゝまゝに人知れぬ詫住ゐに身を潜め、世を果なむ心弱き人も多あり升が、さる人は長くも我が情を強制げて、却つて人情薄く、威儀たけ〳〵敷なり行升。是に引かへて、心の奥くには欠きたる處ありて、常に饑へて食を得ぬ思しながらも、強めて其苦痛に慣れ近づき、不幸中に幸の潜むことなくば、世に生れし甲斐は何處ぞと神妙に時節を待つ族も有升。

さて此壯年は戀愛の痛苦を擔ふ身なれど、顧れば已が身の無事平穩は家族三名が畢生の苦樂の懸る處で、客を待つ門を廣くも開いて饗應振り淺からぬも己れを慰むる手術なり、庭に咲揃ふ草花さへ他が見る眼あつて植たる譯ならず、眼は彼を見て悅び、耳は彼の笑聲を聞いて始めて安んずる位でしたそれ故壯年は家にあつては以前と變らず、己が口元にほゝ笑む術を敎へ升た。

かくして時は過ぎ行き、青葉の繁みに春は中半を告ぐる頃、隣る市に用事濟まして歸り來る壯年は己が所有の林を横切る鐵道線路に設けたる停車塲で車を下り升た。この邊は殊に靜かな淋しい處でしたが、フト小供を連れた女の同じく下りたに氣附升た。己れは先づ先へ拔けて足早に歩み、今しがた通り過ぎた林の中へ引戻し升た。何が爲となれば、最前此線路を見渡す處に腰かけて人待顏なりしは正しく彼の婦人と見て

は、たゞ何となく名殘りにも一度其顏が見度なつた故でした。近づいて見れば、婦人は慥かに戀人を待つ樣子で、嬉しさは滿面に現はれて紛れもなく、ローレンスがそこに居らふと居るまいと元より聊かの頓着なく、言葉かくれば答へするさへ朧ろげに、美しひ手もて片頰を支へて居り升た。

壯年はこれ限りの逢ふ瀨とおもへば、去る可き身を引立兼ねて、それとはなしに咲き亂れた草花を摘み始め升た。併し列車の止まる音も耳に入り、はや行かねばならぬ時も來て、爲す可きとも望む可きとも絕えてなくなり升た。イザとて身を起し、摘みとつた花を婦人に贈らふとして近づき升たが、婦人の心はこゝにあらず放心のまゝ手さしのべて、出されたる花請とらんとして俄かに思ひ起したは壯年のこゝにあると、深くもわれを戀したとなどで。「ローレンスさん、有難う御座い升よ、この後はどふぞ忘れて下さいましよ、私のとはモウお忘れなさつて」といひさま、美しひ眼は一際怳惚いたし升た壯年は何と答への出來ぬ間に突然こゝの閑靜を破ぶつて立現はれたは最前の女と子供でした。ミユリエルは何氣なく、「あなた何か御用ですか」といひ升た。婦人は急き込む樣子で、口早に、「あなたのお名は、お名まへが承り度のです、お名まへを仰つて」といへば、一方は驚く樣子なく、機嫌も損ねず、たゞ程なく變る可き我名のとをおもふてか笑ましげに、顏をあげて、かく〳〵と答へ升た。此間に子供は近よつてミユリエルの袂を引き、其花をと請ひ升た。ローレンスはこのまゝに二人を置いて去るは心好からず、さりとて來かゝる戀人を待ちうくるも嫌え一寸啄しを容れて「此の御婦人に對してあなたの御用は？」とゝひ升た。要らざるさしでと件の女は急に腹をたて、「誰がゆるしてあなたが其お尋ね？あなたなどが御承知のとではない、たゞ可哀さうなはこの娘、ナニ此御婦人………といひ升たが、此時ミユリエルは顏を擧げて互に顏を見かはし升た。

女はさえ〳〵とした聲を一際張りあげ、「今こゝへ來るあの人、あなたが近々嫁ふといふあの人、あなた決してあの人のいふとを實になさり升な、世の中には外に男は澤山ある、善い人もないではない、わたしの口からかふいふては惡るけれど、大方はあの人に劣ることでは有升まい、キツト增しで御座りますよ」といふてハラ〳〵と淚を流し升た。ミユリエルは其言葉

の趣き、とにかくと想像する恐ろしさに、心の駒の狂はん斗りなり、眼を見張りて女の顔を見詰めて居り升た。ローレンスは邊を見廻しつゝ、微風に花は招き、子供は歌ひ、日和を悦ぶ小鳥は囀りなどして、萬づ嬉しげなる中にこれが現かと眼耳をさへぎる現在を疑がひ升た。二人の婦人は物をもいはず互に顏を眺めて居り升た。

壯年は稍々口を開いて、「何さまこれは怪しからぬことです、併し現在妻を捨てゝ他に娶らふといふ人ならば、法律ならば知らぬこと、德義や、條理に讓つて我が意を枉ぐることでは有升まい、あなたは實にお氣の毒ながら申條を立やうとて、けふここへおいでとならば、それこそ少しお心得がちがふかと存じられ升。察する處に違はずば、實に世間有振れた、憎くむ可くも氣の毒なる話しで御座らう」といひ升た。

ミユリエルは僅かに嘆息し、壯年が恠しとおもふほど落着いた調子に「明らさまにこれ〳〵と話して下さい、あなたがあの方の奥さまとでも思はなければ、今のお話しは解し兼ねます、あなたはあの方の奥さまですか？御腹藏なく仰つて」と賴み升た。女は心を靜めて流るゝ淚拭ひあへず、「仰の通り此身こそあの人の妻で、二人の緣は却つて互の不運と申すものです」此時ミユリエルは彼の人の近づく足音を聞つけ、悲嘆と絶望の切なさを一聲高く漏らし升た。

影なる男は居幷らぶ二人が驚ろき怒れる有樣に一部始終を推量り、木立の中より我を忘れて走り寄り、婦人の側へ參り升たが婦人は顏に兩手を推あてゝ見向かぬ處へ例の女はツト進みよつて男子を睨つけ升た。ミユリエルは泣聲になつて、「ヘルバートさん、これは何ごとです？」と訴へ升た。男子は口を開らき得ず、口惜しさしに齒がみしつゝ手を擧げて、前なる婦人を打ん氣配でした。人あつて、俄かに女を拂ひ除け、我身を間に介み升た。見れば骨柄逞しく、屈强な人で、ヘルバートは須臾にして其名を思ひ出し升た。壯年はまづかふいひ升た、「君と僕が終日爭つて角力つた處で、益のないことだが、つまり腕力沙汰はやめにして、君が二人の婦人の歸りをつけねばならぬ處で有らう、躊躇せずといふ可きことはいひ玉へと申升たが、一方は情慾と悲痛に脆くも打負かされて、傍らへ身を投げかけ、「嗚呼、万事終れりだ、アヽミユリエル孃、ミユリエル孃！」と呼び升た。女はまた、「あなたとわたしの

縁は申さば腐れ縁、夫婦定めも本の一時若氣の戯れごとと、疾に明らめて居り升ればこそ子供もわたしもお世話にならず、稼いて其日を送つて居り升た。元より身分の違ふことで、それを承知で………男子は遮つて「モウよし〳〵、澤山だ、穏かに事を分けていわれては、腹を立るゝより輕蔑まれるより一層つらい、ア、僕の妻、實に妻に相違はない、それで何も申すことはなし、今の話しの通りです、ミユリエル孃も聞かれた通り、何とも僕一人の罪、ゆるして下され。」

その時女はそろ〳〵と行過ぎ升た。最前から唱歌歌ふて居つた小児は其後に續き升た。ミユリエルは顔を蔽ふた手を下におとし、さまで己れを慕ふた二人の前に茫然物もいわずに居り升た。兩人の間に烈しい言葉も有つた樣でしたが、一向それは耳にはいりませんかつた。終に自分が愛した方の人が身を屈めて一度其額に接吻し、數歩退つて、其姿を眺め、手を合せて罪を謝する風情でした。婦人は物いはんとして言ひ得ず、間もない中に其人は去つて影だに止めませんかつた。婦人は彼の人の去つたと、ローレンスの身動きもせず、側に在ることに氣づき、再び手を顔に推あて升た。須臾して誰やら遥か向ふに哀願する樣な聲を聞升たが、それに應ずることは出來ませんかつた。それから傍なる人が自分の手を取つて引起さんとするに敢て拒まず、共に連れだつて家に歸れといふとと覺り升た、家は遠くもなく、直ぐそこで、實に詫しい家でした。さるやんごとなき家柄と血筋につながる婦人の叔母が不具に生れついた處から、身の行末を思ふ餘儀なさに、己より年かさで、武張つた牧師に嫁ぎ升たが、婦人は世に孤となつて、他に近き縁類なく此家に同居いたし升た。ローレンスは婦人を伴ひ歸り、新に起つた悲歎ばなしを家の人に語る役目を己れに引うけ、別間にある夫婦の人に見聞したまゝの無慘な實情を話し、さて用を果して退り出で家に歸り升たが倘兎角亂るゝ情緒を格し得ず、胸を騒しつゝ夜晝例の家の垣を行つ戻りつし升たが、たとへば、若葉の萠出ること、地に映ずる其常なき影、白雲の徐かに行來すること、山の端に掛つて四方の景色に趣味を添へる月影、眼にふるゝ萬事が壮年の敵となつて、似寄りもし、反對もして戀愛の情をいよ〳〵燃し升た。

併しミユリエルにとつてはそれが何といふことなく、たとひ

婦人の安穩を買はん爲には、甘んじて、どの樣な祈誓をも懸け絕望的な熱涙を流さふとも、たとひ己が絕世の失敗よりも此婦人の不幸が忍ぶに難いといふほどの情を運んだとて、ミユリエルにとつて是に應ずる何の感も起りませんかつた。

婦人は音づるれば其人に逢ひ、兼ての歎は蔽ふて心靜かに普通の語りに時を移し升たが、壯年は其聲をきゝ、氣力の薄らぐ眼の哀げなるを見、愛らしき姿の細り行く樣を認めて、一つには一個の雄士として己れの意氣地なきを耻ぢ、又一つには適れ忍び通す婦人の心の床しさを思ひ、自分の苦痛に打負かされんとして「モウ忍び切れん」とて窓から跳び下り、闇を辿りつゝ我心と角力ひ升た。

婦人はいよ〳〵悲歎に惱み升て、壯年のさまでに深き愛情もそれを愈ことが出來ませんかつた。壯年は婦人の心に何の感をも起し得ませんかつた。さてまた濃情なる壯年の心の駒も一度狂ひ出しては堪得ぬ苦通と眞劍勝負を始め升て、野生の鳥が籠に閉ぢ込められたと始て知つて、よしなき羽叩に我と我身を傷けるが如く、壯年は我が情慾に抵抗して猛り狂ひ、果ては涙をふるひ升た。再び婦人を訪ひ、切めて先の日の如く、其聲を聞いて遣るせなき情を慰めやふとし升た時、婦人は嘆息して怪しきまで物靜かに、「あなたは泣いておいでなさい升たネ」といつて嬌嫣な頭を下げて涙を流し升た。婦人は己が生氣を凍へさせて枯死させるかと思ふ心の冷たさが幾分かこの爲に弛むかの樣に考へ升た。自分の爲、みな自分の爲の此熱情なる歎きは幾分の心遣りになり升て、自然の温みを運び、自然の涙を流させ升た。

第三回（上）

其後幾度か音づれ升たが、面會を拒まれ升た。始めに家の人が「病中で」と斷り、續いて「靜かにして居り度があの娘の願故」といひ譯致し升た。其中急に病が重つて轉地させることになり升た。壯年の如く血氣熾んに、豪氣のたちで、千斤の重荷も敢へて辭せぬ人にても、長き路程には必ず疲勞を感じ始めるもので、秋になる頃に「あの娘もいとしや、この頃に死ぬるだらう」といふ噂を聞いて、常ならず驚ろき、今度は心に餘る悲哀を家の人に匿す勇氣さへ去せ、婦人が外の緣者と同居して居つたデボンといふ所へ南をさして旅立致し升た。其の緣者といふは物和らかな深切さふな女づれ故、それに文

通して婦人の死なれる前に一度の面會をと頼み升た。ミユリエルは幾分の慰めになるならばと、枉て其請を容れ、顔見ることは免し升た。今は浮世に存らへん望も果たる身にその樣なことを兎にも角にもと思ふて、伏戸の傍らに熱き涙を流す壯年に劬わる言葉一ッ二ッいひ升たが、側の人は「最早それで充分、臨終の時も間近ければ、お逢なされたなら、いざ」とて彼を立ゝせ升た。さて一眼見て、死といふものゝ慘憺なるを心に悟り、燃ゆる情炎を幾分か冷されて家に歸り心を靜めて天命を待つて居升た。

ミユリエルの命數は年と共に迫り引き、死の門の開らくを今かと待詫る者の如くでしたが、其扉はかれを受け入れず、日足の少しく延行く頃どうやら花の咲く時節が待遠になり、櫻草踏み分けて例の林にそゝろ歩るきするとある夜夢みて、嬉しい樣にも感じ升た。花の盛の年頃にさもありさふなことどもです。

菫草が開き初める頃にミユリエルは稍く臥床を離れて歩を拾ふ樣になり、青〱とした若葉と麗らゝかな日和は心の疲勞をなぐさめ升た。併し其衰へたる顔の艶なさは彼の林中に世にも恐ろしき言葉を聞いたあの美しいミユリエルの影とよりは見られませんかつた。

世は春の中半になりて、海の表さへ華やかに紫色を染め出し、咲き亂れたる椿の花は枝を離れて、庭もせに堆高く、そを吹き散らす風さへ立ませんかつた。ミユリエルは香ばしき五月の花に圍まれつゝ、細々と衰へたる躰にも聊か血脈の暖かき鼓動を感じ始め、天の命なれば惜からぬ命をも繫ぎとめ、恭くしく畏こみて世に存らふる稽古をし始め升た。ある日靜かなる庭に腰かけて居り升と、誰か向ふの方に自分を見て居るに氣附き升た。又の日同じ樣でしたから、事なかれと思ふ身のいとゝ懶く、再び此方へ來る足音を聞いた時手まねして「ローレンスさん」と呼び升た。因つて壯年が近く來升た時。人の上にさへ胸を騷がす樣子見が何より厭はしとて、倦はてたる口振りに詰るが如く「どふしてまたこゝへ?」と問ひ升た。壯年は答へて、日毎の煩悶に打勝てぬとも有り升、據なくといひ升た。

婦人は歎息して「マア、まだ其樣なこと仰つてか?」兎もあれお氣の毒に存升」といひ、又己れもどふやら生る望の出來たか

の如く、頼む樣にも、諭す樣にもかふいひ升た。「どふぞして私は忘れて下さい、思召を他に轉じて、其深き情けを此身に負はせずとゆるして下さい、私を愛して下さるとを思ふ斗りが心苦しく、たいぎなれば、何卒忘れて下さりませ」といひ升た。

壯年は答へて「それは强めて見ませう、一生かゝつても其成功は覺束ない、又成功した處で、其あと世に處する術も知りません、實に此苦痛は今は僕一身の片はれであつて、とりも直さず、我ものですが、併し……………併し强めて見ませう」といひ升た。婦人は懇ろに慰めて、壯年が家のこと、父のこと、慈愛深き勇しき老夫婦のことなど語りつゞけて「それらのことをお忘れなさい升な」といひ升た。婦人の言葉がどふと言ではなけれど、相見ては心の痛みもやゝおこたり、袂を別つて、元の世渡りにかへり、夏中人の噂に追々丈夫になる樣子と聞升た。併し秋の立歸る頃に婦人は再び萎れ升た。戀人を失なふと共に其愛の消え去るほど慘憺なることは有ますまい、愛して愛せられぬ人は其愛に生命を保つて再び人にゆるす折をも待ちませうが、此婦人、ミユリエルに於ては何もかもなくなつたのでした。愛した人は現在なき人になつた己ならず、過去に有つたと思ふが誤謬で、さういふ人の曾てなかつたと同じでした。

この男の愛といふは人が可愛き小鳥を捕て羽ばたきするまゝを懷に抱く中其鳥が俄に翼を擧げて飛び行くといふ樣な潔白な愛では有ませんかつた、それならば、たとひ其戀人は失せても、記憶には永久に生きて愛せられて居りませう、さりとて決して此男に格別な惡意が有つた譯では有ません、元より其淸き鳥と馴れ親しんでは甘んじて是と別れ、其麗しき聲に耳遠くなる人は有ません、たゞ其鳥を止め置く立派な氣骨もなく、そを温むる情の温かきもなく、聲のやんだあとに反響をひゞかす意氣地さへ有ませんかつた、悼む可きは其男で、其人の爲めには樂しかりし音樂は全く絶え果て、終には其樂しささへ忘れ果てゝ何ともおもはぬ樣になることでした。固より惡意のある人でなく、たゞ人の中に最も憐む可きもの、即ち荏弱に、心冷かで、己れは知らずとも墮落した人でした。ミユリエルはヘルバートの上を思ふ度毎に永遠に其人の存在を蔽ひ度、願くは己が心にも長く現はれぬ樣にと祈り升た。

併しあれほど言葉爽かに、あれほど潔白らしく、あの樣に細く々と優しく、あの樣に鷹揚に信實な人と見へたに、尤も時より我こと已に落膽し過ると思ふたとも有たが、深く天帝を尊信し、且つ厚く自分を信じて呉れたと思ひ喞ち升た。彼人は其後疾に影をかくし升たが、其妻なる人は聞く處によれば病に罹り、貧困に迫り、悲しんで居るとのことでした。

ミユリエルは慰むる手紙を認め、且つ多からぬ己が貯財よりと欠けぬ樣にと仕送りをし、何卒此ことは秘密にしてと申添へて遣り升た、其時始めて殘忍な始末を委しく聞かせられ升た、それのみか、其婦人が間もなく世を去り升て、其親戚は恨むる所はなく、非常に感謝して其よを知らせ、かく申送り升た「死人もいまはの際まで頻りに夫に逢度がり是非一度は來て玉はれと切に賴み遣り候へども一向聞入れ御座なく候ひし、殊に貴孃へ實情打わけ申候段只管詫入り候ことに候、御承知の通り其邊は大きに立腹いたされ候樣子に候へども、臨終の際にゆるすと一こと申呉候ても好かりしものをと殘念に存候、併し眼を閉ぢ候後稍く返事參り、其一條は容捨相ならず、斷して永久に容捨す可らず」と申參り候云々。此手紙を讀むミユリエルの心にさては此身の愛せしは此人なりしかと身心寒く戰き升た。

それはさて置き、此男子は尙一層墮落し升た、同じなり行を全く趣をかへて申述べ最早身は自由なれば、御許に參る可し、何はともあれ兼ての目論見通りに致す可と申送り升た。

ミユリエルは憤然と心に怒り今は其人を蔑視果て、恨めし涙ハラ〳〵と流し、たつた一筆「私も最早御目にかゝり申すまじ」と返事いたし升た。

これからは眼に見へて衰へ行き升た。人を輕蔑するほど心を碎くことはありません。それで元氣は秋の木の葉の凋むと共に一日〳〵と枯れ行き升た。一度は床を離れても、今度こそは、早最これがをはりで有らふ」と自分も思ひ、また側の者もおもひ升た。

さて彼の人が「この度こそは」といふ噂を聞升た時、心寒くなりまして、其身は我ならぬ力に引かれて、婦人の元に到り升た。固より其理性は是に反對し升たが、生死もたゞならぬ熱情と、絕望的の苦痛が彼を引て又も此始末に及ばせ升た。壯年は婦人が再び病氣といふを聞込みては、其元に來るより

他に爲すことをも知らず、來ては又來た詫をしたのでした。此病ほふけたなよやかな婦人が其細々とした白き手に壯年の亂れた心の綾糸を悉く握つて居て、自由を得させませんかつた。彼が雄壯なる男子の魂は悉く婦人に獻げて、今はわれのものでは有ませんかつた。

婦人は見て彼を憐れみ、かふいひ升た「アヽあなたは此あわれなるものをよくも長く愛し續けて下さる、私はモウそれはゆるして樂にして頂き度、いつそ愛しはせぬといつて頂いたら、どの樣に心易くなられませう、世に永らふる時も、最早長くはないと思ひ升に、實に間もないことゝ思ひ升に」と怨じ升た、壯年は俄かに身を起し、己れがかくまで愛し、身にかへて安ぜんと望む其人をかくも惱ます因果がおぞましとて、又もや婦人の言葉に從ひ、詫言して再び來るまじと約しました。婦人は聞いてホロ／＼と涙を流し、「マア待つて下さい、お話し申度ことがある、お聞かせ申さねばならぬことが」といひ升た。

第三回（下）

先づ第一に聞いて下さい、私とて神さまの惠は存じて居り升、私が何やかやと失望已に沈んで居ると思召しては下さり升な、私の心はどふやら靜かな夕ぐれに似て、今となつて思ひ惱むことは一切なくなり升た。愛情と云ふものはヘルバートさまにむごたらしく殺されて微塵も殘らず、最後の期は刻々迫り來るといふ塲合です。先づ姑らく坐に戻り、心を落着けて私のいふことを聞いて下さい、第一に私の顏を見て下さりませ、ローレンスさん、御覽の通りで、私の顏は青ざめ、手も此通りたとひ前かたにいかほどの美が有つたとて今となつては其影も殘つては居りません。ローレンスは眼を擧げて可憐の姿を見詰め、物いふ眼に疑を止めず、以前に増して美事と答へたき樣でした、婦人は冷やかに穩やかな聲して言葉を續ぎ「私は常ならぬ苦痛を味わひ升た故、私に管ふて下さる方が同じ樣なことに惱まれるを何とも心に忍びず、自分の力の及ぶ限には、其苦痛を解いて上げ度いとおもい升、それにつけ、近來篤と考へ直してこの樣に覺悟する樣になり升た、といつて一向顏をも赤らめず、あなたの生涯は、決して此身がさうあれかしと願ふた譯では有ませんが、あなたの御生涯が此身の故に損なわれたと知る上は同じ歎きの中何れか一ツお

撰びなさる樣いたすが至當かと思ひ升。たとへば、思召よせられた其人が死なつたとて息引とるさま御覽じるでなく、心引く置形見をお身の圍りに殘さぬが、切めて增しでは御座りませぬか、遙るか增しかと思ひ升、さりながら其を妻に迎へ、間もなく身まかつた跡弔ふて、いや增さる歎するが却つて心遺りになる、滿足なと思召さば、此身はさうと決して思ひませねど、萬々一その方がよしと仰しやらば、イヤ／＼決して粗忽にはお答へ下さり升な、何れなりへの御決心はあなたの御一身にこそ大切なれ、此身にとつては何れともさしたる管ひは御座りませぬ。併しいよ／＼只今申た通りの御處存ならば、あなたの妻となつての後死出の旅路に參りませう、婚姻をいたしませう。」

壯年は何れをとりしとは申に及ばず、心迫つて涙はら／＼と落し、彌增す歎きを撰びとり、そを心に收め、我がものとしてこれを味わひ、己が世渡る燈とも見し彼の人の眼の閉ぢん時まで側に介抱せんと決心し、急き込むまゝに言葉も整わず「僕の撰ぶ方は……僕の心はあなたに献げたもの……この胸によつて眼を閉ぢて下さい。」併し此決心は賢くあつたかといふに始めのほどはさうみへませんかつた。婦人のいよ／＼衰へるさまを見て「其とはいつが宜しからう」と問ひ升と「いつにてもあなたの御都合の時」と答へ升と、どちらとも一向心にかけぬもの〻如くたゞ弱りはて〻、冷々として居り升た。時々心の中に契約の指環が此指にはまるまへに世を免れ去るが兩人の爲だらう、それに越すとはあるまいと考へ升た。併し果してさうはならず、其日は來り、既に行き、日を重ね月を重ぬる中に死といふもの、其蔭にあつては戀も戀の恨みも凡て人事の朧ろげになり行く其死は退き去つて、生命は再び頭を擧げ、他の命に結びつけられたことを發見し、夢のさめたる如く不思議な心地がいたし升た。其後姑らくは事もなく穩やかな日を送り升た。再び來りし春には床を離れて咲き揃ふ花の中を歩み升たが、此度は獨りでなく、件ふて介抱する人があり升た。婦人は心の中に「何故にこの樣なとせしぞこのあとはどの樣にせんと思ひ升たが、夫なる人は深く潜める其情を察して何とも口を開きませんかつた。婦人は何をしでかしたとかと我ながら恠みて、フト眼を擧げ、よくも見ざりし夫の顏と眺めて、かく／＼此通りな眼鼻だちよと認むる

と共に雄々しく、沈默なる夫の心中に量り知られぬ滿足と喜悦が潜んで居ると、妻の爲に殊さら控へてそを口には出さぬヿと覺り升た。

ミユリエルの忍堪の深さ？彼の家に輿入れしてよりは通例新嫁の位置に直り、家の人の氣に入らふとして濃やかに心を用ゐ升たが、果して一同に悦ばれ升た。併し矢張り「何故此様なヿをしたらうか、此あとはどふしてつとめ遂ふせやうかと思案し且つ、吾夫こそは凛々しく立派なる雄士にして、其上人に勝れて情け濃やかにおはすものを、此身が聊かの愛情さへ運ばぬとて不足らしくは仰しやらで、あの様に嬉しげにもてなし玉いぢらしさと、二人の上を啣ち升たが、姑らくする中に其こともおもひたへ、心の外に措いてたゞ時節を待ち升た。

兼ねて死ぬる覺悟はいたし升たが、此ミユリエルはまだ死ぬる時が至りませんで、軈て雛人形の如く可愛き初兒の顔を見升た時、一生の幸不幸を天秤にかけて、不幸の方のいか程量まけするヿよと感じ升た。愛らしき其赤兒の眠る時は柔な母親が提こむが如き慈愛もて介抱し、眼さむれば、乳房含ませて、其様子を眺め、眺めて飽かぬ悦びに心落居て、久して我を忘るゝ位でした。ある日ミユリエルが赤兒を膝に載せて居り升た時、夫と父は遠乗に出かけんとして側に立ち、孫自慢の祖母は「赤ん坊はかふしたもの、あゝしたもの」と得意に様子擧動の講譯をして居り升たが、一寸其話しをやめて「此様に父に似た赤兒も珍らしい」といひ升た。ミユリエルは今まで其ヿに氣附かず居て、見較ぶるともなしに上を見升と、ニツコリする夫の顔と見かはし、ハツトおもふ顔は美しくホンノリ咲き初めた花の芳りに似て居り升たが、顔に現はれた其情は見せとも知らせともないと思ひ升た。併し夫は早くも其様子を見てとり、其微笑の中には嬉しさと限りない愛情とが籠つて居り升た。そこで妻と幼兒に接吻し、出て行きさま、「おばあさん、けふはあなたが番人、よく二人に氣をつけて下さい。」「其様なヿ改めていつて呉れずともだ」といひ升た。然るに兒が産れて三週間たゝぬ中ローレンスは旅に行き升た。固より行くは厭ひ升たが、さりとて餘儀ないと故と申升た。ミユリエルはあとに殘つて母の如きばゞさまの介抱をうけ、年こそ違へ、樂しく話しくらし升た。

ミユリエルは夫が何故此時に限つて旅立し玉ひしかと訝かる樣子を見せ升た時、老婆は「イやなに、嫁どの、さう申て行つたよ、立つまへに、ミユリエルが何とも尋ねなんだら、其まゝにして置いて下さい、若しまた不審がる樣子が見えたら知つたことを話して」といつて行つたよ」ミユリエルは笑ひながら「何ごとです？それでは私が改めて御尋ねしませう。「アノナニ、二月程まへのことで有つたよ、おまへの先嫁るのであつたお人が御座つてな、これ驚くまいぞへ、モウ行つてしまふたのじやもの、其お人が御座つて、ローレンスは直近間で面會した處が、其お人がおいひのには、「モウ僕も海を越へて遠方へ行くのじやから、たんだ一度おまへさんの細君に逢ふて、一言昔しの詫言がし度いといつたさうな」。マアどふしませう、逢へと仰しやりはなさり升まいな」「なんのその樣なこと。」迚も〳〵逢へることではない滅多に逢とは仰しやり升まいな、慥かで御座りませうな」老婆は一層聲を柔げて、「なんのあれが、なにしに、いつでもおまへの氣に逆らふたことしたこともない、よく心を呑込んで居るものを」といひ、ミユリエルは「本にその通といひ升た、」併し戰栗はやみませんかつた、老婆は言葉を繼いで、「其日、二人が逢ふた時わしも一處に居つたから聞いて居たが、あれが、「妻が御面會しよふとは申升まいといつて居たよ、其時ミユリエルは思案して、それからあと何とも申しませなんだか、僕もそれは好みませぬともなんとも？」老婆は何氣なく、いつもの柔和な物靜かな聲で「なにその樣なこと、面會をせうと、せまいと、あれが何にしに管ふぞ」？「なぜ管ひ升まい？と、ミユリエルは問ふて、返答を待遠に思ひ升た。なぜといふて承知して居るではないか、よふく承知して居るもの」といつてホヽ笑み、「この娘はまた、おまへが、あれに心から打解けて居るといふことはあれが知らんことと思ふて居たのかへ？」

ミユリエルは「それでも知つて居ると一度も申したことがありませんもの」「さやうか、併しそれは其筈かも知れぬ、兎角舊いことはいわんが増しと思ふのでもあろ、あばき出したとて、何の足しにならふか、人が滿足して居る處へ、いよ〳〵不足はないかと尋ねたら要でもないとおもひ出し、直ぐそれと返答は、出來ぬもの、イヤ、中よふ、嬉しく穩やかに暮らして居たら、入もせぬチヤ〳〵入組ることではない、それ〳〵かふいふ

て居た「妻は御面會申は好み升まいが、何れ其中時節を見計らつて、何とか一言御手紙を上る樣取計らひませう」とか申て居たよ、」「本にそれならば易いとです。」柔和き聲はまた後を繼ぎ、それでローレンスはあの人の子供をつれて行つたのだよ、あの兒については幾度か文通もして外國へ一處に引つれる筈であつたが、この頃になつておやぢが連れられぬ都合を申越したのだよ、人の話しでは賭博などで餘程御金をなくし、これから稍く稼せいで、正直な世渡りをするといふのださうな、それでローレンスが子供を連て行くをしほにお金を持つて行つて旅費の手助にしたのだよ。ユリエルは其話しを聞いて何んとなく嬉しく、たゞローレンスの話しがつゞけたさに「それではわたしが打ち解けていとしがつて居ることは知つておいでゝせうか？」知らいで何としませう。が、おやぢによく似てな、あれのをやぢも娘に何も尋だてしたことは一度もないぞへ、有のまゝを信じ切つて居たとて娘の話しで聞いて居るよ、女の心をよく見貫いて居たものじやが、ローレンスもそれと同じと、おまへがあれをいとしがる樣になつたとは承知しても、口へ出して何もいふとではない、隨分と大悠な人もあるもので、な。」

雜録

雜感

山月子

(一)艱難の生涯と愛の傳道

使徒ヨハネ曰く「主は我儕の爲に生を捐たまへり是に由て愛といふことを知たり」と、吾人々類の罪深き、世の始めより我儕の間に顯はれ給へる神の愛を知ること能はず、主世に降りて我儕の爲めに艱難辛苦を甞め、十字架上の死を遂げ給ひし、其事に由りて、始めて愛といふことを知りたるなり、吾人若しヨハネの言を透して主の意に達せば、必ず感謝して艱難の生涯を踏むことを得べし、而して吾人が愛の爲めに艱難の生涯を踏むことは、不言の雄辯、無聲の傳道となりて、主の愛を世に知らしむべし、彼の口に愛を唱へて、心に艱難を避るが如き人は、何を以てか愛の傳道者たることを得ん。

(二)神の如き人

神の大攝理中に心身を任せ、其思其言其行凡て自然にして作爲に非ず、高大も神の如く高大に、恩惠も神の如く恩惠に、

忍耐も神の如く忍耐に、以て人世に處することを得ば、其人の幸福幾何ぞ、吾人自ら信仰の不足を感じて、主の前に涙すること多し、オヽ主よ、爾の子を顧み給へ。

(三)信仰と修錬

信仰には修錬を要す、修錬なき信仰は室咲きの花の如し、美なりと雖も、外の風に觸れしめば、忽ち散落せんことを恐る、吾黨の信仰は、宜しく高山の絶頂に在る松栢の如くならざるべからず、雨に耐へ、風に耐へ、霜に耐へ、雪に耐へ、其根と其幹と其枝と、益〻堅く剛からざるべからず、吾人は今日に於て深く信者の修錬を希望す。

(四)修錬の方法

修錬の方法は人に由りて異り、パウロとヨハネ、ペテロとヤコブ、共に同じからざるなり、自ら得たりとして、妄りに他を毀るが如きは、未だ至らざるものありて存す、吾黨の修錬は、自己の人物をして主の如くならしめ、而して他をして自ら主の如くならしめんとするにあり、故に主の名を重んじ、主の前に謙遜なることを欲す、夫れ「天に在もの地に在もの及び地の下に在る者をして悉くイエスの名に由て膝を屈めしめ、且もろ〳〵の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしむること」是れ神の聖旨にあらずや。

(五)基督の名

嗟呼現今の信者、何ぞ基督の名を重んぜざるや、祈りの時「主の名に由りて」といふも、眞誠に其名を敬愛し尊重する心ありや、「ナザレのイエスキリストの名に由りて起て行め」といひしペテロの信仰、誰か之を有するや、或は語るに言と智慧の美たるを以てし、或は行ふに犧牲の實を以てするものありと雖も、其心主に誠忠なる、其言行主に謙遜なるパウロの如き人ありや、將た又信者てふ對面を保ちて、自信自重する者幾人ありや、孔子の曰く「君命を辱めず、士と謂つべし」と、吾人は支那史を讀みて、其士が君主の爲めに使し、他國の君臣の間に、其使たるの面目を全うし、而して他の君が之に感じて「貴國に卿の如き士幾人ありや」と問へば、答へて「我君は仁慈聰明英略、我國の人物は賢者勇者雲の如し、我が如き者は車に載せ斗にて量るも數へ難し」といふ、其誇大、人を詐るとは、固より取るべからずと雖も、而も其君を重んじ、國を重んじ、對面を重んじ、而して自ら重んずると共に謙りて君主の

榮を輝かすの精神に至りては、大に取るべきものありて存す、嗟呼基督の子として、臣として、僕として、誰か斯の如き者ぞ、吾人は現今の時勢に於て、此語を發するの止むこと能はざるを感ず。

（六）哀苦に對する心

若し人あり吾人に向て、如何なる心を以て、苦痛悲哀に對するかと問はゞ、吾人は答へて、古への武士が君侯よりして、仁慈の賜を受くる時の心と、士の格式にて切腹の短刀を賜はる時の心との中間の心を以て愛を受くと曰はん、吾人は來る所の苦痛悲哀に對しては、最も沈みたる、最も嚴かなる、最も謹みたる心を持つ者なり、自らの心を岩の如くし、以て直ちに之を制伏せんとし、若くは心を無感覺にし、顔を側けて他を顧るが如きは、神に對して不柔順なるを思ひ、中心敢て爲すに忍びざるなり、吾人は信仰に於ては、苦痛悲哀は、愛の神が吾人を進ましめんとて下し給ふ所の賜なりとす、然れども其賜たるや、情に於ては誠に苦しく感ず、苦しと雖も是れ愛の賜なり、是に於て乎、吾人は實に言ひ難き沈愼嚴肅の心を以て、柔順に恭しく之を受く、而して謙りて主に祈り祈りに由りて之に勝ち以て進歩す、其苦境より救はれし時に於ては、言ふこと能はざる喜樂あり、主嘗て十字架に上り給ふ前、其弟子に教へて曰く「婦子を產んとする時は憂ふ其期いたるに由てなり然ど已に生ば前の苦をわする世に人の生たる喜樂に由てなり、此の如く爾曹も今憂ふ然ど我また爾曹を見ん其時なんぢらの心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者あらじ」と、吾人は此語に對して、心より感謝の涙を獻ぐることを得て、神の前に喜悦に堪へざるなり。

（七）敬虔の信者

誰か敬虔なる信者の心を知る者ぞ、彼は深く自らの價値なきを知り、而して主の限りなき恩惠を感ず、是に於て乎、最も謙遜に、最も謹愼に、自己の人物を顯はさず、時に觸れ、事に處し、自然に主の榮を顯はさんことを欲す、故に彼が靜默するや、知る人は其靈氣に感ずるも、知らざる者は、却て氣力無しと思ひ、活潑ならずと思ひ、而して其心裏の奥には、火山の內部の如き猛烈、激烈、雄烈、壯烈の處あるを知らず、他の氣慨ある男女が、彼に對して其人物の舊約的に歸らんことを望むは、彼にとりて一種の試みなりと雖も、彼は上に在す

基督を思ひ、獨り肅然として、情海波瀾の中に兀立す、孔子の曰く「我を知る者は其れ天乎」と、彼は當にいふべし「我を知り我を愛する者は其れ基督乎」と。

（八）大勇、大量

或人曰く、余は英雄の大膽を好み、大量を好む、其「人を見るヿ這ふ蟲の如し」といへるを好み、其天に嘯きて、宇宙を呑吐するの氣宇を好むと、滔々たる小量局促の人士中に、吾人は斯の如き人あるヿを喜ぶ、然れども吾人は此種の人に問ふ、卿等が呑む所の人物、果して如何なる人ぞ、卿等が包む所の宇宙、果して幾何の廣さぞと、吾人は自ら强しとする人の强からざるを知る如く、自ら偉大と思ふ人の決して偉大ならざるヿを知る、若し此强き人、一轉して主の前に弱く且謙るヿを得ば、是れ眞に强くなれるなり、此眼中人なき人、一變して人を愛し人の足を濯ふに至らば、是れ誠に偉大となれるなり、此豪放の心を以て、宇宙を我物とするが如き人、一化して「もろ／＼の天は神の光榮を顯はし、穹蒼は其手のわざをしめす」と心より歌ふヿを得ば、是れ實に其靈宇宙を蔽ふに至れるなり、たゞ難きは、其人の一轉化にあり、其一死再生にあり、若し天下の人物を呑み、宇宙を呑むと思ふヿを以て、大勇、大量なりとせば、其思ふ所の我を伏して、神と人とに柔順なるは、更に驚くべき大勇、大量に非ずや、而して此事たるや、人の力にのみ由りて能はず、必ず聖靈の助けを要す。

（九）預言者に同情を表す

ユダヤの人民は預言者を殺して其墓を建てたりと罵るヿ勿れ、現今の日本人は預言者を容るゝヿ能はざる人々にあらずや、彼等の小さき、蝸牛の殼に守るが如く自ら守りて人に從ふヿ能はず、却て妄りに他を嘲ける、曰く彼れ言ふのみにて行無しと、世に空言の徒多し、故に惜むべし彼の預言者は其空言家の列に入れらる、嗟呼吾人は、其劍よりも鋭き舌を以て、精神的に預言者を殺す者多きを悲む、評者の言に曰く「彼は言の人なり」と、吾人固より然りといふ、然れども言のみの人なりといふ者あらば、吾人は決して之に服するヿ能はず、夫れ世の空言者は、鳴銅の如く却てヤカマシキを感ずべしと雖も、彼の預言者の言に至りては、靈氣あり、活力あり、以て幾多の實行的改革者を起すヿを知らざるべからず、即ち彼れの言は是れ行なり、彼れの一言は、幾多實行者の動機なりと謂

ふべし、何を以てか之を輕んずるとを得ん、蓋し人物の大小輕重は其言行の末にあらずして、其本なる精神如何にあるのみ、試に吾人をして彼れ預言者の精神を察せしめば、中宵涙を呑みて人類の爲め國家の爲めに祈りすると基督の如きものあらん、否な基督彼に在りて斯の如く祈りするならん、其經營と難苦と常人の得て推すと能はざるものあらん、其至誠、熱血、紅涙、活火、胸底に滾沸し、發して氣焔萬丈の言を吐く、嗟呼何者か之に反動する者ぞ、吾人はユダヤの國民を憶ひ、併せて現時の日本人士を思ひ、潜々たる熱涙の獨り禁ずる能はざるものあり、嗟呼何れの日か、此精神界よりして、嫉妬、傲慢、頑僻等の風を除くとを得ん、勿論其日は預言者を要せざるの日なるべし、噫。

新土佐日記の續稿は茲に掲ぐるとを止めて、評論紙上に臨時收錄するとあるべし。



論説

雜感

左の一篇は、編者が演説の速記なり。同好の士ありて若し一讀を寄するにあらば望外の運ならん。

(前略)人間の力量の少いとに依りまして、若し之を長く引き伸ばせば自から薄くなり、又之を少さき所に集めれば、厚さは殖へる傾きがあるが、遠大なる　に、伸びない、所謂人間の德を永遠なる形に仕上げやうと思へば、其力量勢力の足らざるとを覺へ、又世に所謂勢力あり元氣ある形に之を引き伸はさんと思へば、自づから僻する所が出て參ります。然るに、古來歷史上、若くは現今の社會に顯はれて居る、世に謂ふ所の英雄豪傑と云ふものを見れば、其英雄豪傑と云ふとの性質の一ッは、亞米利加の或哲人が云ひましたるやうに、物に反對をする、物に敵すると云ふ事であります。又或詩人が云ひましたやうに、世に英雄と云ふものは、一つの狂人でございます。一方に僻し、一事件に激動して、已に對する者に向つて非常なる勢力を集めて向つて往く、之を現社會に於ける英雄豪傑と稱へ來つて居ります。夫故に、所謂英雄豪傑たるとを求める所の活氣ある人は、圓滿なる形を取ると俱に自づから已の勢力の弱まり行くことを感じ、是非共大人物になるには僻する、片寄ると云ふとを、幾分か免かれないと感じ居るやうに思ひます。若し人間一生涯を……此人生に限らず、遠大なる世の中の區域より人間と云ふものを見まするならば、金剛石の如く、幾ら耀いても、水晶の如く幾ら角があつても、發達せざる所の物よりは常に發達する芥子種の一粒の方が宜いと云ふ、天國に於ける人物の理性を以て見るとなくして、此世の中と云ふものに於ける事業の多少成功より論じ來れば、所謂反動的にして又僻する傾きがある者を、英雄豪傑とするはどうも免かれぬ事と思ふ。夫故に、昔より、君子若くは道德者が色々說いて居ります所は、人を圓滿なる形にしやうとするとき、其勢力を無くさない

やうにすることゝ、此二つを調和するとは、殊に難きを覺へたやうに感じます。併ながら、高尙なる道德者の云ふ所を聞けば、必ずしも併するにあらずして、圓滿なる形を取り得ると云ふとを論じて居ります。高尙なる敎育學者の云ふ所を聞けば、圓滿の人を發達せる人と云つて居ります、所謂圓滿と發達とは、非常に反對したる如く見へるが、其二つの性質を結附けて、或は現社會に適すると倶に天地のとを思ひ、此部分と彼部分とを兼れて、其異つた性質を甘く併せたるものを、之に完人物と稱へると云ふとは、高尙なる異敎國の道德學者も論じて居るやうに見へます。只だ夫れを得るが、殊に六ヶ敷いと云ふとを、常に感じ來つて居ります。所謂仁にして義を兼れる、謙遜にして自から重んずる性質を兼れる、現社會を輕んぜずして未來を重んずる、己一箇を愛すると同時に、已以外者を深く愛する。古來丸るで反對したるやうに云つて居りましたる兩種の德を、一つに併せて圓滿なる形の中に含ませて仕舞ふと云ふとは、是れ迄異敎國の道德に於て、非常に難きとを覺へたのであります。が併しゞ基督敎の道德に至つて、極めて其容易に修まるとを感じます。或人が曰ひまするやうに、情に深ければ自つから弱くなり、義に堅ければ自つから冷淡になり、愛と義とを兼れるのは實に六ヶ敷いとは一の諺になつて居ります。孔子が頻りに仁を說きましたらば、仁の弊害が甚だしきに感じて、孟子は義を說きました、所謂仁と義を兼れると云ふとは、實に人間し修德の法に於て最も六ヶ敷いとであつた。然るに、基督の言葉に從つて、神に從つて、初めて仁にして義を兼れる、愛にして義きを兼れると云ふとは、當前の結果であつて、左程六ヶ敷いとでないやうに思はれます。罪に對して刑を與へると云ふとも、若し罪を犯したる者に對して刑を與へぬならば、我等は實に人の權利を害して居るのであります、人間は皆神に似たる完全圓滿なるものに進步すべき權利を持つて居り、進步しなければならぬ所の義務を持つて居ります、而して私共が其人に對する時には、左樣に進步させなければならぬ責任を持つて居る。故に、若し其人が罪を犯し、義き道に反きました時には、其反いた丈の罰を必ず與へる、罰に依つて其人の一層墮落することを防ぐ。義しからざる者の口上に、必ず罰があると云ふ嚴き法律と云ふものを、其人の上に固く感ぜしむるとは、是れは人の爲すべき義務、又人の受くべき權利であります。昨夜、ノックス氏の講話にて、贖罪論の御話を色々伺ひましたが、夫れに就ては種々道理のあるとと私は信じます、けれども、一つ明白なるとは、惡きとをしたる者の上に、其罰が無くんば、其人の權利を害する者であります、罪を犯した丈けの罰を必ず受けなければならぬものでございます。若し愛の心あらば、刑罰を嚴にして、之が一層惡に墮落するとを防ぎ止めなければならない。基督は罪を贖ひ玉ふ本意は、別に備はつて居りませうけれども、罪を犯したる者の罪に對しては、必ず罰を與へればならぬ、是れは其人の受くべき權利であります、罰を與へぬとは、其の天賦の權利を害するものであります。是れは基督敎の倫理學者に依つて論じられて居るとと思ひますけれども、深く感ずる所ありまして申す譯であります。

又自分と云ふものと、人と、云ふものに就ても、佛敎の如き修德法の稍々高きものに行きますれば、己と云ふものを悉く捨てる。然し此所謂る己は、始終其本我の己でなくして、弱き我の現はれたる境界を云ふので夫故之を捨て人の思ふ儘になると云ふとは或は出來ませうけれども、即ち我の我たる所を捨てゝ仕舞ふと倶に人の人たる所を輕んずるのであります。かゝる意味の「我を棄る」と云ふは誤です我の永遠の存在者たるとを感じ、人の永遠の存在者たるとを感じ、我を貴んじ、人を重んずると云ふとは、實に六ヶ敷いとであつた。然るに、基督の敎に從ひましては初めて夫れを双方共に調和して考へるとが出來まする。其道理は、自分等が故らに申します迄もございませぬけれども、其專より發し來つたるもので、夫れらよく間違つたとがあるやうに思ふとが、ございます。昨日も誰か申しました所の、已の國を已すると云ふとと、外國を愛すると云ふとと、已のホームを愛すると云ふとと、隣の人を愛すると云ふとと、是れが調和せざるやうな卑屈な考がある。殊に近來ホームと云ふものゝ話を聞いて、頻りに輕蔑する者が世間に多くあるとを聞きました。凡そ自分の心の中に弱いとを感じた時に、表向きに强さうな裝ひをするとは、人間の常でございます。已の心の中に弱き所があれば、何か外面の强さうなとを以て、其缺を補ふが、人の常であります。ホーム……ホームの中には、親も、兄弟も、已も含んで居つて、素より妻と夫だけではございませぬけれども、其ホームを愛すると云ふとを云ふと倶に、自つから人が弱らしく感ぜられるかの如く思ふ。已の兒を愛し、已の親族を愛する、ならば、國を愛

せざるかの如く、己の家を愛すれば、眞理を守らざるかの如くに思ひ、窮窟極まる、人間を刻んで、小さく局促たらしめたる考が行はれるやうに思ふ。是亦一種の保守的反動論の威勢に伴はれたのであらう。又日本人傳來の習慣に、己の家を捨てることを手柄らしく考へる。是れは實に基督教の美い立派な所の德を缺いたものであると思ふ。己を重んずると倶に、己の家族を愛し、家族を愛すると倶に、己の國を愛し、己の國を愛すると倶に、万國を愛すると云ふことは、凡て人間に適して、又同じやうに出來ることである。其間に矛盾したる所を覺へませぬ。己の家を愛すること能はざる者が、どうして一國を愛することが出來ませうか。私は今日の國家論者に就て、甚だ疑ふ。我一家の人を愛せずして、どうして日本國民を愛することが出來ませうか、我日本國民を愛せずして、能く萬國に對して博愛の念を持す者がありませうか、一箇人を愛せずして、どうして多勢の者を愛せられませうか、其のホームすら安ぜしめずして、どうして天下の人を安ぜしめることが出來ませうか。ホームを愛すると云ふことと、國を愛すると云ふことと、天下を愛すると云ふことと、少しも違つたことはない。

又謙遜と云ふことと、自から重んずると云ふことと、調和することは基督の道を聞きまする迄は、自分一身の經驗に取りましても、甚だ調和し難きことを感じました『謙遜れ併ながら心を重んぜよ』と云ふ。其自分の心を重んずる性質を盛んにして、而して人に謙遜る精神を持たうと思へば、どうしても虚飾を以て調和しなければなりませぬ。心の中には自から重んずるし、身躰の外に於ては人に謙遜る我れ是れ丈力があると思つても、人の前では力がないと云つて遜つて下るのであります。然るに表を飾て謙遜することを好まぬ、かく謙遜と自重とは到底調和することが出來ないことを感じて居りました。然るに基督教を聞きまして以來、始めて謙遜と自重とは同じものである、同じ心が只だ向きやうに依つて、謙遜ともなり、自重ともなるものであると云ふことを感ずるに至りました。天地萬有の造物主、全智全能の神の御前に出でますれば、實に自から謙遜る心を持ちます。天上帝のことを思へば思ふ程謙遜る。併ながら己が永遠不朽の存在者であることを思ひ、己れの德を種々改良して、遂に上帝に似る人物となることを考へ、基督に救はれたる人物であることを考へ、我れは實に立派なる基督の如き者に成り得可や確なる人間であると云ふことを考へ、又我れは我一身と雖ども殺し得ざる永久の靈を存し、非常の恩惠を受けたるものであると云ことを考へましたるときに、自づから自分の心を重んずる念が出て參ります。斯說にして、謙遜と自重と云ふ事は、少しも矛盾して居らぬことを覺へます。

又佛教の話を聽きますときに安心と云ふ事と進歩と云ふことの調和しがたきことを感じて居ります。安心と云へば、現在の有樣に安心をするので、進歩と云へば現在の有樣に不滿足を感じて進むのであります。現在の有樣に不滿足を感じて進歩する心と、現在に滿足して安心する心と、此二つの心の調和しがたきことを非常に感じて居りました。我德の進まざることを感じ、我が智の足らざることを感ずる、此智德の足らざることを感ずると同時には、安心のなきことを覺へ、安心を得ると共に、智德の進歩に就ての精神の減ずることを覺へます。禪宗の僧侶などには、安心を得て居る人が隨分ございませう。然し安心を得て居る禪宗の僧侶は、最早進歩せざる者であります。是れに反して、日に月に悶へ苦しんで、進歩して行く人がありませう、其の人は現在に安心せざる人である。安心立命の地を得ないからして、現在に於て足らぬと思ふ處の智德を進めて、進歩する、併し進歩の一歩々々に安心を得て居ると云ふ事は、基督の道を經驗して始めて分ることである。さう云ふ智惠の足らざる、德の足らざることが、神の前に於て若し罪となるならば、完全なる神の德に達せざるときは、何時でも許されることである。然し左樣でなく、現在の有樣に於て力を盡し精神を盡して、出來る丈けのことをする者は、即ち神より許される處の人物である。けれども我儕は神の如くにならなければならぬ、神の如くになるには神の默示の下に服して、自ずから進歩するのである。一日も進歩と云ふ心を止めることは出來ぬけれども、又一日も安心せずには居らない。今日の有樣で安心をしては居りますけれども、其中に非常な進歩の勢力を以て居ると云ふことは、基督の道を經驗してより始めて得られた樣に思ひます。然るに嘗て敎會に這入て以來、もはや德の進歩せざる、信仰の進歩せざる人、若くは敎會に這入て、未だ安心立命の地位を得ざる種類が、往々ありはせぬかと思ひます。果して今日のクリスチャンが、禪宗の僧侶に下らぬ丈けの安心……………安心の性質は違いますけれども、其の安心の顯れが同じ程にありませうか、禪宗の僧侶が熱心に修業鍛

錬をした結果に於て得た丈けの安心立命の地位を「クリスチャン」が斯る容易の道に居りながら、其安心立命を皆得て居るが。率直に言へば、教會內の人々に就て詳しき話を聽くときには、何處に安心ありやと云ふことを屢々感じまする。諸君の如きも、矢張り其感じを持たれるだらうと思ひます。何處に安心が在るか、人は芝居を見れば悲しくなり、美しい音樂を聽けば自から心が恍惚とする、善い話を聽ておれば、自から愉快に感ぜられる、幾分か感ずるのは當然である。教會に這入て讃美歌を唄ひ、音樂を聽き、日曜の說教を聽て居るときには、其の人は世の中の他の人よりは聊か奇麗なる感じを以て居ることは明かであります。其れ丈けのことでは、未だ宗教上の安心立命を得て居ると云ふ證據にはならん。人々能く考へ見て、實に、安心立命を得て居るか、我が現今の職業、我が爲して居る天職、我が現今の地位、是れらの者に安心をして、實に滿足を感じて居るか。縱令今日身は死すとも、尙學ぶと云ふ樣に、何樣の困難が來らうとも、怖じと云ふ程の安心を得て居るが。其安心の無いとき、一方に於ては進步せざることは、どうも免かれん樣に思ふ。洗禮を受けて教會に這入は、同時に、滿足する者は安心を得る併し乍ら、是れは東脩を脩めて學校に這入と同時に、卒業が出來ると思ふと同じことである。教會に這入と直滿足する人と、一方に於ては終始悶へ苦んで、安心を得ざる人と、斯樣なる二種の戰を屢々經驗いたします。安心と進步とは、どうしても調和しがたい者であると感じて居る人が多くあると思ひます。

基督の所謂る天國は死した後にあるやうに感じ、我々の肉と躰は、遂に散る者であるかの如く感じ、基督教徒の世界は、即ち死した後にある者の如く感じ、現社會を禪宗の僧侶の如く、常に輕んずる人、又現社會を重んじて、未來を信ぜざる人、現世未來とを、丸るで二つの者にする人が、此の世の中に多くある。教會內幾分かさういう弊が這入て來る樣に感じます。私常に思ふも固よりクリスチャンになるまでには、一應は禪宗の僧侶の如き經過を取られねばなりません。世の中の果敢なきことを一旦感じた後でござりませんければ、眞の生命は得られぬと思ひますけれども、世の德にしろ、智識にしろ、肉躰にしろ、之れらの者を悉く詰らない益でない者と感ずる禪宗の僧侶の如き考へを何時までも以て居ることは、之れは基督教督の正當の考へでござりません。基督教は、十九世紀の文明を產出し、基督教徒が動物保護會を立てる。其の點より見るときには、此の基督教は現在を大切にして、又之を進步せしむる宗教である。基督教は人間の肉躰、現在の徒、現在の利益を輕んぜざる宗教でございます。禪宗の僧侶と違つて、現世を重んずると同時に、矢張り未來を確信する者であります、之れも基督に於て始めて結び付けることが出來ると思ひます、縱令は天國……クリスチャンの國住ふは、死んでから後ちに住ふにあらずして、現今より住つて居る、今日我々が住へる國が、天國である。天國に這入て居る我れは、肉躰を持て居る、天國にありながら矢張り肉躰を持つて居ることが出來る、其肉躰は天國の肉躰でありながら決して輕んずべきものでない、現世は未來と共に重んずると云ふことも、私は基督の教に於て經驗し得たりと思ふ』其外諸君に於ても、色々御經驗がござりませうと思ひまするが是等の三樣の例を以て顯はれましたる如く、私思ひますのに、基督の德は眞正にして且つ圓滿なる者である。基督の教へは、天地の教へである。即ち圓滿なる教へであります。盛くる所の水晶や、金剛石の如き者でなくして、永遠に發達して行く處の芥子種であると思ふ。其れ故に、只現社會丈けに於ける働きから、性質を評しますれば、英雄豪傑の如く世の中に於て葛籐を起さした人物が「グレートメン」と申しませう。然し基督の云ひ玉ふ「グレートメン」は完全圓滿なる性質を餘計に具へたる者であります。故に其圓滿になれる傾向性質を持つておれば、其れが「グレートメン」であります。只此の世の中になれたる事業の結果より「グレートメン」と云ふ名を與へるのではありません。是れは基督の德を脩める事に於て、我儕に始めて得たる經驗と自分で覺悟いたします。

夫れに就きまして、基督教の德を脩めることに關して、能く人の申しますことは、風采を云ふことである。天地間の美術品の中、人の風采程美しきものはございますまい。故に人は、常に風采を慕ひます。此風采が自分にあれば實に悅ばしいことと思ふけれ共、風采と云ふ者は、一種の着物でございます。英國の哲學者が云ひますのに、『着物には色々種類のある、風采は最も進步したる着物である』と申しました。クリスチャンが德を脩めるときは、風采を慕ふも宜しいけれども、風采は已れの德の自然の結果であります。風采と云ふことを、脩德の中の一つにても置く樣な者があるなれば、是れは實に愚の話であります。云ふ迄もないことでありますけ

れ共、随分さういうことが行はれて居るかの如く聞きます、故に私は此ことを述べたいと思ふ。

又德を脩めることに就きまして、只今色々列擧いたしましたことは、悉く是れ德でありますけれ共、此の德を脩めやうと思ひまするならば、是等の德は何んであるかと云ふことを考へればならぬ。即ち是等の德は信仰の結果である、若し謙遜なること、自重心あることと云ふ樣な、すでに結んだ實を目當にして來りますならば、是れ又愚人の考へであり　又一部分に局促たる考へであります。是等の德は皆な信仰の結べる者であります。其信仰は、即ち常に神の前に接することであります。神に接し、神の方法に裹まれて、自づから自分が化せられた結果として、是等の德が滿ちて來る者であります。其德自身を慕ふと云ふことは、基督教脩德の正當なる目的ではなからふと思ふ、我儕の務むべき修德は、基督の撰んだ修德の方法であります、信仰であります。基督を神の子と唱へれば救はるべし。基督に依つて明かに神を見まするならば、基督は神の子であると信じ、神の見へざるものも遂に之に接すると云ふ、其信仰の結果として、是等の德が出て參ります。基督教徒の修德の工夫の中の色々是等の美しき所を考へ、其の德を修め、欲を止め、謙遜を守つて餘りますならば、是れ唯だ外の現れを見て行きますもので、恐くは僞善の端緒であらうと思ふ。故にさふ云ふやうな色々の德と云ふものを慕はずして、我儕に無くてならぬものは、神の聖と、其の義きとを慕ひ、其の王國を信じて、其の中に居ることである昨日も感じを述べましたやうに、基督教徒の事業と云ふものは、自から人をして神に似せしめる、別の語を以て云ひますれば即ち神と一體になると云ふことであらうと思ふ。此の神と一體になると云ふことの結果が、自づから傳道にもなり、又クリシチヤンの仕事にもなる、傳道と云ふても、神學の研究なり、何なり、凡てさう云ふやうな働きや仕事の方を、第一に望んで行きますことは皆未であります。我儕は、第一に神に似る、神と一體になることを眞正の事業として務むれば、其の結果と云ふものは、即ち我々の傳道にもなり、仕事にもなり、德にもなるのであります。神學を研究すると云つても、傳道の爲に神學を研究すると云ふやうになつては、私は是れは誤であると思ふ。神學を研究するものは、本と神の德を慕つて、神の德と一體になることを自から求めると云ふ心を發して、神學をするならば宜しい。けれども、傳道の爲に、布教の方法として、學問として、神學を研究すると云ふことはどうも私は夫れに安ぜられぬことと思ふ。我儕の務めることは、繰返しく申しまするが、矢張り神に似ること、神と一體になること、信仰と云ふことであります。身を献げること、至誠と云ふこと、皆同じことを云ふて居ります。神と一體になる即ち身を献げる、神の意を意とする、即ち至誠、神に觸れ接する、即ち信仰。其神に觸れ接するのが即ちクリシチヤンの事業、又傳道て……同じことでございます。其一番中心を指して、其中心を望んで行かなければなりませぬ、他のことは悉く未であるやうに、私自身は深く感じて居ります。

雜多の考を色々申しますことは、是れで止めます。只實際に就て諸君の御散しなさる前に、私が御相談をしたいと思ふことは、今日の基督教社會の有樣、又クリシチヤンの眞正の事業の結果として顯はれたる傳道の景況は、是れで宜しいものであるか、昨日フルベッキ先生の御話にも、今より三十三年前には、實に日本に此の如く早く宗教の行はれると云ふことは知らぬと云ふ程であつた。又フランソワザビエーが、始め日本に傳道に來まして、西京、大阪の河を下る時に、西京や大阪を戀々と顧みて、何時此日本國は救はれることかと思ふて、船の中で詩篇を吟じ、一人で祈禱をした。其當時にあつては、日本には、後來果して信者が多く出來ると云ふことは、思はなかつたに違ひない。然るに暫く立つ中に、數十万の信者が出來ました。明治十六年の大りばいばるの時に、多くの人が演說する所を聞いても、明治五六年頃より始めて强固なる信者が出來たことであるが、此の如く日本に早く宗教が傳はらうとは誰も思はなかつたと云ふ人のみでありました。實に日本は意外に宗教が傳はつたものであります。日本人民は宗教に冷淡であると云ふことは、日本歷史も知らず、亦日本人民の現在の有樣を知らぬ人の話であります。日本人民は宗教に冷淡ではございませぬ。宗教に冷淡ではございませぬけれども、一體に冷淡なる性質であると思ふ。其中にも、此宗教のみに冷淡なりと云ふことは信じられぬ。寧ろ私は宗教には感じ易い國民と思ふ。けれども一体が冷淡なる性質であります。一例を云ふならば、基督教は宜いものであると云ふことを認めることは、早かつたと思ひます。今日にては一般に基教の邪教にあらずして宜い教であると云ふことは、知られたのである。併し、私は是れから、先きの、日本の傳道が、誠

に六ヶ敷いことであると思ふ。是れからが、日本に眞正の傳道が始まる時と思ひます。基督教は、宜い教であると云ふ迄に結果はなりましたけれども、人々が本當に神を信じ、其信じたる者の團結したる教會が、堅くなつて、日本國に本當の基督教會が、出來るのは、是れからであります。是れからが實に、日本の傳道の六ヶ敷い所であります。此數年前來基督教社會が不活潑であると云ふことは、是れは當然であります。何しろ今日迄の如く活潑の勢ひを以て廣告をして廻はることは出來ぬ。是れからは人の心の底に這入つて、眞のクリシチヤンと云ふ德を作らなければならぬ。其クリシチヤンの德が出來上らなければ、教會が出來ぬ。故に夫れ等の事業は全く是れからであります。而して基督教會の人は、皆互に己の屬して居る教會の名を爭ひ、是れは實に天國の理想を顯はして居ると云ふやうな、少しでも安んじて云ふことは出來ない。宗派の爭がある。本より宗派と云ふものは色々の關係から出來たのでございませうから、宗派と云ふものが悉く無いことを望むのは六ヶ敷いと思ひます。宗派はあつても宜しい。有る中にも、宗派の名は異にして居りましても、私は私の家に屬し、諸君は諸君の家に屬して居つても、一つになれると云ふやうに、縱令宗派は合せられぬとも、其造つた宗派の中に於て矢張り信實共に深く合することが出來る筈であります。或一人の牧師が自分の教會の振はないことを段々考へまして、神の前に出て祈禱をして居りました、どうぞ教會の振ふやうに、又信徒が神の意を以て意とするやうに、熱心になるやうにと云ふて祈禱して居りました。度々祈禱をした結果として、考へて見て、是れは人の事のみに祈禱をして居るけれども、我は或宗派の牧師である、自分と同じ土地に他の違つた宗派の者が來て傳道をして居る。先づ我とあの違つた宗派の牧師とが、心を一にして、同じやうな考で傳道が出來るであろうか、どうであらうか、向ふの人と自分とは相違ふ所があるの、神學上の大切なる道理で違ふことがあるとか段々考へてみると、さうで無い、さうで無いのに同じ土地のクリシチヤンに、牧師が傳道して相合することが出來ぬのにどうして教會の中に本當の一致が出來やうや。故に牧師たる者は其心を公平に持つて、眞正に他の宗派の人と相合すると云ふ心地にならなければ、其牧師が幾ら熱心に傳道をしても、教會の振ふ筈はないと云ふことを祈禱の際に、豁然と悟りました。夫れよりして直ちに其他の宗派の牧師の家へ行きまして、自分が祈禱の際感じたことを話し今後互に宗派の名は異にしても同しやうに手を取つて、此地方の爲に傳道しやうではないかと云ふので、夫れから其違つた宗派の者が相合して、以來は、其地方教會の信徒が、親くなつて來たと云ふことを聞きました。是れは確かな事實であります。どうしても、卒先して傳道をする者には、皆そう云ふ風の考がなければならぬと思ひます。リバイバルを祈るに致しましても、教會内の一致を祈るにしましても先づ氣の附いたことを自分で深く考へなければならぬ。人を責めるよりも、自分を責めなければならぬ。自分一人が本當になりますれば、其中に傳道をすることは容易であります。實に人間程早く感じ易いものはない、又義きことの働きに依つて早く結果の顯れるものはない。自分が先づ感じたならば、教會の内のことを感じたならば今日此處に御出なすつた青年諸君、夏期學校に來られた諸兄弟が自分の教會員をして熱心なる信徒とするの心があるならば自分の心を厚ふし、自分の心を信仰的に致し、自分に傳道を致し、自分が出來上つたならば、必ず其教會は素より、一人でも其教會内に宜い者があつたならば、決して教會の亂れる段々惡くなる譯はないと思ふ。教會の惡いのは、即ち自分等が惡いのであると思ふ、其決心を御互に持つて、此山を下り、唯だ自分を宜いやうに養ひたいと云ふのが、第一でございます。次には、各地の青年諸君、どうぞ其地方〳〵に於て、青年會と云ふものゝ團結を、一層堅く、致したいと思ふ。段々經驗する所に依つて考へるに、どうしても青年が團結してやらなければ、到底弊風を矯すことの出來ぬことが澤山あります どうぞ地方〳〵の青年が團結して、青年が其土地の改革の中心、傳道の中心になりたいと思ふ。教會と教會と相結れ合つたりした時に、教會と教會との双方から出來た青年の團結した青年會が、どうしても勢力を得なければ、調和の望はないと云ふことを感じます。どうぞ諸君、此青年諸君が地方〳〵に於て、先つ銘々此事を御感じなさつて御歸りになれば、急度青年會が出來る。隨つて經綸計畫と云ふ話が這入つて來ます。此經綸計畫と云ふことは宜いことであります、謀なくして爭をすると云ふことは普通人間の出來ないことであります、故に經綸計畫は銘々にしなければならぬけれども、松陰が云ひましたやうに『人を離れて爭なし』で、人間がなくんば、どんな經綸をしても出來ない、今日の傳道にしても、基督教社會の仕事に

しても、人を先きにせずして經綸を先きにすると云ふのは、第一に間違つたとさ謂はなければならぬ。今日の青年諸君が、單に深く感じて其地方に皈つたならば、其人の一念で急度、青年會が出來ます。併し尚ほ能く今の理窟を深く覺悟せられて、地方〳〵の青年會の團結の堅くなるを望みたい。私共多少用心して居ります、自分等の雜誌の中、殊に青年諸君の爲に獻げたいさ思ふ部分の雜誌は、青年間の機關になるを十分に悦びます。どうぞ青年諸君、倶に意思を通じ、日本國中に在る青年が、相團結して、其地方〳〵に於ける傳道の責任も、皆青年諸君の心を以て引受け行かなければならぬ、仕事であらうさ思ひます。之をどうぞ諸君の御別れになります前に、覺悟して御別れになるを熱望いたします、而して、又教會さ云ふ一の制度、第一は、人さ自身でございますけれども、此制度さ云ふものが宜きを得ずんば、始終人を縛ります。制度さ云ふものに就ては、實に自分等は經驗のないものでありますけれども、只自分の考へた丈けを書いたものがあります、此處に印刷して持つて參りました、委員諸君の方へ差上げて置きますで、御望の方はどうぞ御持皈りを願ひたい。

先達て、此處に參ります路に、何人の作りましたものであるか分りませぬが、道傍に一の石を置いて、其石に刻んだ歌がありました、其歌に

あれを見よ深山に花は咲きにけり
まこさをこせ人しらずさも

實に深山の奥の木陰、谷河の傍、叢の陰にある小さい花、誰も見て居ぬ、所で美く咲いた其花は徒らに咲いたにあらずして必ず天地間に之を咲かせる丈けの原子がある。其土の中には、此花を咲かせる所の原子があるのであります。其原子が一の活ける艸さなつて花を咲きます、其咲いた花を見て、人が奇麗だと云ひ、立派だと稱するけれども其實は天地間の永久存在する粹と美と云ふものを集めて生命を持つて出て來たものである私共人間が此世の中に生れるやうなものでなくして自分が自身を立派に煥發するとは、實に娛いことであらうと思ふ。基督が世に御出なすつたは、何も新しい道理を言ひに來たのではない、預言者の言ふたとも少しも改めない、我が教ゆることは古き教である、基督が新しき道理を御考へになつたやうには考へませぬ、道理は昔よりたつた道理で、其道理が一の活ける人間になつた、道が肉躰を取つて出て來た、道理がペルソナルされたのであります、私共は即ち此世に立派な原子立派な美と粹とを以て一の肉躰に現はれべきものであります、神に似、神と一躰になつて永遠に存在する其際には、天地の人物となつて、自分の德を發揮するとが出來んと云ふとは、人が自由に定めたでなく、彼花のやうに、人間も永遠の存在者になりたいと云ふとは實に神の惠み是程愉快なとは無いと思ひます、斯かる人間を作られたるは、何の惠みで此樣にされましたか何の關係で、此樣にされましたか、私は、天の榮光を感じて、權はなければならんこさゝ思ひます(大喝采)

片々

淡海子編

●名古屋青年會通信

◎移轉問題の原因　遞承する處によればこは單に良風維持の正念より湧き出でたる者さは難想察、如何さなれば醜業者賦金收得に關しては永年月の間愛知縣會の苦情物にて郡にて其幾分を奪はんさ欲すれば市にて之を與ふるを欲せず、市にて之を專得し去らんさ欲すれば郡にて之を許さず彼是以て郡市議員軋轢絶間なく、時に或は郡議員ストライキを起して議事の進行を防げ、市議員も亦談議を凝らして是に當らんさ試みたる、往々なりしも過般縣制實施之爲め形勢頓に豹變し市議員は僅か五名斗にして郡議員は之に數倍致居候故、さてこそ一番仇討を始め、遂に移轉の議を建て大多數を以て見事郡議員の勝利に歸したる内情に有之候由、事情已に如斯次第なれば我會にては輕卒に手を出し難く靜かに傍觀致居候、右に對する縣知事の意見、縣知事は移轉贊成之由なれど柳本書記官は大反對の趣(前警部長吉田氏も亦然り　未日公然の沙汰なし、据置を希ふ者は當市南部則ち遊廓に依て商賣の繁昌を保ち居候者に有之候「右に對する當市新聞紙の意問」枝葉、名古屋の二新聞は移轉贊成にて頻りに縣知事の英斷を促し居れり、新愛知、金城の二新聞は移轉不贊成の景色に御座候、頃日扶桑新聞社説の内に不德義なる新聞記者さ題し遊廓移轉論を機さし青樓に登つて無錢遊興をなせし記者あれば或は又醜業者より賄賂を受けし新聞社ありさて痛く筆誅致候へば何れの新聞社を目的させしものなるや蓋し判斷容易、

◎自給　青年會に於て基督教書籍の賣捌を創始致候者我會自給の端緒を開かんさ欲したる故のみにあらず一は以て間接傳道をなさん微意に御座候我會の前途に於て創始致度存候事業は多々有之候へ共先づ第一に我會の自給獨立を得ざる可からさるを以て日々神樣に祈り居申候處主は我會の祈りを聞き上げ玉ひて尤も將來に望みある一新事業を授け玉ひたれば目下會員の者三四名をして修練爲致居候に付委細は追て御報告可申上候、細川瀏氏より今度當地監獄傳道を請願相成候、來月開會の福音同盟會準備の爲め各教會聯合種々相談申度御座候將亦今晩より十日間各教會を遞巡し説教會を開かるゝ都合に御座候御通報迄頓首

三月六日　幹事　正木鼐藏

●福島縣通信

◎若松幼年會書籍館　同會に於る書籍館設立趣意書は、前號に報道せしが、今又其細則を報じ越れたれば左に掲ぐ、

若松基督敎徒幼年會附屬書籍館細則

第一條　本館は若松基督教會內に設置し名つけて若松基督教徒幼年會附屬書籍館と稱す
第二條　本館は周く志士仁人の寄送に係る書籍金員を以て之を維持す
第三條　本館は何人を論ぜず縱覽することを得
　但し縱覽せんと欲するときは理事の承諾を要す
第四條　本館は或一部の書籍の借用を許す其期限は概して一週と定むと雖ども書籍の大小に由り日限を伸縮す此際は各自の印章を持參して借用證に捺印すべし
　但し一時に二册以上を借用するを得ず
第五條　本館より借用したる書籍は一切貸借を禁じ之を破壞紛失せるものは辨償の責を有す
第六條　本館には理事、書記、各一名を置き館務を處理せしむ
　第一項　理事は本館一切の事務併に開閉を掌る
　第二項　書記は本館の記事通信を掌る
第七條　本館は每日午前八時より午後四時迄館內に於て縱覽を許す
　但し當分の內每日曜日午後一時より四時迄とす

●仙臺の勞働會

仙臺勞働會の名は夙に吾人の聞く所なりしが、今其成立を聞くに同會は、仙臺東北學院の學生三十餘名にて成る、彼等は有爲の靑年にして、自から勞して專ら自給自營の法によりて立たんとす、朝には星を戴き氷結の乳罐を配り、夕には油を市に鬻ぐ一日の業は已に盡して后學校に學ぶ、其健志察するに餘りあり、今勞働會の趣意書を得たれば左に揭ぐ。

勞働會趣意書

人に勝れたる精神を有し、充分智識を硏き上げて天晴社會に盡さんとの念慮は持ち乍ら、種々なる事情のため學資を得るに途なき靑年の心の裡ほど憐れなるものあらず。古來大事業を成就したる偉人豪傑の傳記を讀みて、彼等が概ね貧賤に人と爲りたるものなるを知り、思ふて今日窮途の靑年中また望を囑すべきの人多きを信ずるに至りては感慨實に已む能はざるものあるなり。故に此等靑年をして其の志望を貫かしめんとの希望を抱き、數多の志士仁人の贊成を得て去年三月發に勞働會なるものを設立せし以來、着々步を進めて今や會員三十餘名、みな年少有爲の男兒にして朝に星を戴きて乳罐を提げ夕に月を踏みて新聞を配り、或は石油を賣り或は牛肉を鬻ぐ等種々の艱辛を嘗め幾分の資を得て營々の業に孜々たり。これを彼の飽まで食ひ暖かく衣、目前の小事にのみ齷齪して百年の大計を圖らず實業を賤しみ安逸を旨とする靑年に比すれば其の差異實に天地の懸隔あるが如し。斯の如くにして始めて正義公道を踏み世間の惰眠を攪破して獻身的の生涯を終るを得べきなり。嗚呼我が勞働會にして隆盛の域に趣むかんか、天下無敎育の年少を減じ、獨立獨步の氣象を養なひ、自働自活の人物を成すを得て、東洋文明の光輝を發揚し、皇運を不朽に護るを得ん。今や一層の奮發を以て本會の業務を擴張し、ますく進んで其の希望を逹せんと欲す。世の仁人義士幸ひに本會の旨に同情を表せられんことを伏て懇冀の至りに堪えず云爾。

仙臺市國分町一丁目十四番地
勞　働　會

明治二十六年三月

本會が目下執る所の事業は左の如し
牛乳牛肉　東京及仙臺諸新聞雜誌取次　味噌醬油　石油筆墨紙類販賣

◎山梨基督敎靑年會　未だ著しき運動も爲さず、されど靑年の中、大に自ら任じ縣下精神的革命の爲めに盡さんとし、陰かに修養する者あり、思ふに將來は有望ならん。

廢娼建議は其儘握り殺しとなりたり、議員の多くは活氣に乏しく、甚しきは遊廓に宿し、曉に車を飛して歸り來り、直に議場に望むが如き輩もあり、遊廓にては存娼の爲めに盡力して貰はんとて、頻る議員を厚遇するが故に、之が爲めに籠絡せらるゝ腐腸の徒もありと、是に於て廢娼義會の諸氏は慷慨計畫する所あり、愈々益々主義の爲に盡さんとす。

◎札幌基督敎徒靑年會　は去月五日美以敎會堂にて其總會を開らきたるに出席者凡そ廿名にして贊助會員伊藤一隆氏の熱心なる勸話ありて后規則の修正、役員の改撰等を爲して散會せり。

◎小學福音靑年會　北海道後志小樽なる同會は每月第一火曜日を以て公開演說會の例日と定めたり、該會は一の福音會として、何の宗派にも屬せず、獨立獨步社會矯風を以て目的とせしが運動上の都合に依り、先頃全く美以敎會保護の下に屬し、爾來入會者日を追ふて增加し今日は既に卅餘名に上れり、尙偏く其主義目的を發表し廣く會員を募集せんとて、遊說員を設け、又機關雜誌を發兌せんと決し大に氣焰を吐かんとする由。(靑年會報)

◎德島靑年會　にては嘗て基督敎靑年會ありしも、昨春以來恰も解散の姿なりしが、今度講義所靑年信者四五輩の手にて之を起し、每土曜日の夜演說會を開くことゝなれり。

即ち

一に神を敬ふと

二に人を愛すると

三に自己を重ずると

此三の部に於て基督の如くなるを得ば即はち完人たるなり、而して人は遂に此の完人たるとを得べきものなり。

(六)要するに教育の目的は完全なる人物の理想に向て人を開發するにあり、而して、完全なる人物とは基督の如く神を敬し、人を愛し、自己を重んずるもの是れなり。

六段　總括

(一)以上の所說を以て余は第一章を終らんとす抑そも教育とは何ぞやと問はんに古來樣々の解釋あり余は其の十八種を擧げ之を三種に分ちたり即はち教育は完全なる人を造るとを旨とすと云ふものあり一也、教育は人を或る事務に適するものと爲さんとを旨とすと云ふものあり二也、教育は人に智識を與ふるとを旨とすと云ふものあり三也、以上三の類に於て、余はその第一類を採り、教育の目的は完全なる人を養成するにありと斷定したり。

(二)然れは完全なる人とは何如なる人ぞ其理想時代と國とによりて相違し隨て其教育法亦同じからざるなり。

(三)若夫れ此等の國風時勢に拘はらず超然として其理想を完うせんとするに人は到底社會の氣風に隨て幾分か其理想を形造るものなり故に完全なる理想に向て發達せんとすと云ふと雖ども其理想は旣に社會の大勢に隨て變じたるものなり故に教育は勢ほひ社會の情態に伴て化するの外なきが如し。

(四)左れど人は到底社會の爲に生るゝにあらず社會は即はち人の爲に存するものなり故に人は必ずや社會上に超然たる理想を保ち之に向て發達して以て其の社會をして隨ひ化せしめずんにある可からず。

(五)此の故に現社會に超卓する理想を立て之を人類の師表及び目的として、人を進化開發せしむるとを要す、而してその、理想となるものは實に基督の外なし、左れば教育とは結局人を基督の如くにするの謂たるなり。

(六)終に臨み教育學の字義を解せん、教育學は英語に Science of education. 又 Science of Pedagogics. 又 Science of Teaching. 又は單に Pedagogy. と云ふ、ペダゴグの字は初め子供の德育の意義なりしが近頃は概して之を教育と云へる廣き意味に使用するに至れる也。

第二章

教育の快樂

(一)孟子曰く天下に三つの樂みあり、王たることは與からず、父母兄弟恙なく在ます一の樂みなり、仰で天に愧ず伏て地に耻ぢざる二の樂みなり、天下の英才を集めて之を教育する三の樂みなりと

(二)英才を集めて教育するは固より樂しみの大なるものと云えども、未だ其最大なるものと云ふべからず、教育に於ても亦た之を最良のものと云ふ可からざるなり、英才を育して英才となすは教育の主旨にあらず、普通凡俗の兒悉とく英才と爲すべきことを信ずるを最大の樂しみとし、如此き教育を以て眞正最高の教育となす、ミス、ピーボディ曰く、母は其兒を愛し、教師は其才を愛すと、才を愛して之を教育するものは完人を養成すると能はざるなり。

(三)天は惡しき者の上にも義しき者の上にも雨を降らし、日を照らし天地宇宙の大思想を示す、即はち　天が人を此世の學校に置くや義者不義者賢者愚者の區別なく、一樣に之を教化せんとするなり而してその教化の目的必らずや成就し、人は何如なる人と云へども皆な善き人となるとを得べしと信ぜしむ。

(四)凡そ此信仰なきものは只だ英才をのみ教育するとを樂しみとし万人皆共に教ゆべく皆共に善化すべきとを信ぜざるなり。此故に英才を育するもの、富者の子を教ゆるもの、貴族を教ゆるものはあり、普く人を教育し、貧人、不具者、は言ふ迄もなく、世に痴愚と稱せられ、全く度外に放棄せられたるもの迄をも教育せんとするの樂は万人皆神の殿なるとを信ずるものにあらずは能わず。

(五)創世記の初に云く、人は神に似せて造らると、新約書基督の末期に云く、吾は世に勝てりと、抑そも人が神に似神に同ずるの靈性を備具すると、及び若し之を發揮すれば神と和ぐとを得、神の子たるとを得、神と一躰たるとを得るとは、世

開けてより此の方尤も高尚なる人々の心の中に常に固く信ぜられたる所の眞理なり人にして心に神靈を宿さゞるものはあらず故にその幔幕を開き其靈性を開發啓導せんとして而も其種あらざるものはあらず。

(六) サミウエル、スマイルスが自助論及品行論を讀みたる者は王侯相將に種あることなく、人の性、皆相近かく、習つて而して相遠ざかるの理昭々として明かなるとを見ん、今ま古今最も著名なる偉人にして其出所の極めて下賤に而かも立身の極めて高大なりし例證若干を左に擧示さんに

一、グリーキの詩聖ホーマーは小農夫の子
二、同く詩聖バーヂルは門番の子
三、天文學者コボルニカスはポーランドの麵包屋の子
四、同ケプレルはゼルマンの酒屋の子にして嘗て給事したり
五、アイザツク、ニウトンはタランハムの小農の子
六、シエキスピーアは材木商の子
七、ミルトンは金貸の子
八、新世界の發明者コロンバスは織匠の子
九、電氣發明者たるフランクリンは蠟燭屋の子
十、著名の說教者ホイツトヒールドは旅舍の子
十一、回々教の開祖モハメツトは羊牧人
十二、リビングストンは織屋の子
十三、米國大統領の中リンコルンは鐵道人夫たり。グランドは柔皮匠たり。ガーヒールドは舟曳たり
十四、英國のマコウレイは亞弗利加に旅する一商人の子
十五、豊太閤は尾張の細民の子
十六、漢の高祖は泗上の亭長たり、

此等の偉人は大率れ皆な平凡聞へざる人の子にして別に新らしき種を天外より受享したるにあらず啻だ其の内なる性を開發し其美質を外に啓導したりしかば遂に斯くの如き偉大の人となりたる也。

(七) 然れども此等有名の數多の偉人は其先きに更に多數の無名英雄ありて之が師父となり以てその美質を遺傳したるものならんと云ふ人ありこの論實に可なり、然れど遺傳も亦た人の美質を傳ふるに過ぎざるなり、其師父なるもの更に其師父の教化を受て以て開發し、其開發したる所の美質を其子弟に傳へて以て所謂る著名の偉人を造り出せり之を要するに亦是れ人の性の美しく開發したるに淵源せずんばあらざる也。

(八) 昔し支那の某は我家宰相を出さんとて門に槐を種新田義貞は我后に將軍たるものあらんと言へり左れど斯る名家名族の末のみにはあらず病の床に孤劍を揮ひ遂に成すとなくして憤死したる老翁の子又は小暗き行燈の影に糸を紡ぎ謹直なる勞力を以て正義の粟を食みたる老婆の子は生れながら正直忠實の氣風を得たり此子長ずる后ち發達して偉大の人物となりたるは安んぞその老翁老婆が美質の集積影響したるものにあらずとせん英國の學士ガルトンは遺傳の理を研究し著名の人に必ず秀拔の父母あるとを示せり、然れどもその秀拔なる父母には何如の父母ありしや、思ふに亦た多少非凡の資なかる可らず蓋し人の才は漸やくにして成れり喩へば蠻民が漸く開化して文明の民となるが如し左れば今日に名を著したる偉大超高の人は幾多無名の人の才智思想漸やくにして育積集成したるに淵源するとを思はざる可らず故に遺傳の理法の嚴そかなるとを知るものは今日の英才は一朝にして成れるにあらざるを悟り又た今日の鈍才は決して之を棄つべきにあらざるを感ずべし今日の鈍才に多少の智德を與ふるは后日の英才の種なり此故に只だ鈍才を愛するは教育の主旨にあらず、鈍才に望を失ふも亦教育の勘辨にあらず寧ろ英才は之を放任すとも鈍才は篤く之を教育して其の一日も早く英才造出の源由となしめんとを希圖せざる可らず。

(九) 人に必然の廢人なし、若し之を教育せば皆な完全の人となるとを得べしと、教育者若し此信仰を欠ば、その安心快樂あらざるなり。基督の十字架上に死するに當てや、主の行き玉ふ所には何處にも行ん汝は生ける神の子なりと賛歎したる弟子輩は皆恐れて散亂し天下の智識を集めたる羅馬の學者判官は目然に直して光を見ず觀者四方を環り惰けを氷の如くにし冷笑して嘲けり匹夫官人驕然として撿視し下郎鎗を揮つて之を刺す、夫れ天下の至聖に會して其聖を覺らざるは至惡なり神の子基督を縛し基督を罵り基督を虐殺するに至ては人情の極惡極醜を悉さずと云ふとなし故に神學者は云く此時惡魔は在ん限りの惡を行ひ人情は汚らわしき限り汚れたりと人は果して怪獸惡禽となれるなり、其良心消へ其愛情亡び、其靈

性殆んご失せたるに似たり。若し説の容れられざるによりて絶望し、位の昇らざるによりて世を果敢なみ貧困窮乏によりて人情を疑ふが如き僻癖をなして此時に際せしめば、彼等は人を指して何如なるものさ云はん哉。左れご基督は言へり、吾世に勝てり神に感謝すさ、即はち人の悉く救はるべきを言ふなり。而して人の救はるべきさは人の神の如くなるとを言ふにあらずや、然らば則ち基督は此の極醜極悪の人を見て尚絶望せず、如此き徒も遂には神の如くなるとを得べしさ断言せり、此の断言は何如に強き信仰を世の教育者に與ふるや、教育者よ學生の化しがたく、卒業生の迷ひ易きを見て軽々しく失望するとなかれ、大聖の人基督を殺すほごの悪をなせるものも尚善に遷るとを得るにあらずや基督曰く神よ彼等の罪を許し玉へ彼等は知らざれば也さ、之をして知らしむるは即ち教育者の任也。

(十) 人は皆な完全に發達するとを得べし、然れごも人は元來自由の意思を有し、善悪の何れにも進行するとを得るが故に、若し之をして善に發達せしめずば、則はち悪に發達すべし、人は二人の性あり、その能く完全なる善に發達するとを得るさ共に亦悪に走るの自然性あるなり而して之を善に移し善の方向に發達せしむるは即はち教育者の任なり。ダルヰン曰く人は包圍に隨て化すさ、則ち善に化せしむるの包圍を備ふるは教育者の任也。クリスト曰く、神を信ずるものは救はるさ、即ち神に近かしめ神の包圍に接せしめ以て救はれて完人さならしむるは教育者の任也。

(十一) 教育の目的は人を基督の如くにするにあり、故に教育者は學生の心を神に近づかしめ、万物の智識を徹して神の力神の愛を直覺せしめ、世に處する法則の中に嚴然たる神の則あるを確認せしめ學生を神さ和らぎ、神さ一体たらしむるにあり此故に教育者は一種の牧師なり、牧師は一種の教育者なり、其間に經庭あるを見ず、只だ教育者は世の智識を教ゆると多く、牧師は靈の智識を説くと多しさ雖も、詮する所ろ遂に同じからずさ云ふことなし。余は思へらく今后教育者さ牧師さの區別は益々不分明さなり遂に牧師は教育者中の大先覺が之を兼ぬるに至るべしさ。マルテン、ルウテル曰く余若し説教者たらざりしならば必らず教師さなりしならん實に余は其何れか優りて好きを知らずさ、ペーン曰く説教者は倫理の教師神の眞理の説明者なり、教師は世の智慧の説明者文學及び學術上の説教者なりさ。

(十二) ソロモンは神の殿堂を建たり教育者は人の心に神の殿堂の扉を開く、昔し、イスラエル人は、バベルの塔を半ばにして止めたり教育者は人の心を高く天に達せしむ。主曰く、汝等万國に行て福音を宣傳へよさ教育者は万人の心に入て茲に福音を成長せしむ。凡そ教育者にして只だ藝術末技のとに躊躇し、人の心を神に近づき神さ和らぎ神に似て神さ一体たるものさならしむるを得ずんば其教育の最大目的最要主旨を達せざるものなり。何んさなれば教育の要旨は人を基督の如くにするにあるがゆへ也。

(十三) 昔し、ルソウ片田舎に教へざる頑童の碌々として悪戯するを歎じ傍らに富人の家聳へて富者の獨り榮華に耽るを慨して、曰く、嗚呼世人何ゆへに此幼兒を教へざる乎さ、吾等今の無學兒を見て常に此歎なくんばあらず誰か北海道の荒蕪に期するをのみ擬ひさする幾万の人の心は尚ほ茫さして開拓されざるにあらずや。

(十五) 神が其神たる如く人を教育せんさ爲し玉ふや、生ける基督を下し、其生ける摸範によりて人を教へ玉へり、教育者も亦た自ら活摸範さならずんばある可らず、只だ言語によりて人を教へんさするは、只だ文字によりて人を益せんさするに同じ說し行なきの言語は死せるに均しきなり。教育者ペープ、カーペンター夫人曰く、人の子を當然に教育せんさ欲するは教育者に取りて第二の事務なり、尚容易なり、第一の事務は先つ自ら教ゆるにあり、之を尤も難しさすさ。斯て教育者は道に肉躰を添て人を救ふ、その爲す所ろは基督が十字架上に死せる天職さ同じく神が基督を世に下したるの摂理さ同じ、教育者の爲す所は基督の爲し玉ひし所ろ、亦神が爲し玉ふ所ろのものなり、教育者は世に立つて神の事を爲し一個の小基督さなりて人の靈を救ふものなり生れて此榮ある職を荷ふ快樂何ものか及ばん。

(十四) 鮑叔が管仲を誘ひ出し玄徳が孔明を引用したるが如く教育者は人の中の人を誘導啓發し、空しく腔下に蟄居するの善者幾人を世に招き出す。教育者あるによりて人の中の善人即ち眞の人は世上に露はれ來れるなり、教育者ありて初て人あり教育者は、第二の造物主なり。

第三章

學科課程　第一段學論

(一) 教育は人を完全に發達せしむるとを旨さすさ云へり然らば之を何如にして完

全に發達せしむべき乎の問起り此に於て教育の術に様々の異類を生す而してその類數多ありと云へども要するに之を二種に大別すべし、即ち全く之を放任すべしと云ふもの一也、之に術を施こして人の手にて教育すべしと云ふもの二也、蓋し放任すと云ふは之を棄つると云ふの義にあらず人の不完全なる手の中より放任して之を周密賢善なる自然の手に委ねんと云ふにあり即ち亦一種の教育に托するが如し、ルツソウは其教育小說エミールに此意見をもて想像上の自然教育を畵き人の手にて關渉せざる時初めて完人物を生ずべしと主張したり。ハーバート、スペンサーは自然教育の論者なり、然れども此かる極端の說を排し嘗て論じて曰く一方に自然に任ずべしと言ひて而して他方に人爲の學科課程を要すと云ふは甚だ矛盾するものに似たり然れ是も之れ亦自然に隨ふ所以なり、凡そ生物は其高等となるに隨て其親の保護を要するの期限長く其度切なり故に人の如き万物の靈長に至ては胎内の養ひ、幼時の保護は言ふに及ばず年少き間教師の教導保護を要するヿ勿論なりと、此スペンサーの論は能く、ルツソウ等が極端なる放任說を破するに足れり、教育上には到底人爲の保護干渉を要し、隨て相應一定せる學科課程を要するものなり。

(二) 教育上學科課程を要す然らば何如なる學科課程を尤も必要なりとする乎、所云る「エヂウケーション、パリウス」即はち教價の說、スペンサーが教育社會を驚かせたる何如なる智識尤も價値ありやの問題を次に生ず、之に對して古來様々の說あり。

(三) プラトウは其共和國中に音樂、躰操、算術、詩歌、地理、天文、論理の諸學科を心の教練に必要なるものとし、その價値を論じたり、又アリストートルは政治學中に同様の論を爲したるが取分け音樂を以て教育上尤も價値あるものとなしぬ、要するに希臘の哲學者は智識を直ちに實益に活用するの上よりして之を重んぜず人の靈を發育せしめて宇宙間の眞美を認想せしむるヿを旨としたり一言するに智識は教練の爲に價あり實用の爲(スタデース)に重んずるにあらずと信じたり。

(四) ロード、ベーコンは其學問論中に曰く、歷史は人を賢にし詩は才にし、算數は鋭くし、理學は深くし、論理は重厚にし、論理及脩辭は論辨に長ぜしむ、蓋し人の才に故障物あるなし若し相應の學科を以て之を敎ゑなば皆發達すべし喩へば身躰の病に皆相應の治療法あるが如き歟、背骨及膀胱の病には玉投を好とし肺及び脾の病には射獵を好とし胃病には緩なる運動を好とし腦病には乘馬を好とす。如此く人の才若し浮動して定まらずは之に算數を學ばしめよ若し堅白異同の辨を爲すヿ能はずば之に「スクール、メン」を學ばしめよ、若し細かに批評し一事を明鑑し論證し、說明するが如きヿ能はずば之に裁判事件を學ばしめよ、大凡心の欠典は之を補ふヿを得べき相應の方法皆夫々に存するなりと、蓋し、ベーコンは智識を見て食物となさず、之を藥の如しとせり、即はち智識は人の能力を敎練するが爲に必要なりとし之を直に實用するが故を以て重んぜざりき。

(五) ドクトル、ホエールハ其「カムブリツヂ、エヂユケーシヨシ」中に論じて、學科を固定的(パーマチント)のものと進歩的(プログレツシーブ)のものとの二に分ち古典古語明確に定りたる學理などを固定的とし現代の文學、日々に進歩する學理等を進歩のものとなしぬ而して學生は過去と現在とを二つ乍ら學ばざる可らずと云へども現在及び未來を好く推測らんには先づ過去の事に精しからざるを得ずとの論法によりて少年間の普通教育には固定的の智識を早く且つ多く敎へざる可らずと論定したり而して其の「普通教育の一部分としての算數學論」なる有名の小冊子に算數學を普通教育敎科中に尤も價値あるもの丶如く論斷したり。

(六) ドクトル、ホエールが算數學重用の小册子に對し、サー、ウイリアム、ハミルトンが著名なる駁論あり此の二大家が相互の論駁は教育社會を大に驚動し爲に「敎價」の論に比類なき進歩を促ながしたり、ハルミトンは其「哲學及文學士の論難」と云へる著書中に云へらく、之を要するに算數學を如何に多く學びたりとも之が爲に人世及び哲學が必要する數多の智力を心に備具せしむるヿを得ざるのみならず寧ろ反てその智力の發達を損ふヿあるを見るなり例せば内外に觀察するの力、抽象概括するの力、普通一般の事の判斷等は算數學によりて養成せらるゝヿなし寧ろ盲信若しくは不道理なる懷疑の何れかに陷するの患多からんとすと。

(七) ハーバート、スペンサーは其有名なる「何如なる智識尤も價値ありや」の論文中に先づ人世の活務を五大段に分ち夫々に尤も必要なる學科を論じて遂に悉とくサイエンスに在りと斷定したり、然ども其の所謂るサイエンスなるもの丶解明白ならず或時は科學を云ふもの丶如く又或時は哲學を云ふもの丶如く或時は文學を除くもの丶如く又或時は文學中に存する理法をも含むもの丶如し之を要するに總ての智識中に存する天然の理法を知るヿを指ざしてサイエンスと稱せるものに似たり今その論文中にてサイエンスの解釋を與へたりと見ゆるものを拔摘せんとするに恐らくは左の一節ならん。

To the slowly growing acquaintance with the uniform coexistences and sequences of phenomena,—to the establishment of invariable laws we owe our emancipation from the grossest superstations. p. 9. 5.

吾等が漠然たる迷信迷誤の中より歩を進め出したるものは不動確固なる天則を智識したるによる言を換れば常に同時に起り若くは引續て起る所の現象と漸次に親しみ其智識を徐々増加したるによる。

スペンサーが云ふ所の「サイエンス」の理法とは即ち之れか。果して然らば尤も價値ある智識は皆な「サイエンス」也、即ち惣ての有益なる理法なりと云ふに均しく、又喩へば何ものが尤も大切なる學科なりやと云はゞ其時に尤要する智識なり理法なりと云ふに同じ、之に解釋を與へたりと云ふ可らず 故に價値ある智識は「サイエンス」なりと云ふと雖も、實は之を科學なりと云ふの義にあらず。たゞ理法なりと云ふに異ならず。文學も哲學も其中に含まるゝとたるなり。

(八、)アレキサンダー、ベインは、その「科學とその教育」なる書の第五章に、極めて精密に「教價」を論ぜり。蓋し教價(エヂュケーション、バリュ)と云へる語も實はベインの創用に初まりたるものなり。氏は學科を大別して心を教練するものと、實用の智識を與ふるものとの二種となせり。スペンサーは實用の爲に必要なる學科は即はち教練の爲にも必要なり、天の美なる經濟は之を二ッに分つとなしと云ひたれども、ベインは之を信用せざりき。余も亦ベインの論を賛す。夫れ所云る實用とは現社會に對するの實用を言ふなり、而して現社會は不完全にして完全なる人の智德を悉く用ゆ可き處にあらざるが故に、たゞ現世凡俗の實用に供へんが爲に養成するの智識は以て完人を造ると能はざるなり。扨てベインは智識を教練及實用の二に分ち學科を文學及理學の二類となし極めて精密に夫々の教價を論じたり。

(九、)ラサムは其「試驗處置說」中に曰く、智識に只知るとを要するものと直ちに用ゆるものとの二種あり、一は働きを主とし他は記臆を旨とす、記臆を旨とするものとは歷史、地理文學の類なり、實用を主とするものとは數學、言語、文典の類なりと。斯て氏は只記臆を旨とするものを、實用を主とするものゝ下に置きたり。然れども文學、歷史、地理は心を教練するが爲に用あり、之れを直ちに實用せざるの故によりて之を卑しむべきにあらざるなり。

(十、)近年に至りウイリアム、ペーン氏は其「教育學時論」の第三章に極めて有益なる「教價」の論を掲げたり、然れども其大躰はベインに同じきを以て畧す。

(第二段) 教練及實用

(一、)第一段に揭載したる九大家の教價の說區々なりといへども、之を概括するに、智識に教練と實用との二種ありと云へるの說一也。この二種の中甲を優れりとすると、乙を優れりとすると共に必要にして同等なりとするとの說二なり。智識に教練及實用の區別なし共に一なりと云ふの說三なり。要するに之を右の三類に分つとを得べし。

(二、)智識に教練及實用の區別なしやと云ふに、既に前段に解釋したる如く、之をなしと云ふは誤の見解より出づるなり。教育は人を完全に發達せしめずんばある可らず。而して人の能力は天と地と、過去と現在と未來とに關係せり。故に人を完全に發達せしめんとせば啻に現在の地の事に對してのみ之れを養成す可らざるなり。然るに、所云る實用の智識とは、即はち、現在の現世に之を活用し、直ちに利益を收むるに足るべきものを指ざすにあるを以て、之が爲にのみ教育するの教育は、眞誠圓滿の教育にあらざるなり。左れば教育に教練と實用との二種なかる可らず。

(三、)たとひ亦た單に現在の現世にのみ實用するとを智識の主旨となすとも、直ちに之を實用するとを目的とする智識の外に、人の能力を教練するの智識なるものなかる可らず。その一は職業の爲に必要し、その二は一市民として國に生存する「カルチウア」の爲に必要す。到底智識に教練と實用との二種なかる可らず。

(四、)既に教練と實用との二種あり、故に其一を養成するときは、同時に他を養成するに同じと云ふとスペンサーが說く所の如きは實際にあるなし。農夫たらんが爲に普通の業藝を學びたりとも、之が爲に一市民たるの覺悟、品格即はち「カルチウア」を養成すると能わざるなり。

(五、)レーナン曰く、智識の尊きは只實用の爲なり、人はその地位の爲に必要する智識をのみ學ぶとを要す、と云ふが如き低き且つ眞ならざる假想說は、大に破せざる可らず、如此き說より見來れば、文學は只文字の人にのみ必要なり、科學は只だ使從せらるゝものにのみ必要なり、好き風俗と美しき品行とは、世に出て交

際する人にのみ必要なり、貧しき人は無學にして可なり、何となれば、教育も智識も彼に必要ならざればなりと云はん哉、あゝ何ぞ神靈を汚す甚しきの説ぞ、心靈を教練するは各人の義務なり、教練は單に現世の爲のみに非ず、その神靈なると宗教と異なるとなし、と。

(六)、智識に教練と實用との二ありとし、其何れをか尤も大切なりとする乎、若くは双方同樣同格に大切なりとする乎と問はんに、双方の共に必要なるは言ふ迄もなし、然れどもその優劣前后を論ずるときは、教練を第一として實用を其后にせざる可らず。人の世に存するや、只だ働らかんが爲めにあらず、働は一の方便に過ぎざるなり、又只富貴ならんが爲にあらず、富貴は亦一の方便に過ぎざるなり。夫れ富み且つ貴くして世事の益を爲すほどに働らくの主旨は、人世に存するの義務を盡し、善を行ひ、以て人たるの德を立るにあるなり。故に教育の主旨、亦た此大目的に適ひ、人をして完人たらしむるの教練を第一にせざる可らず。然れども人たとひ德ありとも、德を實地に用ひ、人を益するの藝を知らずんば、啻に世の交際に益なきのみか、遂に人の助けを乞ひ人の厄介となるに至る可し。故に亦世に立ち相應の職業を執行するとを得るの智識なかる可らず。左れば教練の智識を第一にすべきは勿論なりといへども、實用の智識をも亦忽諸にするとある可らざる也。

(七)、智識に教練と實用との二あり、而して教練を主とし、實用を副とす。ウイリアム、ベーン氏は、之に似たる意見を以て、教育を左の如く分ちたり、

- 教育
  - 實用的
    - 直接
    - 間接
  - 教練的
    - 特別(スペシフヒック)
    - 一般(トニック)

直接の實用とは、技藝の直ちに實用すべきものを云ひ間接の實用とは、若し其事を知り居るときは、間接に我益となるが如きものを云ふ。教練的に特別と一般とあるは、喩へば藥に局部用と强壯劑との別あるが如きを云ふなり。例へば歷史、地理、文學の如きは一般の强壯劑にして、人の心靈を圓滿に教練す、數學、一地方の地理學、植物學(分類の上に於て)生理の如きは、特別の局部用なりと。

(八)、ベーン氏は、右の論法によりて、一層細密に諸學科の教價を分類し、その優劣を表示したると、下の如し、

第一表

學科	實用 直接	實用 間接	教練 特別	教練 一般
讀書	高	低	低	低
文典	中	低	高	中
歷史	低	中	低	高
地理	低	中	低	高
數學	中	低	高	低
生理	低	高	低	低
理學	中	高	低	中
植物學	低	中	低	中
文學	低	中	低	高

右表中、高中、低は其必要の處の高低及中位を示す。

第二表

學科	記臆力	觀察力	理解力	想像力	感情	會得力
數學	中		高			
植物學	高	高				中
地理	高		中	高	中	高
歷史	高			高	高	高
文學	高			中	高	中
理學	低	中	中			
生理	中	中				低
文典	中	高	中			

(第三段) 學科課程編成の基礎

(一)、教育上學科課程の必要なると、隨て學科に教價の多少あると、之に關し諸大

家の說區々なると、隨て教育を教練實用の二種に分つべきや否やの議論あると、到底之を二種に分たざる可らざると等の理由は、前二段に於て畧ぼ說明したり。此に至り余は余が、信ずる所を述ぶべし。

(二、教育は、人を完全に發達せしむるとを要す、而して完全なる人とは、基督を理想とす。斯て基督の完全たる所以のものは、能く神を敬し人を愛し自己を重んじ、而も其愛敬重の完全なりしが故なり。左れば善良の教育は人に此完全なる愛敬重を發達せしむるものならざる可らず。

(三、ハーバート、スペンサーは人の活務を五に分ち且つ其の切要の度に隨ひて、序を追ひ記して曰く、第一は直接自己防衞と、即はち身体を保護し、生命を安固にする直接の處置を云ふなり。第二は間接自己防衞と、即はち身体生命を間接に保護するものにて、衣食住を得るの處置を云ふ。第三は子孫防衞、即はち其子を養ひ且つ教育するの處置を云ふ。第四は自國防衞、即はち其國を衞り國に對するの義務を盡すべき處置を云ふ。第五は快樂、即はち、以上四の活務皆畢はり、尚餘暇餘力あるに於て、美術上の快樂を求むるの處置を云ふと。而して、スペンサーは、此五の活務に對し、その尤も切要なるものに、尤も多くの智識を與へ、其切要の度少き方の智識を、后に廻はすを以て、學科課程(カリクラム)編成の元則となしぬ。

(四、スペンサーは、人の一生を、其肉体あるの間に限り、人の目的を世に立て完全なる生涯(即はち己を益すると尤も多く、隨て他に害を及ぼさゞるの生涯を送るにありとなし、身体亡ぶれば即はち我の利益最早失せ行くものと考ふるが故に、人世の活務を、斯る部分と、斯る階段とに分たざるを得ざりき。然れども、人の一世は、現世を以て畢るべきにあらず、人、肉体を取りて現世に存する所以のものは、現世に存する他の同胞に益を爲し、且つ己れの靈を研磨發達せんとするにあるなり。故に、人間の目的と義務とは、たゞ肉体ある現在の區域内より立論し、その狹き内よりしてその方向を妄斷す可らざるなり。人は、先づ神を敬せざる可らず、次に他を愛せざる可らず、之を人の尤も大なる義務及目的とす。然れども既に肉体を取て世に存するが故に、亦た其肉体を大切にし、人を益するの働きを自由に行ひ、無病壯健にして人の厄介とならざるとに用心せざる可らず。此に於てか、己を重んずるの義務を生ずるなり。

(五、この故に、余輩は、學科課程を定むるに、左の順序に隨へる覺悟を懷くものなり。

教育は人を完全に發達するとを要す、

完全なる人とは基督の如し、

基督は、神を敬し、人を愛し、自己を重んじたり、

故に、教育上人を完全に發達せしめんには、

一、神を敬し、人を愛するやうに養成せざる可らず、

二、人を愛して、之が爲め實際、力を盡すとを得るの智識あらしめざる可らず、

三、又、身を重んじ、健全ならしめざる可らず。但し此身を重んずるは、神を敬し人を愛するが爲の目的に隨ふものなり。

左れば、教ゆる所の學科は、此三段の必要に應じ、且つその切要の度を、順次に遞減せざる可らず。

(六、第一は、即はち德育なり。其教科は神あるとを教へ、神の性質を教へ、神と人との關係を教へ、人の運命及目的を教へ、人の義務を教ゆるにあり。其目的は專ら人の靈性を開發して、其本然に存する敬神愛人の美質を引出し、其肉体と能く調和せしめて、之が品德品行を造るにあり。其方法は宗教、倫理、美術、教師の德行、等にして、高尚偉大なる靈の勢力を以て、人の尤高尚なる本心の上に靈の大感化を及ぼすにあるなり。

(七、第二は、即ち智育なり。而して智育は、人、世に立て人を愛するが爲の實行を爲すの準備なれば、之に樣々の智識を與ふるとを要す。その大体を云はゞ、職業的、父母的、國民的なり。此の三部に於て、夫々に必要する智識を教へ、內心の愛を相當有益に現はすとを得るの方法を得せしむるとを旨とす。

(八、第三は体育なり。体育に、有形的無形的の二あり。有形的とは、運動營養等によりて、身体を養ふを云ひ、無形的とは、美術上の快樂によりて、心を養ひ隨て身体を健にするを云ふ。

(九、以上三育は、殆んど優劣なき程、同等に切要なり。然れども若し其前後を言はゞ、德育を第一とす、而して智育と体育とを其后に双び立つものとす。人若し敬神愛人の念を欠かば、何事を爲すとも益なし。故に德育を最初、最大、最要のものとす。次に人に益を爲さんが爲に、樣々の智識を得たりとも、若し多病にし

て働くとを得ずば、之を行ふと能わず、智識ありとも無きに同じ。たとひ亦身體健にして、勇氣勃々たりといへども、其要を實行するの智識を知らずんば、死せるに同じ、故に德育に次では。體育と智育とを兩ら、同等に切要なるものとす。

(十)、學科課程を撰定するの原則は、之によりて定まりたりとせん。然らば、實際に於て何如なる學科を先にし、何如なるを後にし、又何如なるを增し、何如なるを省き、若くは減ぜん。即はち各學科の數價なるものを、何如にして定めんかと云ふに、余は、之を裁斷料理して、動かざる一定の表の如きものを作るとの、極めて、困難に、而も利益少なきことを信ず。

(十一)、然りと雖へども、何如なる學科をも皆學ぶべし、皆な夫々の益ありと云ふものにはあらず。此類の誤解は、スペンサー、其敎育論に於て、曲さに論倒したり。曰く、敎育學上に於ては、何等かの益ありと云ふの故を以て、之を敎ふるにあらず、若干の時間に、成べき丈多くの利益を、成べき丈ケ効能ある方法によりて得せしむるとを主旨とす、若し何等かの益ありと云ふの故を以て之を學ばゞ、世上の事何事と云へども皆多少の利益なきはあらず、即はち、皆之を學ばざる可らず、と。此論極めて好し。劉廷之が、代白頭翁悲の詩に、

年々歲々花相似、　　歲々年々人不同、　　寄語全盛紅顏子、

應憐半死白頭翁、　　此翁白頭眞可憐、　　伊昔紅顏美少年、

今日の美少年、暫らくして半死の白頭翁となる。人生の短きは、二ツの指を彈く間の如く、雨滴の簷より下に落る隙の如し。永遠に續くべき靈の智識に至ては、何如に小さきとをも、何如にも多く學び置くべし。何んとなれば、其は永遠に續くものなれば也。只だ此世に立ち、人に對して其要を現はさんが爲の世の智識を學ばんには、短き人世に於て、尤も多く人を益するに足るの智識を學ばずんばある可らず、然らずば、死の招き直ちに到り、未だ何事をも人の爲に爲さざるに先ち、身已に墓中に入らんとす。遺憾何んぞ及ばん。左れば、人は何如なる智識をも皆學ぶべきにあらず、綱に撰びて、尤も益あるものを學ばざる可らず。

(十二)、此に於て、觸ゝ學科課程の必要を知るなり。左れど、その一般を概括して之を通論するに當りては、たゞ學科課程を編成するの覺悟を示すの外ある可らず。特殊個々の各論に入りて、何如なる學科を增減取捨せんとすと云はゞ、學生の年代に隨て、之を異にすと云はざる可らず。故に、各學科の數價をたゞ絕對的に論定するとを得ざるなり。此后、各年代の各種の敎育を論ずるに當り、其都度、各學科の數價に論及するを以て當然のとと信ず。

第四章

一段　序

(一)、大學校の敎師は曰く、最早其生徒の氣質定れり、何如んともすることと能わずと。中學校の敎師、小學校の敎師、皆均しく順次に、同樣の事を言へり。然らば、生徒が氣質は何處に於て定まりしや。幼稚園か、幼稚園の保姆は、歎じて曰く、最早其の氣質を改むることと能はずと。左らば母か。母は其兒を對觀して云く、生れたる時より、既に此兒と彼兒とは相違したりと。斯の如くば、人間氣質の相違は、最始何處に於て始まれりや。胎內か、曰く未だし。其胎內に宿せざるの以前、既に父母の遺傳、未來の兒の一生を支配すと云ふべし。

(二)、故に余は、敎育學本論に入るの第一回に於て、先づ遺傳の理を說かざる可らず。未來の兒を造出するに於て、先づ最始に働らく所のものは、遺傳の理法なり、而して其兒發達し、異日の父母となりて、第二世の兒を擧ぐるに至るとき、即はち敎育學の區域を離るゝの時も、亦た遺傳の理法によりて支配せらる。左れば、人は、遺傳に始まりて遺傳に終る、敎育學の終始關末は、遺傳の理法を以て序とし、跋とすることを見る也。故に余は、先づ遺傳論を以て始め、終末に至り亦遺傳法を以て結ばざる可らず。

二段　遺傳の偉績

(一)、ジヨウセフ、クツタ氏は、尤も愉快に遺傳の事を講述したり。其遺傳講義錄の第一章に、昔しグリーキに於ける數多の俊才英傑は、大抵遺傳の氣に起れりと云ひて、先づ希臘國に著名なりける人々二十八氏を列擧したり、

紀元前五百年より三百年に至る二百年間に於て希臘人種が出したる偉人表

政治永家大元師には

Miltiades ; Leonidas ; ThemistocLs ; Aristides ; Cimon ; Epaminondas ; Phocion ; Pericles.

哲學者及び學術者には

Pythagoras; Socrates; Hippocrates; Euclid; Plato; Aristotle.

詩人には

Anacreon; Aeschylus; Pindar; Ewripides; Sophocles; Aristophanes.

彫刻家、美術家には

Apelles; Phidas; Praxiteles;

歴史家には

Herodotus; Thucydides; Xenophon.

雄辯家には

Aeschines; Demosthenes.

(二)、而して此の二十八氏は、皆な、アッチカと云へる小き都(當時文物の中心)に生れ、若くは教育せられたる人々にて、何れも此都に關係を有せざるはなし。即ち希臘の偉人二十八氏は、小き都アッチカより造り出されたりと云ふべきなり。

(三)、左れど、實に、アッチカにて生れたる人は、百年間に其中の十四氏なれば、先づ此十四氏に就きて遺傳の理法を明らかにせんとするに、尚ほ驚くべきものあることを見るなり。當時、アッチカには自由の民九万人ありき、而して一世紀(一百年)の間に、人は大抵三代繼するものなれば、アッチカ極盛の百年間に、九万人の三倍たる二十七万の人生れたりとせよ。此中半數を男子として、十三万五千の男兒ありけるうち、二十五の丁年に達せざるもの亦半數なるべければ、殘數六万七千五百人は、アッチカ全盛百年間の丁年男子の數ならん。此中より、十四人の偉人を出したるを以て、アッチカの自由の民四千八百二十二人に付一人宛、古今に秀抜せる人物を出したり。あゝ五千人に付一人の偉人を出すことは、空想にあらず。昔しグリーキの一小都に於ては、實際此驚くべき偉績を奏したる也。

(四)、何故に、如此く偉人續出せしかと云ふに、其理由の最大なるものは、即ち十遺傳の理法にあり、故に、一と度び婚姻の風儀破れ、異種の血を混ずるに至てより、俄然として人才輩出の途を塞ぎたり。ガルトン其天才遺傳(ヘレデタリー・ジニアス。三四三)に希臘衰弱の元因を列擧して云く、

婚姻の制緩漫となりしと

婚姻を嫌ひ勝手に放埒するもの殖しと

多能有望の婦人悪癖に流れ随て子なかりしと

放埒よりして身躰に害毒を生ぜしと

次代の民の母異種の人なりしと

此等の元由は、皆な遺傳の理法を破り、折角に蓄積したる天才の血統を破壞したる事情を指示するにあらざるはなし。左れば、希臘の衰弱は、過半其天才の遺傳法を破りたるによると斷言するを得べし。

(五)、希臘は、遺傳の法を利用して、古來無類の人才を一時に輩出せしめたり。而して、其法を破りたるにより、亦俄然として衰へたり。遺傳の、人才國家の盛衰存亡に關する大なるを、如此し。

三段　遺傳の區域

(一)、同じきもの同じき者を生む(Like begets like)と、之れ生物界普通の天則にして、而して亦遺傳法の根礎たり。遺傳は、身躰形骸の上に著明なるのみならず、亦心理の上に於て著明なり。而して身躰形骸の上に於ける遺傳の顯然たるとに至りては、亦細説するを要せざる程なり。たゞ其の遺傳の行はるゝ區域如何に廣きかを、左に略示すべし。

(二)、リボット氏の遺傳論(ヘレデテー)は、其首章に於て、生理的遺傳の要項を擧盡したり。諸君暇あるとき參看するを可とす。余は、今ま、其大畧を擧げ、遺傳の區域の極めて、周密廣大なるとを示さん、

子にして全く父に似、殆んど見分けがたきに至るもの多し。

兄弟若き間は、其父に似、同じき頃姉妹は其母に似たるが、晩年に至り兄弟は母に似、姉妹は其父に似るものとなりたるものあり。

フレデリック、ウイリアム第一は、巨人を好み、撰擇制治したりければ、其下に、多くの巨人出來たり。

身躰の皮膚の色、形、大きさ皆自由に其子に遺傳すると多し。

啻に外部の躰格のみならず、內臟の諸器關より血液運行の何如に至る迄で、皆一々遺傳す。

特別の癖、特別の形、皆悉く遺傳す。男子產力の多少、壽の長短、勢力の强弱等皆一に遺傳す。

廿四人の子を産みたる母の姉五人は、合して四十六人の子を産みたり。母が産見力も亦遺傳す。

疫病に感染せざるの族あり、能く遺傳す。

聾啞も遺傳す。

習慣も遺傳す。

疾病も遺傳す。

(三)、右に大畧を示したる如く、身躰形骸に關する上の遺傳は、極めて顯著なり。然れども遺傳は啻に之のみにあらず、極て微なる心理上の諸性質に至ても、亦一々此理法を洩るゝとなし。天能(インスチンクト)も、官能(センス)も、記憶力も、想像力も、智力も、情感も、意思も、國民の氣風も、各人の藝能長所も皆一々遺傳す。

(四)、フランセス、ガルトンは、專ら遺傳の理法を研窮する所の學士なり、嘗て英國著名の學者全躰に書を送り、様々の質問を寄せて、其答を集め、以て遺傳の理法を概括研究したるが、其成績載て、英國學者(インゲリシ、メン、ナザ、サイエンス)に在り。細に其記載する所を察するに、凡そ著名なる學者は、皆な其父母親戚より、夫々の學能を遺傳したるとを見るなり。又、リボツト氏は、遺傳は身躰にのみ關するものにあらず、必ずや心理の上にも關係すとの理由を證明せんとて、尤も周密博識なる遺傳論(ヘレデテー)を著はしたり。ガルトン氏が、天才遺傳(ヘレデタリー、ゼニアス)も亦同様の志に成る。余は今ま一々其例證を舉げず。然れども若し此等の三書を繙かば、實證雲の如く集まり、明白天日の如く、毫も爭ふ能はざるを見ん。

(五)、余は、左に精神上の遺傳の尤も顯著なる事實を少しく列擧し、以て其全般を推知するの料とせん。

(六)、記憶力も遺傳す。ガルトン曰く、英國に希臘語學者として有名なるリチヤード、ボルソン氏の家族は代々記憶力に富めり故に「ボルソン記憶」と云へる、諺を生ずるに至りぬと、リボツト曰く、セ子カの父子に於て其例を見る、父なるマーカス、アンナウスは二千の語を其聞きし通りの順序にて復誦す而して其子なる、ルシアス、アンナウスモヤ、之に劣りたるのみ等しく珍らしきほどの記憶力を有したりと。

(七)、想像力も遺傳す。先づ詩人に付て言はば、バイロンは其の多情多餠にして殆んど牛狂の如き母より遺傳したり左れど之れのみならず其父母の兩血統を尋窮すれば何れも皆な氣質不調子の人にあらざるはなし。故に諺にも云へり、もし遺傳と云ふことを證せんとせば、バイロンを見よと。ゲーテは生理上に於ては其父より、心質に於ては母より想像を遺傳したり。其他、ボルンスも、ミルトンも、ナツナルスも皆な此に類す。次に畫工に付て言はば、ベセリナ、チチアンの家族には、有名なる畫書九人あり、チントレツト、ロブスチの子は男女ともに亦た著名の畫工たり、其他此類多し。最后に音樂者に付て言はゞ、セバスチアン、バツハは、一五五ケ年より以降八代凡ソ二百年間に二十九人の第一等音樂者を出せり。ベトーベンの父も祖父も樂人たり歌ひ手たり。モザルトの父も妹も子も皆な同じく樂人たり。メンデルツソーンの祖父は美學論に數多の著書あり、叔父も之に同じく、其姉妹は名高きピアノ彈たり、此類甚多し。

(八)、智力も遺傳す、アリストールトは父は醫學書の作者たり、子は論理論の著者たり、嫁も亦名あり。ベーコンの父も母も名高き人にて特に母は名家の娘たり、ラテン、グリーキの語にて巧に詩を作りたり。前年ベーコンを作りしは母なり、母はベーコンを生みて之を養育したり、故に女性に高等學ぶ教ゆるを要せず、たゞ育見法を教ゆべしと云ひたる大學教授あり。彼人はベーコンの母亦た學者たりしとを知らざりし也。此他、ダルヰン。ハーシエル。ミル。マコウレー。マダム、デ、スタル。ゼームス、ワツトの類尤も名高きもの也。

(九)、意思も亦遺傳す。ジウリアス、シーザーが家には代々一種の雄偉傳はり居たり、チヤーレス第五世と其祖父ドンヽカーロスとの似寄りたるとは史論中著明の材料たり、ロバート、ピール。リシリウ。シエリダン等が家族並にアレキザンダー大帝、シシピナ、トレミー等の血統は尤も著明なるものなり。

(十)、以上は精神上遺傳の尤も著名なる事實を列擧したるものなり、夫れ一個人々の上に於て此の理法の行はるゝ事斯の如し、故に一國民の氣風となりて國風の上に遺傳する事亦之に讓らず、各國各自にその風を異にするは他に種々の元因あること勿論なりと云へども一大元因として遺傳の理法を算入せざる可らず、例せばユダヤ人の如き、カゴツト(現にピレニース　の北方なる、ギユエーニ、ガスコニー、ビールン又はナバーレ、ザウブダコア、或はメイン、ブリタニー等に住居

する人種）の如き、ヂプシー（ボヘミヤ人、ハンガリア人は此類なり）の如き凡そ其の國民の氣質を維持して千古其態を變せざるものは其尤も著明なるものなり而して各國民風の容易に變はらざるヿも亦多少之に類す。

四段　遺傳の種類

（一）遺傳の區域の廣きヿ前段說述するか如し。ゼチセフ、クック氏之を概括し、其種類を列擧して曰く。
（二）第一は直接遺傳（ヂレクト、ヘレヂテー）と、即はち子が親に似るを云ふ。
（三）第二は復祖遺傳（Reversional H.）と、即はち孫が其祖に似るを云ふ、
（四）第三は連係遺傳（Collateral H.）と則はち子が其叔父叔母に似る類を云ふ。
（五）第四は同類遺傳（Co-equal. H.）は即ち多くの男女の子不思議にも亦似るを云ふ。
（六）第五は先祖遺傳（Pre-marital）は即ち先夫夫先母に似るを云ふ。
（七）第六は胎內遺傳（Prenatal H.）即はち母が胎內に在る間に非常の化を蒙りその感化するものに似るを云ふ。此の事に付ては次章に更に明說すべし。
（八）第七は最初遺傳（Jnitial H.）と即はち第一の直接遺傳に似て稍異なるものを云ふ、蓋し父母が其子を產したる當時の癖、幸不幸等によりたる感化に似るものなり。

五段　遺傳法の利用

（一）、遺傳の理法は人世の實を積むものなり、人の靈性にして若し遺傳するヿなからんには、喩へば灌木の一年茂り榮へて后忽ち枯るゝが如し、遂に亭々たる喬木とふるヿ能はざるなり。抑も遺傳理法存す、こゝを以て人は漸次に開化し、世は段を追ふて文明に進むなり。經に云く、第一のアダムより人罪に入り、第二のアダムより人救に入ると。人の善となる惡となる共に遺傳の理法に關するヿ多し、今日吾等が爲す所の一事は、后世万代に影響すと考へ來れば、轉た責任の重大なることを感ぜずんはあらず。

（二）、且つ此の理法の教育に關係するヿ、極めて多きか故由は、一聞して直に明瞭たるべし。今日人を教ゆるの教は、永世に續くべきものなり、一點一劃の天の則も、決して破るゝヿなし、今日人の爲に爲したる最と些細なるヿも、必らずや后に其報ひあらんとす。左れば愚かなる人ならば、一層の熱心を以て教へざるべからず、この愚を遺傳すると、之を賢にしたるものを遺傳せしむるとは、万世に天地の相違あれば也。

（三）、人もし其子を好く教育せんと欲せば、六才小學校に入るのとき、初めて綿密に用意せりとも、尙晩し。最初の用心は、其一生の同伴者を定むるのときにありと云はざる可らず。今世の俗、身代持參金などに注意するものはありと云へども遺傳の理法に隨て、如何に多くの實を其の心理上に所藏するかを考ふるもの少なし。但し又身躰の上に遺傳病のあるかなしやを穿鑿するものはありと云へとも、精神上に如何なる惡僻惡質を遺傳するかを考ふるもの少なり。斯て、男女輕々しく相婚し、最初に於て惡の種を子孫に遺さんとす。異日、子孫の善に完きヿを得ざるも亦其根源なりと云べし。

（四）、ゼチセフ、クックは、遺傳の理法を研窮細思して、遂に其利用法幾多を說けり。今ま左に之を揭ぐ。其直接教育に關係せざるか如きものも、間接に之に影響すること、多きものなり。

（五）、曰く、人種を改良せんには遺傳の七種の一つ若しくは二つに、特更ら重きも置くヿなり、其何れにも重きを置きて、之に用心するヿを要すと。左れば、一個人の好き發達を希ふにも、亦七種の遺傳法の關係する所を考へて、諸方面悉く好き種を傳ふる樣、準備せざる可らず。

（六）、曰く、同類遺傳、及び最初遺傳等により、その子の男女に父母の性質を同樣に傳ふるもの理法に鑑み、男女はもと自から同樣同格の影響を蒙むるものたるヿを知り、且つ男女の世に存する大抵相併行平均するものたることを推知し、之よりして一夫一婦の天則を確認す。加之、父母の性、斯く斗り、相合同して其子の男女の上に遺傳し而も其子の男女は斯く斗り相似るべきものなれば、其子は即はち一人の父一人の母より出で、其同胞相似て相親まざる可らず、之あらんが爲めには、亦一夫一婦の天則の極めて、切要なることを知るなりと。

（七）、曰く、現今人々の爲す所を見るに、其力其業に適せず、皆任重くして量足らず、營々として日に弱り行くを見る、此時に當り、人の精力を強くするの法なかる可らず、而して精力を強くするに先づ尤とも欠く可らざるは、一夫一婦の天則

を實守するにあるとを遺傳の理法によりて認知すと。

(八)、曰く、同族婚姻は、次第に人を弱くす、貴族王家の人の大抵暗弱なる大元因の一は即はち之なり、故に人は位階等級によりて擇び相婚することなく、高貴なる人を得て、之が同伴者となるべし、然るときは必ずや美質を遺傳するとを得ん歴史上最大强國の人民となりたるもの丶遺傳系統を考ふるに、多くは、皆な種々の善き血を混じたり、決して一族同宗の中にてのみ發達したるにあらざる也と。

(九)、以上クツク氏の論話は、要するに婚姻の制度を清くし重くするにあり。遺傳の理法嚴そかにして濟す可からず、而して此の理法をして實行せしむるの方便は即はち婚姻にてあるなり、婚姻の事最とも愼しますんばある可らず。地質學者デーナ同を設けて曰く、今まの人類の次には何如なる生物が來らん、今の人類は下等動物より進化したるなり、此人類將に何如に進化せんとする乎と。其想像に至りては固より「デーナ」氏と同じからず、然れども人は必らずや靈魂上に於て大に進化すべし、而してその進化を實行し、維持し、擴張するものは即はち遺傳の理法なり。

(十)、子は其生れざる以前より、否な之を生まん爲めの婚姻未だ成立ざる以前より既に教育學上の注目を要す。人は既に教育學の保護案内を經て成人し、其蓄積したる才能德性を后に讓らんとするとき、亦た后世の爲に教育學上の注目を要すこれ即はち教育學中の遺傳の理法なり。

第五章　胎教

一段　序

(一)、列女傳に云く、古者婦人子を姙めは寢るに側だず坐るに邊よらず、立に蹕せず、目に邪色を視す耳に淫聲を聞かず、夜は瞽をして詩を誦し正事を道はしむ、如此すれば則ち生るゝ子形容端正にして才人に過ぐと、之が爲に文王の后は胎教を爲せり。

(二)、子が母の胎內にあるときは、猶ほ母が一身に繋がれる五躰の一の如し、五躰は全身の氣によりて影響せられ、全身は一心の何如によりて感化せらるゝことを思ふに於ては、母が胎內に其子を懷けるとき、その身及び心の上よりして之に影響感化を與ふることの多きは勿論なり。

(三)、人の一生は其幼時にあり、而して幼時の氣質躰格は既に胎內にあるときに定まる、母が胎兒に於けるの關係は極めて緊要なるものあり、此の處に於て先づ教育を初めざる可らず。

二段　身躰上の胎教

(一)　心によりて肉躰を制するとを得、强烈なる精神を以て病死を防ぎ止めたるもの少なしとせず。ネルソン既に死せり、然れどもその精氣尙盡きず心臟動殆んど絕するとき、尙生きて最后の戰捷の報を聞き則はち眠りぬ、彼は其精氣を以て心命を續ぎたるなり。昔しスクロフラと云へる病ありしに、王之に觸れば忽にして療へぬ、王の威光より其病を制せしなり、之によりて一にキングス、イビル、と名けたりき。美なるマリエ、アントイチツテの髮毛暫時にして白なり、千字文の著者一夜にして白髮となりぬ、此等は皆精神が肉躰の上に及ぼす影響なり。夫れ精神すでに、肉躰の上に、如斯き大影響を及ぼすとせば、母の精神氣質は、其肉躰の一部分と云ふべき胎內の子の上に影響せざらんや、實に胎兒の身躰は、母が精神柔質によりて、大に變化するなり。

(二)、ニウヨークの、プロフエツサー、ハンモンド曰く、其郡の或る婦、懷胎三ケ月の時、其人面に傷し流血淋漓たる慘ましき形をもて或夜歸りしかば、かの婦驚倒絕息したり、このとき余は之を診し且つ其後も之を治療したるが、婦は絕へず其兒に何か觸れかしと案じたるに、後ち女兒を產むに至り、其面てに黑紅色の斑點ありき而して、其位地、其大宛然彼の其人が顏に傷したるときの狀にてありき」と

(一)、ニウヨークのプロフヘツサー、ダルトン曰く、北部の醫學校の門番の妻或る夜二の耳を失ひたる人の事を夢み甚だ强く之に感動せしが後に子を產むに至り其子の耳一端を欠き宛がら殺ぎたるが如くなりし」と。

(四)、此他同樣の反例、甚多し、或女は手掌なき乞食が物を乞へるを見棄て使之を助けざりしとを深痛し遂に手掌なき子を生みたり（プロフエツサー、レ井ス、スミスの說）ルイ十四世の妻マリエ、セレサは、之に仕る黑奴の急に出て衣服に足を

かけて倒れたるに驚き、遂に黒き王子を生み、或る母時計のことを切に考へしに其子の顔の上に時計の形ありありと現はれたり（デマンゲチン氏の說）如此き實例多く、ドクトル、ナフユー氏の、フヒジカル、ライフ、チフ、ウーマン、百八十一頁以下にあり。

（五、）此等の實例によりて既に明なるが如く母の精神の何如んは其胎兒の身躰の上に非常の影響を及ぼす、母もし神經質ならば幾度か胎兒を驚かせて其未生れざるに於て既に早く之を弱くせしむべし、グリーキの婦人美なる像を寢室に置き、その胎子を美にせんとしたり　然れども躰貌の美なるのみにはあらず、壯健々康の子は必ずや信切なる胎教の結果にあらずんばあらず、他日教育學上躰育の行はるゝと否と、既に此時に存す。

三段　心靈上の胎教

（一、）其感じ易きとを言はゞ身躰は心には及ばず、胎兒の胎內に存するや、全身之れ肉の如く、全身これ心の如し、心と肉とを分つと甚だ明ならずと云へども、然れ共其所謂心なるものは即はち、その肉躰中の尤も鋭敏なる尤も靈活なる所なり、母の精神すでに胎兒の身躰の上に影響せず、何をもてか更に感じ易き胎兒の心の上に影響する所なからんや。

（二、）我は是れ主の使女(ツカイ)なり爾の言る如く我に應(アレ)かしと、この信深く情潔よき乙女こそ「クリスト」を胎內に宿して、その最と清き、心の上に汚れざる感化を生ずるとを得たるなり。又エリサベツ、マリアの話を聞きて心動き、胎兒腹の內にて跳れるほどに喜こびたり。この二人の高潔なる婦人三日の間だ共に住ひ、神の惠を談じ、贊歌を歌ひ、一身を天に献げて胎內の聖き兒を守り養なひたり。夫れザカリアは、ヨハネを胎み、マリアはクリストを姙らむ。彼等皆な其生子の前途を察知し、腹中に神の人を宿して其間心の嚴なりしこと、抑も何如斗りぞ。吾等今より之を推察し如此き婦人あるによりて則はちヨハネ、クリストは、天の命じ玉へるまゝの最と清き姿にて生れ出でたりとは思ふ。

（三、）美術家、フラックスマン氏の母は、氏を生む前數ヶ月、日々彫刻を學び深く美術上の思想を養ひたり、故に言へらく、其子の天才は胎教に成れりと。昔し日輪懷中に入ると夢み又巨人の足跡を履めりと夢みて遂に偉人豪傑を生むに至れるなど、母が平常深く心中に偉人豪傑を慕ひたるの結果ならずんばあらず、胎教の、重んず可きと之によりて、明かなり。

第六章

母の感化

一段　母の重任

（一、）胎育の章を畢り、次に幼稚園の章に遷らんとするに當り、茲に母の感化に付きて講述するの適當且つ切要なることを感ず。キルク、ホワイト曰く、吾等が歩み何處に彷徨ふとも、たとへ打笑める野原を行き樹なき荒野に迷ふときも裏樂しき記憶の思ひ吾等を導きて、母よ汝が膝下に吾等を招くなり、母の感化畢生決して消ゆ可らずと、蓋し母の感化は一生に渉る、之を其幼時教育端緖の時にのみ存すと思惟すべきにあらず。左れど其感化の最とも重大にして而も其影響の一生に汎れく行渡るとを思ふときは幼稚園の章を講じ出さゞるに當り、茲に先づ其梗槪を盡すを適當なりと信す。

（二、）苗木の外皮に極めて微かなる印しを刻み置かんに、苗長ずると共に其印擴張し膨大し遂に著明なる符徵とならん、人も亦た斯の如し、其少時に於て與へたる些少の感化は年と共に增長し自らにして至大の影響を生じ來る故に人の一生の大要は既に母の膝に抱かるゝの時に決すべし、西國立志篇に云く、或婦人四五才の少兒を携へて或る宣教師の許に到り師よ此兒は教ゆるに尙早きかと問へり、教師答へて曰く、否な、既に晩れたり、孩提の子汝に抱かれ汝の眼光に射られ、汝の溫顏に溫められ、片手に一の乳房を握りて一方に乳を吸はん其の時既に汝が教育は初まりたるなりと。母は其子を胎內に宿すとき既に教育の念なかる可らず、況んや既に之を産み、之を愛の双手にて抱くの後に於てをや。

（三、）渾沌として天地未だ分れず、六合濛々として萬物未だ定らざるとき、命じて茲に萬の物を創造し玉へるは愛ある神の大御心なり。其れ、人未だ世に生れず、

其運命未だ天の大帳簿に記載せられざる中、第一に其種を宿し、辛苦十月、苦慮一生に價ひし、産みの苦しみにも尙ほ優りて案じ煩ふは母なり、月満ちて曉の天明くると共に人世に一個の新しき靈物生れ來る、第一に其快絶なる泣く聲を聞くは母なり、最初に之を抱くも亦母なるべし、此兒の生命は樣々として斷へざる細き糸の如し、之を繼ぎ之を太くし、之を伸すものは父母の乳養と愛育とのみ。天下を震動したるナポレオンも幼き時は其母の一呼吸の內に生死の運命を任たるなり。社會學に曰く、家族は母と子とより初まる最初は父を含まず、況んや他の親戚を混せずと。又曰く、愛は家族より初まり、文明も亦家族より生ずと、而して母と子とは家族の初めなり、アヽ母と子と云へる驚ろく可き妙なる言辭の如きもの他に尙ほ存するや何如に。チヤールス、キングスレー曰く、全世界に母が子を抱くの狀よりも更に美なる景色何處にありや、ラフハエロは此稀なる景色を寫さんとしたり、數度び之を試みたり、然れども遂に心限り其美を寫し盡くすと能わざりきと。

(四)、天父が人を世に生ずるや所在る手立を盡して、その發達の上に念を掛けさせ玉ふ、而してその大御心に安んじて之を托し玉ふ所ろの人は、即はち母なり、天の父は其愛子を先づ世上の母に托し玉へり、母は人世に於ける第一の創り主第一の保護者、又第一の教師なり、母の愛は最と切なり、而して其子の爲には驚く可き勇をも兼備したり、天下母がその子を愛するが故に愛するの勇の如く勇なるものは未あらず、ルツソウスは感じて曰く、鍛は弱はし、左れど母は強しと、母は尤も鋭敏なる眼を以て更に尤も鋭敏にその子を看視す、子の病氣は先第一に母に知らるゝなり、子の悪僻は先第一に賢母に指摘せらるゝなり、母の觀察のその子に徹するや兩刄の劔よりも鋭く光線の暗きを照らすよりも明らけし。

(五)、母は斯る至重至大の天職を負へり而して又斯る無上無限の幸福を備へり、その子は親らの子に非ず、天與の人を托せられ之を天父に似る所の人に發達せしめ以て、世に出すは其責任なり、使命の神聖高潔なる他に之を比ふべきものあらんや。故に、人の一生の榮枯盛衰は先づ種を母の膝下に於ける孩提のときに兆す、一家一國の興亡起伏早く此の隱微の所に決すと知れ。

二段　偉人の母

(一)、古今の史傳を考ふるに凡そ愚父に賢兒はありと云へども、賢ならざるの母より良き子を生じたるに至ては稀なり、英傑偉人は皆な賢母の膝下に生育し來りたるものなり、ラウラ、ホルロエー前年 The Mothers of great men and women と云へる親ろに價値多き書籍を著はし、此の理を證明したり而して、この書の著者は亦た母の感化を尤も切に感謝したる一人なりしかば、則はちこの著書を捧げて、亡き母に「デジケート」したり。

(二)、今左に古今尤も著名なる偉人にして而して、其母の感化を尤も切に感謝せる人々の實證を列擧せん。

(三)、セント、アウガステンは、其懺悔の記に曰く、神よ汝に忠なる婢、余が爲に汝の台前に泣きぬ、その泣くは、世の多くの母がその子の肉躰の死せるに泣くとは異なれり彼女は余が躰は生たりと云へど尙ほ死せるを知ればなり、然るに汝は彼女の涙を輕んじ玉はず、彼女の涙流れて何處の地を潤ほすときも其地に汝の惠降りたり、………彼女は遂に勝ちぬ、神は祝福を與へ玉へり、ナインの寡婦が其子を奪ひたる熊を追へるが如く彼女が痛泣遂に「吾汝に云ふ、起てよ」と」の御聲を汝より得たりき………アヽ余が持てる惣ての物は皆な母より得たり、ナヽ吾神よ、吾いま汝の子たるとを得るとせば、そは汝が斯る母を、吾に與へ玉ひしによる、吾が眞理を重んずるに至りしは、母の教示による罪と不逞との爲に早く余が死せざりしは、母が余の爲に信實の涙を流し、之を謝し之を償ひ玉ひしによると。

(四)、ジョン、エスレーの母、スザンナ、エスレーは基督教徒の母にして近代高く理想せらるゝ人なり、其家を脩むるの法、其夫に仕ふるの道、其人を教導するの術皆以て人の鑑となすに足りしが、就中く、子を育するの道に至つては、萬古の模範と云ふべし、特に多くありし子の中ジョンを取分け重んじ此子は必ず神の御役に立つべきものなりと信じ、在ん限りに愛育したり、后に、ジョン、エスレーなる偉人物を生じ、遂に教派中の尤熱心なるメソデスト派を造るに至りしは皆母スザンナの感化による、ジョンは母を葬むるの時、尤も有名なる說教をなしぬ、然れども、その母を葬送する時の說教の如きはあらずと云へり、ウエスレー一生母に一生百回の演說は何れを優れり、劣れりとすべからず、皆神の言葉に近し、然れ感謝するの衷情深く、此中に横溢したり、又母を埋めたる墓地の碑塔の刻句に云

く、

玆に一個のクリステアン冠に代て十字架を懷き、大空にその住家を要めて、更に起たん日を最も確かに固く信じ、望み靜に其肉を置き玉ふ。

一個の「クリステアン」と云へる此の「クリステアン」と云へる一語は何如に能く此の母の一生を許したるかを見よ。

(五)、ナポレチン、ボナパートは、其勇猛なる性質を母に付て遺傳し、常に之を紀念感謝したり、嘗て云く、母は優しきうちに嚴格にして賞罰共に極めて嚴かなりき、善惡ともに、母の監視を逃るゝことなかりき、母は比類なき掛念をもて、吾を監督し、唯一の卑き感情にても只一の大氣ならざる情愛をも、必らず制止し、玉ひたり、而して、吾が少年の智性の上に宏大雄高なる事々を深く根ざゝしめんが爲には、何如なる苦勞をも取り玉へり、母は僞を惡み玉へり、吾もし、之に背かば激怒して、之を制し玉ひき、母は吾が過失の一をたに、寬過し玉はざりき、と、ナポレチン晩年孤島に流され、つら／＼過去を追懷して坐ろに感慨に堪へず、お止みなく書狀もて慰め玉ふ母を思ひ想ふて云く、アゝ吾が母は吾爲とあらば黑き麵包を食ひ玉ふとも、一語の不平を述べ玉はざる也、高大なる感想尙は母の胸中に滿ち充ちたり、その高尙偉大なる大望は嘗て、私慾の爲によりて屈服せしとなしと。

(六)、米國の大統領は、平民より出でゝ、之に登りたるもの多し、一介の貧書生卒然高きに登るに至りたるは其素養多く母の手にあり、ジヨン、クインシー、アダムスは、大統領となるの原因を其母に歸し、アブラハム、リンコルンは一生、其母の感化を忘れず、ゼームス、ガーフヒールドは、大統領となるの日、其母の恩を感謝したり。而して、此等多くの大統領の母は、蓋し、初代大統領ジヨージ、ワシントンが賢母に倣ふ所ろあるにあらざる乎、ワシントンが母メレーの賢なると、及び其、何如に重大なる感化を此の偉人の上に與へたるかは、今更に詳說するとを須ひず。

(七)、此等の偉人は、皆な其母の感化によりて成れり、その母に感化せられたりとの語ば既に確かに此を證するのみならず、彼等が母は實に寡婦にして良人なき孤接獨居の内に、その雙手を以て遂にかゝる偉人を養成したるものなり、モニカも久しく寡居したり、レチーアも四十五年間寡居したり、メレーも、ジヨジが十一歳のとき以來寡居したり、夫れ寡婦の子に如此き偉人多くあるを見て、子の發達に母の感化の如何に重大なるかを確認するとを得ん。

(八)、左れば、神聖の改革者、祈禱の軍將、セナクラシーの政治家たる、クロムエルは、エリサベス夫人によりて生れ、宗教改革者、高大なる偉丈夫、ルーテルはマルガレット夫人によりて生れ、道念雄高、理想純潔の大詩人シエクスピアは、マリー、アルデン夫人によりて生れ、道德の大教師鬱勃痛絕の慷慨家カーライルは、マルガレット、アイトケン夫人によりて生れ、女流文學者の泰斗、愛國正義の女丈夫マダム、デ・スタルはネツケル夫人によりて生れ、其他、カント、エルリントン、ゼナザ、エリチツト、の類皆な、有名の母あり。

三段　賢母の德

(一)、賢母の德は、略ぼ前段に擧盡したり、余はこゝに、古今著名なる人が、母に付きて何如に賞揚するかを示し、更に賢母の美德を發揮せしめんとす。

(二)、カーライルは曰く、

余が母は、總ての母の中の尤も善き母なりし、余は母に對して限りなきの謝恩を負へり、神の惠に因り余が母は今も尙、余が願、余が心として遺されたり、若し神許し玉はゞ、願はくは余が多くの困苦の間に於て、母が恭敬なる英氣によりて、余を慰め玉へ。

(三)、カントは曰く、

余が母は愛深く情切にして、恭敬正直なる母にてありし、而して、其恭敬なる敎と有德なる摸範とによりて神を寅るゝとを余等に敎へ玉へり。

(四)、ワシントン、イルビンは曰く、

母と子とを結付くる結は、最と純精潔白なれば、腐敗したる社會その感情を枯らすにあらずば、嘗て破るゝとあらず、其成立は、神聖に飾なく、且美はしく、凡そ吾等が正直眞理の德に付きて想像し得る限りの淸德は、之に備はる。左れば、此の結びは榮光ある結びにして、吾等は搖籃中にあるとき、よく其價を感じ、母を塵灰に碎き去る墓の端邊に至りて、その消失するを歎く、吾等が誘惑に會ふとき吾等が苦痛に沒するとき、母は吾等の側に居ます、吾等罪を犯すときは、怒よりも寧ろ悲しみをもて吾等を非難す、母は吾等をその胸より離さず、

吾等が子たることを、嘗て、忘すれ玉はず、

(五)、母の偉徳を稱するの言葉此他霰の如く多し、一々擧盡すを能はず、左れど、悉く之を擧るとも倚ほその德を言ひ盡すを能はじ。

四段　一生の最大感化

(一)、此故に、人一生の最大感化は、その母より來る、そは、母が愛の尤も温かなるによる、又母がその子に接すること、尤も近きによる、又母が、その子に接する尤も早く、尤も感化し易きのときに於けるによる。

(二)、故に人を知らんと欲せば、其行を見、其友を見るに先だち、先づ其母を見るを可とす、又國民の氣風を知らんと欲せば、其國の母を見るを可とす、母は、國家人心の出車場なり、故に神聖の教育は母より初らずんばある可らず、母先づ改らずば、教育決して改まるとなし。

(三)、誰か荊棘より葡萄を取り、蒺藜より無花果を採るとをせん、然らば、何んぞ輕薄なる浮れ女より豪傑を生じ、淫猥なる戯れ女より義人を生ぜんや、然れば、母先づ純潔剛貞にして、その子を感化せずば、邦家の人心遂に改まることあらず、マーテン、ルーテル曰く、老たる犬を從順にするは難し、老ひたる惡る者を敬虔にするを難し、然れども彼の若き草木は更に容易に矯むるとを得る也と。ミルトン歌て曰く、彼の朝たの一日をトする如く、幼稚は即はち、後代の大人を現はすと。ロード、ブルーハム、は、精密なる觀察の後に曰く、小兒が生れてより、一年半乃至二年中に至るまでの間に、世上の万物を知り、己が力並に他の物躰の性を知り、更に己の心及び、他人の心を知ること其殘る一生に於て學び知るよりも多しと。スマイルス、之に續ひて曰く、ブルーハムが所謂る此初代なる者に於て小兒が學び得る所の知識の、尤も價ひあるや、後年ケムブリツヂ、又はヲックスフホルドの大學校に於て、最上級を占得たるの智識よりも尊とし、故に若し、假りに初代に於ての彼智識を失ひたりとするば、後代に於ての此智識を得たりとするも、譬へば生命を、一週間維持延長する丈けの價證なも有せずと。

(四)、故に、詩人トマス、サトエーの曰く、

母は、其天職として、人の靈魂を開くの鍵を所持す、人の品質の貨幣に印を烙するは母なり、母の温和なる注意なかりせば、蠻人となるべきの人を代て、一個のクリスチアンとなし、之を人物に造るは母なり、母は全世界の女王なりと、

フレーベルが、幼稚園を、開らくの主旨、亦た此に淵源す曰く、

人間の能力の正當なる方向は、必ず其幼時のしのゝめに於て教練せざる可らず、故に、人をして、尤も順序正しく、尤も調和宜しく發達せしめんと欲せば、教を怠りたるとによりて、又は教を過度にしたるとによりて、又は教を誤まりたるとによりて、未發達の方向を誤まらしめざりし以前より、先づ早く正當に教練せざる可らず、と、

(五)、ロツキー山上に、二の小さき泉あり、距離遠からず、高低亦、略ぼ同じ、一を轉じて他に入らしむるを易々なり、然れども、一は東に流れて、ミシヽツピー河となり、一は西に流れて、コロムビヤ河口を過ぎて、太平洋に入る、此に至れば、一万餘尺の山を隔て、五千餘里の道を離る、人も亦如此し、その少時に於ける方向の同異により長ずるに隨て、善惡の大懸隔を生ず、至大なる感化は幼時にあり、幼時の影響は、一生に流れて絕ゆることなし。

五段　國風一變の源

(一)、チヤムバレン曰く、日本人創造のものあることなし、唯一あり、和歌是れなり、而して和歌の殊性を論じて曰く、和歌は單純なるものなり、宮殿の華美を凝めたるものなりと、思ふに此の和歌は眞に能く、日本人の、特性を代表す。

(二)、和歌は、淺々しきを好とす、單純淡泊にして、スラ〳〵とするを好とす鬱勃慷慨にして理に深く、義に激するを嫌ふ優々たる貴族的にして、勸勉力行の風なく、偉大高壯の氣象なし、而して、日本人の氣風は、宛がら之に類似す。

(三)、外國人の、輕薄なるものは、日本人を評して、温柔なり、禮節あり、雅致あり、物事に執着せず、謙遜にして、驕慢ならずと云へり、斯る評は、西洋人が、喜んで唱ふる所ろにして、而して正に日本人の病に適中するものなり、かゝる趣好は、蓋し肉食の後ち、茶飯を喜ふに同じ、故に嚴しく日本を觀察し、其の病所を直言したる人は、大率ね曰く、輕薄にして眞理を重んせず、淫猥にして、謹嚴ならずと、之れ實に謝受先考す可きの評なり。

(四)、此の輕々しくして眞理を冷嘲するの人民、此の不熱心不執着なる好人物、此の淫奔卑野にして、永遠高大雄壯義烈の事を景慕せざる國風は如何にして改む可

き、日本の温暖中和なる風土、日本の優美清洒なる富士山、日本の淡雅輕快なる櫻花は、日本人の氣風を嚴肅眞面目にするに堪へず、日本の衣は輕く、肉は淡く、家は薄く、日本人を沈重濃厚にするに堪へず、たゞ在る所ろの最大なる感化は賢母のみ、母にして、若し剛く、且清からば、其子は、忠愼義熱の子となるべし、母にして義理を重んじ、神を寅れ、人を愛するの道念に强からば、其子は熱心熱愛の人となる可し、今に於て日本の人心を改良し、日本の國風を一變するの最大有効なる法方は唯だ、母を賢くし、善くし、清くし、强くするにあり。

第七章

フレーベル氏及幼稚園

一段　幼稚園の種

(一)、エフ、ダブリウ、パーカー氏曰く、第十九世紀に於ける、尤も切要、尤も遠大なる教育上の改革は、フレーベル氏が、發起したる、新教育なりし。ヘンリー、バーナルド氏又た、カンネクチカット州の知事に報告して曰く、全世界に嘗て、目擊したる、幼兒開發の教制中、尤とも創見なる、尤とも注意を惹くに足る、尤とも哲學的なるは、即はち幼稚園なりと。フレーベル氏自己も亦た、之を至大の發明なりとせり、其の幼稚園の事を思付たる年一千八百三十六年は、尋常の年にあらず、人類に、一新紀元を開きたる年なりとて、當時起草したる論文に題し、The year 1836 requires a renovation of Life と云ひぬ。實に幼稚園の發明は、教育學史中絶大の發明なり、故に人類歷史中亦至大の發明なり。

(二)、幼稚園の發起者は、フリードリッヒ、ウイルヘルム、アウグスト、フレーベルと云ふ。一千七百八十三年シウリンジアン森林中の一小村チーベルワイツスパッヘに生れ、一千八百五十二年七十回誕辰祝月の翌る月マリエンサルの片ほとりシエエイナにて死せり。左れど、フレーベル氏の前、毫も幼稚園の種、地中に存せざりしには非す。

(三)、獨逸人コメニアスは、フレーベルに先つこと一百八十年にして Schola materni gremi, or school of the mother's breast 母の胸の學校、即はち、家庭教育と云へる一書を著はし、中に幼稚園教育に似たる事項を論述したり。フレーベルは哲學者のラウセ氏によりて、此書の讀む可きことを教示せられ、通讀玩味して大に得たる所ありと云へり。又フレーベルに先つ一百年にして、オベルリンはボスゲスにて小兒の爲め學校を開き、サラ、バンジエット及ルイセ、シエップレルの二女史を用ひて之が教授と爲し、米國にても十九世紀の初、すでにゼームス、ブチヤナン並にエムエル、ウイルダースピンの兩氏同樣の說を述たり。左れど、コメニアスの小兒學校は專ら母を教へんが爲に設け、其他の人の說は小兒の學校として設けんとせしが、フレーベルは之をキンデルガーテンと號け、小供の園と云へり、人類の若き苗を養ふべき園と云ふの義にして、自ら學校とするとは異りぬ。

(四)、故に、フレーベル氏が幼稚園は即はち、フレーベル氏が創思發起せしものたるは勿論なれど、氏に先ちて氏に注意を與へたる論文少しとせず、且つや、ルッソウ、ペスタロッヂの如き新教育說の主唱者は人類の教育と云へるとに對するフレーベル氏の意見を大ひに誘導したり。就中氏は、ペスタロッヂがイベルダンの學校に趣き伴ひ來れる三人の書生を入れて、自らは助教し、且つ學びたり。フレーベルは要するにペスタロッヂが門弟なり。

二段　フレーベル氏

(一)、悲しむべし、フレーベル氏は、幼にして母を失ひ、極めて冷かなる家庭の中に人となりぬ、彼は温かき母を有するとペスタロッヂの如くならず、寧ろ不幸の兒コメニアスに似たりける。されど、彼の悲しむべき不幸は人生の幸福となりぬ。彼は幼時の冷遇を追懷して、人の子の爲に慨歎し、常ならず温愛を幼兒の爲に養ひける、其父は「チーベルワイツスパッハ」及其邊りの地の牧師なりき、其家庭の事に心を注ぐよりは寧ろ寺領内の事の爲に思を凝めたり、母逝きてより、繼母來る、繼母の欠德を改めて擧ぐるを要せず。母の兄弟之を見て耐難きとに思ひ、不憫に遇して、嘗て己が家に引取り養育しける。

(二)、小學校にありては、非凡の人の幼時に屢ば見るが如く、彼は亦た遲鈍にして餘り快活勤勉ならざりき、されど何事をもせず怠れりと云ふには非ず、何事をか大に沈思するものゝ如く、尋常の日課に厭足らずして頗る不滿の躰なりき。居年

の著書「人類の教育」（p一六二）中に云く、

人は幼なきときは、特に取分け幼なきときは、自然界に親接すべし、自然界の現象の外形としては、些細なる事柄に對してには非ず、自然界の内に生き、自然界の上に支配する神の生氣に對して親接すべし、實に幼な子は、尤とも深く之を感ずるものにて亦尤深く之を需むるもの也と。

氏の幼なきときは、實に此を求めたる也、されど小學校の切々の理學は、彼に天地の圓滿せる奥妙調和を一體にして說き示すと能はず、僅かに縱橫の中に錦の片々を混じて、之を與ふとは云へど、一體連續せる完全の天の衣を與ふるとをなせざりき、彼は實に饑渴くが如く之を慕ひたり。

(三)、斯くして、彼は小學校內に不滿の月日を送りぬ、教師及鄉黨は云く、彼は學者となると能はず、其の異母弟の方こそ望みあれと。彼は棄られたり、獨り、シゥリンジアンの森の中に逍遙し、日々亭々たる喬木を望み、綠々たる青草を蹈み、禽鳥の聲に耳を澄まし、淺川の水に心を洗ひ、梢吹く風の音を音樂かとあやしみ、ましらの聲を友の語るかと感じける。彼は此間だに一種異樣の感覺を生じぬ、彼が眼には天地は藹然たる妙なる一大調和の活世界とは見へぬ、森も草も、小鳥も流も皆な上帝の生ける思想をいと明らかに發顯すとは見へぬ。彼が十七才に至る迄彼が主なる教育は此森の中にて施されたりき。日耳曼に著名なる躰操家、ファーザー、ジャン一日奇童に邂逅したり、此の奇童は旹はざる石、もろき蜘蛛の巢を取りて驚ろくべき絕美の天理を發輝せしめたりと言ひき。而して此の奇童とは即はち、フレーベルの事にてありき。

(四)、十七才、長兄に伴なふて、ジエナの大學に入り、諸々の科學の調和を學ばんとて、刻苦せしが、學資中途に斷え借財意外に嵩み三十シルリングの爲に九週間入牢せられて遂に校を去りぬ。彼は之より、農夫となり、土地測量者となり、計算家となり、秘書記となり、轉々流浪して世の波にもまれもまれける。

(五)、外なる彼が情態は、千變万化せり、左れど內なる彼が思想は日夜に伸張し、殆んど一徹の方向を以て漸次に生育したり。彼は世の中に立身せんより Getting on 其知德を自脩完備 (self-completion) せんとせり、彼は其自敘傳に曰く、

余は此の變遷の間に余が心の中に余が自身の世界を荷ひ行けり、余が深く掛念し、切に養成せんとを欲せし所ろのものは即はち此の內なる自己の世界にてありき。

信仰に富み感情に熱き此の有爲の青年は心中常に平らかならず、何事か大事業の目前に存するとを直覺して、之ぞ即はち自己が天職なりと確信する所のものを未發見せず鬱勃たる熱情は地中の烈火の如く何處にか一條の途を得て迸出せんとすれど、外界に之を導くの途未だ開けず、煩悶として然れども拮据して前途に進み進めり、一千八百〇五年（二十三才の時）友人某の懷友帖（アルバム）に記して曰く、

天は君に遠からず室爐と愛すべき妻とを與へん。余には尙ほ休なく遍歷流浪するとを許せ、世界に對する吾が眞の關係は何如に吾自己の內なる人に對する吾の關係は何如に此等の問を考へ得べき時を余に與へよ、人に麪包を與ふるは君が任なり、人に彼自身を與へんとは余が務むる所ろなり。

(六)、彼は、未だ其天職を得ず、神は何事にか大ひに用ひ玉はんと信じ、轉々種々の業にうつりぬ。后ち、ペスタロッヂの主義を實行する或師範校長彼れを見て、彼は教育者なりと觀識し、當時その執れる建築の業を抛つて、その師範校中に教授たれよと勸告せり。アヽ此の大教育者は、かくして初めて教育界に入りぬ、此時の感は彼が自敘傳に記せし如し、云く、

三四十の童兒の前に立ちし其とき、余は初めて本領を得たりと感じたり、余が久しく慕ひ望みたる生涯を今初めて發見したりと感じぬ、余は直ちに兄弟に書を送りて報知しぬ、余は魚の水中に泳ぐが如し、非常に幸福なりと記したり、

(七)、二年間此校にて教授し、著明なる良結果を得たるに、彼は決して之に滿足するとなく、自ら省みて、自己の準備の足らざるとを切感し、遂に教授の任を辭し、僅かに一家族の三人の子を預かりて、之に教へたるが、之にても尙安んずると能はず、遂に此の三人を携へて、イベルダンのペスタロッヂが學校に入門したり。千八百〇七年より千八百〇九年迄即はち彼が二十五才より二十七才に至る迄は、所云るペスタロッヂ主義の泉源に來りて之れを酌み、自ら之を飮み味ひたり、ペスタロッヂは、直覺直感を以て動き、フレーベルは稍や系統ある思考の順序に隨ひて動く、さればペスタロッヂが教ゆるよりも更に多くを推考し推窮し、此の二年間に得たる所ろの利益淺少ならざりしに、彼は尙ほ以て爲に滿足すると能はず、思へらく、人も自然も同じく上帝より出でたり、同源より發出せるの流は、豈に

同様の法則を以て支配すべからざらんや、自然法を研窮し、其天則を研窮すると更に精しからば人の教育法に於て、益する所ろ更に多からん、と。彼は此の観念を以て、ペスタロッヂを見、此の自然界の尊崇者も、彼が眼には尚ほ満足せざる所ろあり、自然界の神聖を敬ふを尚ほ欠けたりと評し、自己は更に一層自然の法則を研究せんとて、過る十一年間中途にして廢したる大學教科を再び追究せんとに決し、一千八百十一年その二十九才の時、ゴッチンゲンの大學に入り、后ち轉じてベルリンに行きぬ。

(八)、此の大學教科は、彼が多年の思想を一層に强くし、更に一進歩を與へたり、其自叙傳當時の事の記載に云く、

多年余が冀ひ望みたる、講義今や余が心と靈との必要に應ぜんとて出で來れり、之を聽きて惟れば、宇宙万物の内部に於て、互ひに結合調和し、其妙なる契合を發達して、能く表に顯示するの理を會てよりは一層熱心に感じたり、而して宇宙万物に此の調和の存することと並に此調和の中より永遠無窮に漸次開展しつゝある異様の万物の態状は自から同一源より發するを等を瞭解するは人類に於て爲し得べきの事たりと思ひぬ。斯て、人の生涯も、事業も、思慮も、感情も位置も、皆な一個人として存する其の調和せる獨一の所ろより發し來るものなりと云ふを明かに解し、切に感悟したる時、瀾然として悟れるものなり、余は亦た復たび教育上の問題に口を挿むことを得べしと自信し來りぬ」と(自叙傳、八十九頁)

(九)、されど、靜かに大學の窓の内に文讀み書すこと能はざる珍事出來したり、時に一千八百十二年九月、ナポレオン、ボナパート普士亞モスコーに一敗してより此方、さしも天下を席卷したる大帝が、勢威少しく色たちて見えけるにぞ、四方不平の民心機を察して迸發したり。此に於てか多年佛蘭西人の足下に屈したる、プロシア人は、ウイルヘルム大帝此の方養成したる英氣軍志を快復し、國民皆戰はんとを欲せり。此時、プロシア王の有名なる to my people の徵集あり、恨を呑みて垢を食ひたる、プロシア人何れか奮激して之に應ぜざらん。フレーベルは純然たるプロシア人にてはあらざりしが、其情と靈とは全く日耳曼人なり、即はち此の徵集に應じ、一千八百十三年(三十一才)リウッゾウの軍に馳せ加わりぬ。

(十)、然れども、彼は軍中尙ほ教育上の思想を放擲するをあらず、其自叙傳に記すらく、

戰ひ勞れて、暫し息む折々、向來教育者として招かれ居る余が天職の事に付きて思慮せずと云ふことなし、否な啻に休へる時のみならず、凡そ戰闘なわなる時に際すとも、其間、尙之を忘れたるとなし、故に戰爭々闘の間にも、多少教育上の、經驗を得たりと、

彼が從軍は少からぬ益を彼に與へたり、彼は之によりて身躰を訓練することを知りぬ、身躰を訓練せずんば、心の思ひを實行するを能はざるを知りぬ、もしカントが軍に從ひしことの經驗が其晩生の哲學論に莫大の影響ありしことを思はゞ彼が從軍も亦た其教育論の上に大なる關係あることを悟るべし。特に彼は此際、眞友二個を得たり、即はち彼より年若き十年の Langthal 及び Middendroff なり、彼等二人は戰場に於て離れがたく、フレーベルに結合し其后一生彼に伴つて彼が教育上の助力者となりぬ。

(十一)、千八百十四年五月、平和條約の結ばるゝと共に、軍を去り、プロフェッサー、ワイス氏に從ひて、破石博物館の、保管となりぬ、當時其感想を記して曰く、

吾手にもてる石、吾眼の下の石も言ふべき形を採れり、結晶石の世界を見れば、人の生涯とその法則とを悟るを難からず、啻に之を悟り得るのみならず、一層確實なる、一層感ずべき言語を以て人生の眞の生涯と云ふものを說き示す也。地理學、及結晶學は、余の爲に知識の高き深き境界を示し、余が研究に、思考に、勤勉の爲に、一層高き場所あるとを指し教ゆ。自然と人とは其樣々なる發達上の段楷によりて互ひに其本性を解き明すの助を爲すが如し。余が見る所によれば、人は自然界の種々の物質を知識するによりて自己と、その生命とに關する知識を得るの基礎及案內を得並に、此の得たる知識を發顯せしむるに於て、大なる準備を爲すとを得るが如しと。

彼は、大學に於ける研究と其后の實試及默想とによりていよ〳〵切に天地間の美妙調和一致と云ふことを認め、人の教育に尤とも大切なるは、學術が他の自然界の諸生物の發達法に付きて研究し得たらんが如き方法に隨ひ、以て人の圓滿なる發達を爲さしむるにありと信じたり。

(十二)、彼は、寧ろ科學的に傾むきたり、此に於てか初めは博物學の教師とならんとせしが、見解いよ〳〵擴まりて、志望亦高まり、遂に彼の二人の眞友二個の隨

伴者をして學ばしめ、その助力を以て、彼自身が理想せる所云る「新教育」を實試せんことに決心したり、時に千八百十六年、その三十四歳の頃なり。兄なる人前年死して、其子遺れるにより、其家ある所、グライシャイムに行きて、男女の遺子三人外に他の兄弟より賴み追わされたる姪二人を合し都合三人の子弟を以て所云る、「新教育」學校を開きたり。暫らくして此小さき校をカイルハウに移す、カイルハウは即はち、教育上の新信仰のメッカさなりぬ。彼の二人の者、主に其親戚たるバロップ、及びフレーベルの四人固く團結し、非常の熱心を以て教育したり、安んぞ結果なからん、次第〳〵に隆盛に趣きしが、金錢もさより彼等になし、彼等時さして饑んさせしことさ幾干なるを知らざりき、或時は子弟共に森林に入り木の實を拾ひ、之を粉にして僅にパンの料さなしたるとあり、加之、人民愚にして新教育を疑ひ、何かの騷動ある折々怨を之に歸して一揆迫害せしこさもありき。然れども、日月の運るさ共に、新教育の光漸やく輝やき、諸方より注目せらるゝに至れり、斯て十年、一千八百二十六年、フレーベル四十四才に至りて彼の有名なる The Education of Man.「人類の教育」は出版せられぬ。

(十三)、其后カイルハウをバロップに托し、フ井ツルランドに移り、嚢にペスタロッチが住居したるバルゴドルフに居し、政府の委頼を受けて、小學校教師の訓練、孤兒の養成等に從事したり。然るに此校に入るに先ちて既に性情の發育を害し、最早傷きたるものを携ひ來るが故に之を圓滿にするを旣に晩きを知り、此に於てか更らに、初代より完全なる教育を施し與へざる可らずさ悟り、いよ〳〵幼稚園教育さ云ふものに心をかたむくるに至りぬ。則はち再び、カイルハウに歸り、ブランチンバーグの程近き村にて初めて幼稚園を開く、名にキンデルガーデンさ云へるは即はち子供の園の義なり、時に、千八百三十七年、その五十五才の時なり。

(十四)、以后三年數度び幼稚園の論を公告し、世人の之を聞くと漸やく熱心さなりしが、彼の最始の幼稚園は、資金の欠乏によりて、遂に失敗したり、彼は不得已之を廢止したり。其后は專ら、教師養成に心を傾むけ、后代の爲に尤も益ある生ける種子は播付たり。彼の女教師養成に心を傾むけたるも此頃なり、彼の男爵夫人フォン、マーレンフホルツ、ビウローがその子弟さなれるも此時なり。

(十五)、然るに新思想は常に舊き皮袋を破らざるを能はず、ミッデンドルフさ云ふ議員は、日耳曼の巴利門に於て幼稚園を彈劾したり、又、フレーベルが猶子が出版したる書籍中に社會主義を教ゆる所ろあり、之れフレーベルが意見なりさ誤解せられ、新しきフレーベル黨は、舊きとの敵なりさの誤評喧々囂々に起り、遂に文部大臣、ラウメルは千八百五十一年に令を發し、プロシア國內にてフリードリッヒ、フレーベル及其猶子カール、フレーベルの主義を學校內に教授す可からずさ禁制したり。有名なる、ダイステルエグを會長にしたる教育會議は、此の亂暴なる文部大臣の布告に反對するの議決を宣告したるに拘はらず、文部大臣は聾耳を聾て、之を聞くことなし。フレーベル死せし后ち十年間依然さして此の布告生存し、其骨既に枯れて、非幼稚園の官令尙は墓標の上に立ちぬ。フレーベルは、此の布告を生きて久しく聞くとなし、其翌年、一千八百五十二年五月、その七十古稀の誕辰を四方より祝奉せられたるの翌月、溘焉さして眠りぬ。

以上、クイック氏教育者改革家列傳による所多し。

三段　幼稚園元理

(一)、ペスタロッチは「自ら考ふる」さ云ふとを第一さし、其教育は此の考を起さしむるとを旨さなしぬ。フレーベルは「自ら働らく」さ云ふとを第一さし、その教育は、この働を爲さしむるとを旨さなしぬ。故に、惣べての教育は皆な自活動の趣を爲さしむべきを主張すさ云へども、中に就き、發達の最始たる幼兒の教育には殊に此の趣なかる可らずさ云へり、「フレーベル」は此の主旨によりて、新教育の精神を先づ尤も多く幼稚園の中に吹込たり。

(二)、幼兒は、躰をも心をも常に止む時なく活動せしめんとを欲するなり。故に、手の達す可き限り、之を試み、心の屆く可き限り、之を考ふるとをその性さす、何ものにても、自ら用ひ、自ら試みずば安んせず」。又幼兒は、同伴共交の性を存す、友さ交はりて、その情を慰めずば安んぜざる也。而して、その心の中に、道德上の諸々の性質正に發達しつゝあるが故に、好く整理制裁したる情交同遊の中に、この性質を正當に發達せしむるとを勉めざる可らず。

(三)、此等の主旨により、尤さも適當したる教育法を求むるに、幼兒に遊戯せしむるに如くとなし。幼兒の事業は遊戯なり、特に「チイヅナルス」が歌へる如く、眞似れるさ、及び「后來世に出でゝ、人さ共同するとの模型たる」同輩さ共に興にするてふ意味の遊戯は實に幼兒の事業なり。モンテン曰く、其の遊戯は、實に眞に

尤も厳肅なる、職業なりと。フレーベルは、これに同す。然ども、遊戯に善惡あると、事業に善惡あるに異らす、若し能く之を制裁支配せすんば反て惡しきに走らんとす。こゝに於てか、幼稚園の管理を生す。

(四)、左れば、恩物(ギフト)と稱する樣々の形の品物を之に給し、之を以て自ら遊戯せしむ。その遊戯は即はち自ら想考する所に從て職業を爲すなり。恩物には最初球を與ふ、球は調和の躰なればなり。之に種々の色を集む、以て視力を發達せしめんとす也。

(五)、遊戯に音樂を交へ、いよ〳〵樂しましむ、之に談話して自ら智性を開發せしむ。左れど、その談話は談話たる可し、講義の如くなる可らす。凡そ、智識は直覺的を最上とし、研究脩學の躰に入らざるを善しとす。故に幼兒に談話するとき自らにして悟り、自らにして樂ましむべし、決して苦學研究せしむるとある可らす、とは云ふ。

(六)、「フレーベル」が新教育の精神を約すれば、大率れ左の如し。幼稚園に對する事の原理も亦その中にあり。

一、凡そ學問は其の人の能力を開發する度の多少によりて價を增減す、而してこの能力の開發は自活動にあらずんばあらす。

二、凡て記憶の力を使用するときは、更に高尙なる他の心力を使用するが爲の伴隨たらざる可らす。

三、如何なる學科を教ゆる時も、その學科は、學生現在の必要に適應すべし、未來の時期の爲めに預じめ教ゆるとある可らす。

四、天然、近世文學、近代言語等を學ぶに、用ゆる時間は、總て過去に關するものを學ぶに用ゆる時間よりも多かる可し。

五、教育とは心を教育すると共に併て身躰を教育せざる可らす。

六、その手、その目を使用せしむべき教育は、富める人の子も、貧しき人の子も同樣にてある可し。

七、女子の高等教育は、男子に於けると同樣の注意掛念を受べし。

八、教師も亦た醫者の如し、必らすその職業上の脩錬を得ざる可らす。

九、總ての學科上の法則は皆な學術上の基礎より發す可し。即はち夫々關係の事物の相當の法則の上に基ひせざる可らす。

右主としてロバート、ヘベルト、クイック氏の說要による。

(七)、グレアード氏嘗て「フレーベル」氏の教育法を研究し其要領を極めて巧みに概括したりき。其言に云く。

○幼兒に緊要なる三の天性あり。

一は觀察上の趣好

幼兒の官覺は、總て鋭敏なり、其手其目に觸るゝものは、何者にても能く之をして樂しましめ之をして注念せしむ。

二は結搆を好み、活動を要す、

幼兒は、只だ物品を示さるゝのみにて滿足せず、必らず之に觸れ、之を執り、之を其自己の所有と爲さずんば滿足せず、而して之を以て其思ふまゝに結搆組織せんとを試む、彼は自らなる幾何學者なり、自らなる器械師なり。

三は獨自一己(パーソナリテー)の感覺、

幼兒は自己の持物、自己の仕事、自己の教師を所有せんとを欲す。

○幼兒に以上三の緊要なる天性あり。而して「フレーベル」氏の新教育法は、恰も好く此の需要に適應せり。蓋し、その教育法の大概を言はゞ、共同の大なる机を置く中にも自から一人づゝに各自の倚子を定め、其の持場を定め以て其小さき領地内の所有者は彼なるとを自認せしむ。斯て、面白き遊戯によりて、最初より其心を引立て、且つ恩物を漸次に之に示して順々に其能力を開發す。初は、色づけたる球又は幾何學的の固形躰を其目前に示して之を□せしむ、即はち其視力を養はしむ、外形、形容、似寄り、相違などを視別するの力を養はしむ、次に、此等の品物を其手にて取扱はしめ、眼に快ちよき色合に排列せしめ、又は思ふまゝの樣々の形に組立しむ。次に、彩色したる物を種々の方向、形躰に列置し編置し、創思發明の心地を養ふ物種々樣々に工夫せしむ。最后には、其手斯く忙はしく、其心斯く活動、其注意力貞に能く躍動激舞せるに乘じ、物躰の性質用法に付きて問題を設け之に答へしめ、又之より引て一汎の法則自然の調和の事などに思ひ至らしめ、又此質地の問題を利用して更に高き道德上の觀察に登らしむるとをなす。此の如きは即はち「フレーベル」氏の教育法の要領也」と。

(八)、斯て、「フレーベル」は、此恩物の順序を下の如くに定めたり。其第一の女弟子ピサロー云く、妄りに師が定めたる順序を變ゆるは、即はち其教育法の骨髓を

失ふに同じさ。左れど、必ずしも、「フレーベル」が定めたる儘の物品を用ひ千古變はらず万國一轍に走らんさするは寧ろ「フレーベル」が本意にあらざる可し。各國その風俗さその開化の度さを異にするに隨て、小兒開發の途に多少の相違なかる可らず、特に何如なる小兒にも皆な此さ同品の恩物を用ひんさするは出來がたきヿとなるべし。故に、能く國風を察し、その國々の子供の心理を學び、亦「所云る言はざる石をして言はしめたる」如く、日常の物品を利用して恩物さなすは即はち「フレーベル」が新教育の精神を活かすものさ云ふべき歟。左れど、この變通を爲すには先づ其常道を知らざる可らず、而して之を知るさ共に能く變通を爲すに足るの創思力なかる可らず、これ尋常凡士の能はざる所也。

(九)、定例の恩物順序は左の如し、

球

球、立方躰、圓柱躰

八角の小立方躰

八角の瓦形躰

三十一に小分すべき大立方躰

以下略す

此順序は圖を示すヿを要するに付「エミリー、シルレッフ」の幼稚園論を添へ、其卷末を示す、

四段　女弟子

(一)、ミス、ピーボデー其「幼稚園に對する講義」の中に云く、余は信ず尋常の婦人は、皆天然の良き幼稚園保姆たり、若したゝ其宗教上道德上の感想を發達し且つ少くさも只一の科學部門即ち例せば植物學の如き何處にても學ぶヿを得べき一科學を學びて以て自然法則の多少を承知せば既に好く保姆たるヿを得べし。故に信ず、凡ぞ婦人にして幼稚園の保姆たる教育を受るに堪へざるさきは、亦決して一個の母たるヿをも得可からず」さ。蓋し婦人は生れ乍らの幼稚園保姆なり。

(二)、左れば、「フレーベル」は幼稚園に教育するに當り、深く此點に注意し切に婦人の同情を要め、之を勵まして保姆たらしめたり、斯くして其女弟子さなれるもの頗る多し。玆に其長老、マレンホルツ、ピウロウ男爵夫人の事を記し例證さすべし。

(三)、ピウロウ夫人躰弱く、或るさき片田舍に吟行し、さある茶店に息ひて何事か變りしヿなきかさ尋ねたるに、店の婦人答ふらく、眞に珍らしき事の候、此邊りに子供を相手にして遊ぶ馬鹿者あり、宛ら之に魅せられたる様にて戲むれ居侍るさ申す。其時夫人は取分け氣にも止めでありしが、其后或時路傍の樹蔭に白髪の老人あり周圍子供を集めて余念なく遊ぶ狀を見、これぞ例の馬鹿者ならめさ思起し、近よりて其語る所をきくに、暫らくにして乍ち感じ、直ちに其班に入りて老翁の談話を聞きぬ。この老翁は即はち、「フレーベル」なり。夫人は此時より其女弟子さなる。以后一生其尤さも熱心なる祖述者たり。プロシア政府が幼稚園教授の禁を解きたる后ち、自らこの教授の任に當りたり。

(四)、ピウロウ夫人に次ぎて名あるは、「フレーベル」が姪さして、フラウ、シウロイデルさ云へる女史なり。不幸にしてピウロウ夫人さ合はず、其意見も相違せしが、亦熱心なる「老翁」の弟子なり。

五段　物評

(一)、カムペーヤの「フレーベル」を評するや、少しく酷に失するものあり。左れど其言を聞くに曰く、フレーベルの著書を公平に且つ十分に修讀するに熱心に過ぎて稍や道理を失ひたる所ろ、尙且つ或る時は故ら熱心を造りたるにあらずやさ思はるゝ節あるを見て、之に感服し、過ちによりて反て奬勵せらるゝよりも、寧ろ心中やゝ不快の感なくんばあらず、實に「フレーベル」は教師さしての洪大なる資格を有せしに相違なし、然れども深長なる學識及び、好く平均したる思想に至つては、欠きたる所ろあり、…………其想像は万物を見て過大にし變形にす、其の實狀ありのまゝを認むるを能はず必らず之に模形的の意味を添え、漠然空大の想考に彷徨せるを多し…………左れど、其實行は其著書に優れり、幼年教育の野に於て大膽なる改革者たりし榮譽を之に歸するを沒すべきに非ずさ之れ寧ろ酷評なり、左れど其著書を讀むものは、多少この感なきヿ能はず、或る時は餘りに言過ぐるが如く思はれ厭倦の念を生ず、左れどこは彼が想像幻想の多き所以にして、年少森林の中に吟行し、言はざる石さ語り、動かざる木さ遊びたる感覺の發表に外ならず。ダイステルエグ(Diestirweg)「フレーベル」を評し彼は「ホラ」吹きなりさ云へり、左れど一さ度び其教場に參觀せるさきフレーベルが來觀者ありさも氣付かず一心不亂に其幼兒に教へつゝありし熱心風采狀貌言動を直

觀し、乍ち其僻見を翻て、「フレーベル」が尤も熱實なる門弟の一人となりたり。フレーベルは當時に在ても既に人より誤解せられたり、然ども其の誤解は、之を深く考ふると共に消失するの誤解なり。

(二)、「フレーベル」其徒弟を率ひて「イベルダン」に行き、ペスタロッヂ、に從ふ彼は「ペスタロッヂ」の門弟なり、彼自ら記して曰く、この時は余が一生に於ける定運の時期(decisive epoch)なりしと。「フレーベル」が開發的の教育は、根元を「ペスタロッヂ」に發するものなり。左れど、二氏の風采行狀は自ら異る者なり、フレーベル氏は剛にして自ら信じ殆ど屈せざりき、故に其の處置に不完全なる所ありとも之を自己の失とせず、反て運を非とし、若くは他人を責たり。ペスタロッヂは殆んど自己を忘るゝものゝ如く、其衣服狀貌に至ては夢にも念頭に掛けざりしものと見へたり、氏の事を記載せる多くの傳記者は大抵云く、彼は何如に衣るべきかを知らず、其の考慮に沈むときは、襟飾を忘れまた靴下の紐を結ぶを忘れたり、と。之に反し、フレーベルは華美に裝ほひ、時としては役者の樣姿をなすかと思はるゝほどにて頗ぶる外貌に注意したり。

(三)、其教育は宗教的なり、而して其宗教は汎神的なりき。云く、凡そ、宗教の上に基ひせざる教育は皆な結果なしAll education that is not founded on religion is sterile 而して基督教の宗教の上に基ひせざる教育は皆な欠點あり不完全なりAll education that is not founded on the christian religion is defective and incomplete(フレーベル確育集中)、と。又云く、万物の目的運命は其の內本性(ビーイング)を開發するにあり即はちその中に働らく神の力と其の何にして働らくかの働らき樣かを外面に發達するにありと。氏はこの前提信仰より立論推究して、人の教育は即はち人の中に存する神の性を現するにありと爲し、云く、人類の使命(ボケーション)は、その中に働く神の働きを表白するにあり、その神を外に現はするにあり、その眞實なる運命の智識を得るにあり、これを得るに、自由と自然とを以つてするにありと。即はち之れ一種の汎神論なり。夫れ汎神論は、未た純然たる基督の神の說にあらず、神の洪大なる偉德を贊美すと云ふと云へども、一個人の爲に神子を下す深愛の意義よりして見來れば、フレーベルが宗教論は未た高しと云ふ可らず、然れども彼をして其教育論を吐かしめ、又其教育を樂ましめたるものは實にその汎神論的なる此宗教上の觀念にありとす。然るに、「フレーベル」より此の汎神的なる觀念をすら尚ほ除却し去り、其の精神を脫離せしめ而して其の形骸を尊重せんとす。方今の日本教育家にして、フレーベルを愛すと云ふものは、實はフレーベルの死骨を拜する者なり。

(四)、「フレベル」か幼稚教育に對する注意と熱心とは深く尊とむべし、教育者切に之を贊へざる可らず。左れど其の教育方法に至ては、尚ほ多少の欠點あらざるなき乎。所云る、球、立方、圓、柱等を用ひて、之を敎ゆると云ふヿ極めて簡易にして而も、自然に適へるが如けれど、再考して其必らずしも然らざるを悟る。球、立方、圓柱は其狀甚だ簡易なりと云へども、自然實際にこの狀躰のまゝにて存するものを見るは稀なり。或は球の如く、亦立方の如く、圓柱の如く、時としては、三者相混成するヿを多しとす。然るに、之に其形躰を示して其實際を示さずたとへば、品物をありのまゝに現はさずして之を幾何學的に分割したる元形を現はす之を簡易なりと云ふ可らず。スペンサーの教育論に、格智は一見して簡易なるものゝ如くして、實は甚だ複雜なるものなりと。故に、此の如き元形を示して最初に幼稚者の能力を開發せんとするは、宛がら抽象的の複雜なるものを初めに示すに異らず。左れば、フレーベル氏が恩物は未だ心理發達の正常順序に適はず、寧ろ實際の實物を使用して之より、立方、球、圓柱等の形躰を悟らしむるを可とす。但だそれ、如此く實際の品物を活用するに至ては頗る才識を要するヿを思はざる可らず。尋常人の容易に爲しがたき所なり。

(五)、幼稚園及「フレーベル」の事に付き可讀書左の如し。

1. Education of Man.
2. Autobiography.
3. Reminicences of Froebel, by Baroness Marenholy-Bulow.
4. Child and child Nature, by the Baroness.
5. Kinder grater and child-culture, Henry Barnard.
6. 其他、左の諸氏夫々の著書あり、皆な、フレベルの精神主義を發揮演述す。

Miss Shirreff; Miss Manning;
Miss Sysohinsbe; Miss Hearwart;
Mdwe. De.Portugall; Miss Peabody;
H. C. Bowen; F. W. Parker; W. N. Hailman;

Joseph Payne; W. T. Harris.
7. Education and Reformers. Quick.
8. Compae's History of Pedagogy.
9. Payne's History of education.

第八章
ジーン、ジャック、ルッツウ及びヲーチウア

一段　時勢一偉人を生む

(一)、ルイ十四世の世は安樂太平の世なりけり、ボルテーアの世は不滿不平の世なりけり、貴族僧侶の專制壓抑極度に達し、王家の暴威私慾最上に達したり。乾一變して坤となり、機一とたび轉じて天下の大勢將に移らんとす、此の時に當て牡鳩の一聲を發ちて先づ絶叫するもの熱情熱腸の論者にてありける。

(二)、教育の事に至りても亦然り。凡そ教育史を講ずるものは、復古時代(Renaissance)より初む。復古時代とは、中世宗教的の過激なる教育より脫出し古のやー自由なる教育法に立反りたる時代を言ふなり。盖し中世宗教的の教育論は肉を苦しめ情を矯め殆ど靈魂上の事のみを慮ばかりて、實際卑近の實用に頓着せざりしなり。左れば、十六世記の頃よりして次第に其反動を生じ古文古典を味ひ學ぶと共に教育の事を宗教的の事にのみ限らず多く實際の事に注目するに至りぬ。復古時代あるは止を得ざることにして、この時代が教育全體の進步の上に益を與へたること小少ならず。左れど復古の僻亦た度に過ぎて其弊なきと能はず。只徒らに古典を學びて實際に自ら研究實試することなきに至れり一の弊なり、文學を味ふとのみを事一とし之を實用するを思はざるに至れり、二の弊なり、隨て教育とは古典古文を學ぶとと誤解し學科上過度に之を脩むるに至れり三の弊なり、最后に子供の教育を放擲し子供は何の役にも立ぬものなりと信ずるに至れり四の弊なり。弊極まり最早や一轉して其正しきに反らざる可らず、こゝに於てか絶叫して之を啓導するものあり。

(三)、ジーン、ジャック、ルッソウは一般の世情に於て如此き不平不滿の世に生れ出で、教育上に於ては積弊鬱重したる如此き時世に立ちたり。此に於てか彼は怒ての事を熱罵熱嘲したり、社會上の組織を根底より改造せんとしたり、宗教上の信仰を土台より搖動せんとしたり、これ等の點に於て彼を學ばんに極めて有益なる研究たるべし。左れど余は今ま彼を教育學上の一點に於て觀祭せんとす。

(四)、千丈の飛べる瀑布も亦た其源なきに非ず、教育上の積弊を打破擊碎したる痛快なると彼が如きは稀なりと云へども、彼に至るに亦た多小の沿流なきに非ず。夫れ復古時代以后の弊害漸やく鬱積するにつれ、先づ、コメニアスComenius出でたり、次に、ロックLock出でたり、二先覺共に古典主義の教育に反對して、人の天性に隨へる實際當然の教育を主張したりしなり。故に、ルッソウも其エミールを著はすに至りて、說を此等の兩先覺に得たると頗ぶる多し。然れども、潑剌として千万の玉を散じ万丈の水落下して斷岸絶壁に百里の偉觀を呈出したるは即はち、彼ルッソウ也。ルッソウに至りて積弊を白露し破碎したり。

(五)、ロバート、ヒバート、クイック氏、其「教育界改革者評傳」中に云へらく。教育史中に出會ふべき偉人を分ちて二種となす、一は思考の人なり、二は實行の人なり、二者たるに何れを優れり何れを劣れりとすべきにあらず、歷史は余輩に告て曰く、第一等の實際的學校教師は、ジョン、スタルム(John Sturm)(一五〇七—一五八九)(ストラッバーグ、中學校教師)又は多くの「ゼスイト」派の教師なりと、實に彼等は最良の師なりしが其說に至ては、毫も新しきものなく、たゞ通常一般の學說を精く知り細かに實用したるに過ぎざりし也。然るに之に反し、モンテンの如き、ロックの如き、當世流行せる一般の學說を斥ぞけ一新學派を開かんとしたる大思想家なりと云へども、之が爲に同時に實際の教育家にてはあらざりき。ヲルフガン、ラトケ(Wolfgang Raticlius)一五七一—一六三五、ホルスタインに生れ后ち英國に移る)が其學說を實行すると能はず、コメニアス、がVestibulum, Janna等に論出したる自說を實行せんとて失敗したる如き皆是なり。而して、この「思想」が流行して遂に「實行者」に會するに至る迄には久しき間だ流れ行き平々凡々の境界に迄で到來ざる可らず。思ふに、大思想の進步は猶ほ大河の流の如きか。其泉源に近きほど奇觀美觀ありと云へ共、此處には大抵實用に適せざるものなり、先づ其發出したる山々の間を離れ、千丈の瀑布となるにはあ

らで、滑らかに平流して尋常住家の間々の低原に流入せざる可らず、こゝに至りて初めて人世日常の實用に適使せらるゝを得るなりと。ルッソウが奇想天外より落下し、久しく平板滑流したる后ちにあらざれば、未だ俄かに、ペスタロッヂ、フレーベルとなることを能わざりし也。されど、ペスタロッヂ、フレーベル、の一流皆な、ルッソウより淵源す、啻に之のみならず、スペンサー一派の「ネーチウア」を唱道するもの皆なこゝに由來せざるはなし。

(六)、佛國の革命史を繙とくに當りて絶大痛快の兩偉人に接す、ボルテーア、ジン、ジヤツタ、ルッサウと是なり。更に「モルレー」がルッサウ傳を繙とくに至ては、この第二の偉人が性格經歷の尋常ならざるに喫驚せずんばあらず。彼は年少に當りて多くの罪過を犯しぬ、左れど或時には亦た殆んど、聖に近く、隱密なる私行に於て或時は大勇士となり、又或時は尤も憶病なる人となりぬ、あらゆる山を試み又あらゆる商賣を營みたり。工夫ともなりぬ、奴僕ともなりぬ、嚴格者となりぬ、先生ともなりぬ、或時は巍々たる大廈高樓に住ひぬ、又或時は第一層の小室に入り麵包一片も實に價高き哉と歎じたりける。要するに彼が精神は斯る變化の間に修練されたり、彼が感情は斯る轉變の間に激烈となりぬ。而して后ち、民約論及び、エミールのジヤン、ジヤツク、ルッソウとはなりぬ、彼は幼なき時より既に非常過感の子なりき、終夜泣て床を濕ほせしこともありき、其懺悔の記に云く、余は之と云へる定まりたる觀念を有たざりき、然れども既にあらゆる感情を經驗したり、余は何事をも確認(コーシーブ)せざりき、左れど万事を感(ビール)したりと。少ふして、プルタークの集傳を讀み、共和政と民主政とを夢寐想し、公平を過度に慕ひ、欺僞を最上に恐怖したり、熱情、世の不公平を憤ふり、更に貴族僧侶が人民の上に於ける壓制に烈怒したり、嘗てパリよりリチンに至るの途中、人民塗炭に苦むの慘情を蓄けるが如き狀態を歷々實觀し胸中の不平不滿絶頂に達し號泣絶叫して心裏既に后年の著書の大半を感じたりき。彼が性格經歷大率れ、此の類なり。

二段 エミール

(一)、ルッソウが世に著名となりたるは、嘗て一の懸賞論文を草したるときにありき、其文の主意下の如し、云く、凡そ文明なるものは人世の大毒なり、總ての工藝、總ての制度皆な悉く有害なり、故に總て之等を全却し、「ネイチウア」の太古に反らずば、人世遂に幸福あることなし、この「ネイチウア」を Noble Nature と云ふ、人類蠢々たる發明を爲して之に誇る、左れど先づ此の發明を悉く棄べし、斯て初めて幸ひとならん、人は昔て幸福なるものにてありき、左れど今は悶れむべきものとなりぬ、故に從來其施行したる万事を廢すべし、斯て初めて復た歸元せんと。ルッソウは此の意見を直ちに教育の事に應用し、現今の教育制度を悉く全廢し、子弟を「ネイチウア」に托して、自然のまゝに發育せしめんとはなす、この意見を以て理想架空的に快筆を一走せしめたるもの即はち「エミール」なり。

(二)、エミールの世に出しときは、西歷一千七百六十二年にてありき、(ルッソウ一七一二に生れ、一七七八に死す、此時五十一才)此時パアメリアントは布告して、ゼスイト派僧侶を佛國より追放したり。エミールは當時の僧侶を斥けんとて強て執筆されたるものにあらず、寧ろ將來の人類の爲めに希望を述たるものなり、全局に貫ぬける一道の活火熱血は紙面に溢れ迸ばしる、其體は半ば小說の如く、又の半ばは論文の如し、教育學上に於ける人の思想の最大紀念碑なり。カムペーア曰く、エミールは純然たる解辨の論にあらず、又單に實際の教育術を說きたるにもあらず、蓋し一の教育系統を概說し心理上及道德修練上に一論文を呈し人間の性質を尤も深切に分解したるものなりと。

(三)、エミール全篇の大主旨は何ぞ、其開卷破頭に左の嚴格なる告白あり云く。

万物は其造物主の手より出でたるとき善好なり、人の中に入るに及びて万物墜落したり、

一派の厭世家は云ひぬ、小供は生れ乍ら惡性を遺傳し天然墮落して誕生すと。エミールは此の僻見を打破せんことを欲したり、幸にして之を打破したり、然れども更に其極論に走り、凡そ人の性は生れ乍ら一の惡質を混せず純善純清なりと言へり、これ亦第二の誤謬に陷ひりたるものなり、エミールは又云く、社會は奸惡なり、腐敗せり、人世の罪惡は皆な社會あるより來る、人の墜落するも亦之よりなり、故に純清純善なる人の子の性質を斯る腐敗の感化より保護せざる可らずと、左れどこれも亦誤なき能はず、社會は蓋し腐敗しつらん、然れども、如此く腐敗せしむる所の元因は何處にありや、社會其自身漠然として腐敗せる乎、社會とは人の集合なり、果して一個人もし無罪清眞ならば社會何をもて腐敗すべき、故に單に社會に罪を歸して一個人を無罪なりとするは更に第二の誤謬に陷りたるものなり。エ

ミールは自然を純清純眞なるものとなしぬ、故に人の子の十二才に至る迄は全く之を放任して譬へは野蠻人が森林鬱樹の間に逍遙したるが如くならしむべしと云へり。又云く、凡そ人生は何れの年代、何れの階段を問はず、皆な其の相應せる完熟を有し、その年代當然の格を存す、世人屢ば言ふ、一個人成長せりと、左れど、エ、マンが成人するに非ず、エ、チャイルド、が成長するなりと。この見解尤も可なり。彼の教育を常に準備の如くにし、何れの時代に於ても只だ將來の爲にのみ用意して絕へて直接の實用を思はざるは頗ふる不可なり。又云く、今の人は幼兒を知らず、誤りたる觀念を以て幼兒を見る、其觀念の長ずるに隨て誤過イヨイヨ多し、今の學者、たゞ成人を見て幼兒を見ず、幼兒の中に成人の姿を察せんとして、直ちに幼兒そのものゝ性質を思察せずと。この言亦尤も可なり。エミール、大体の主旨は此如きものなり、この主旨を發揮せんが爲に、エミールと云へる一個想像の小兒を造り出し、これが父母を言はず、たゞ社會より遠隔せる片田舍に於て或る一教師が之を保護監督するの狀態にて新教育法の精神を表白せり。エミールを讀むものは理論を以て讀む可らず、寧ろ想像を以て讀む可し。ルッソウ、現に自ら序して云く、

凡そ此書を讀ん人は、教育學上の一論書を讀めりと信ずるよりも寧ろ一想像家の一幻想を讀みつゝありと信ずるなる可しと、

余は、左に、エミール、の大体を指摘す可し、教育學上のこの驚ろく可き著書は、何人も必らず其一斑を承知せざる可らず。

(四)、エミールは、全通徹貫せる一道の活火熱血なり、之を分々別々として見る可きにあらず、左れど、エミールが年代の進步に隨て之を分ち、亦自ら劃すべき階段なきにあらず。初の二卷は、エミールが十二才に至る迄の幼年時代を寫し、專ら身体及感覺の發達を記す、第三卷は十二才より十五才に至る智育の年代の爲に記す、第四卷は十五才より二十才に至る德育の年代を記す、最后の第五卷は二十才后の爲に記し兼て女子教育の事を論す。

(五)、最初の二卷には之ど云ふ定りたる教育法を記さず、如此きは皆な第三卷、十二才以后より初まるものとなしぬ。十二才に至る迄には、何如に走る可きか、何如に飛ぶべきか、何如に隔離せるなどの事を知り居るを要し、其他の万事には全く無智識なるを相應なりとせり。即はち、十二才に至る迄は何事にも學問することなし、其右の手と左の手との相違をも學びて知ることなし、要するに、十二才に至る迄は、たゞ其の身体力及感覺を發達するのみなり、此の二卷の中に多くの誤見僻論あるは免れずと雖も、其中亦尤も尊む可き秀論少なからず、左に其注意す可き條說を拔摘列擧す可し。

(六)、自然をして取締たらしめよ。子イチウア(自然)は子供が運動の自由を有することを望み、その四肢の活動を何物も決して妨ぐまじきことを要む。然るに、吾等平常何如になす。衣服を狹くして、その內に子供を囚牢す。子供は此の過緊なる衣服によりて片環となる。人は其后多くの壓制を受けざる可らざるものなり。而して其壓制の第一は、緊り過ぎたる衣服の上の壓制なりと。この爲めに、ルッソウは例の罵嘲を與へて曰く、世人は蓋し子供が快活に見ゆるを好ましからずとなすならん、人は奴隷の狀態に生れ、生き、且つ死するものか、其生るゝや、スワッドリング、クロウス(まき布)に包まれ、其死するや棺の內に釘打たる、而して人の形を取りて其世に存らふる間は、亦社會の制度によりて捕獲せらるゝと。

蓋し、現時の取扱方は、子供の活動を妨ぐる所多し、此は固より改めざる可らず、左れど、ルッソウが言へる如く、亦其極端に走り、全く自然に放任して、子供の隨意に任ずべきにあらず、人長じて、社會を爲す時も、その制度を嚴酷にす可らざると共に亦全く之を放任すべきにあらず、多少の取締はなかる可らず、此如く子供の取締に於ても勢ほひ多少の取締を以て亂暴に流れ易き活動を幾分か制裁せざる可らず。今の取扱は寧ろ酷に過ぐ、ルッソウは即はち之に懲ふるものなり。左れど、之に懲ふるによりて、亦た一端の極に走る可らず。

(七)、母をして親から其子を育養せしめよ。前述せる如き極端に走らんとすると同時に、ルッソウは亦驚ろく可き名言を吐けり、殆んど矛盾せるに似て、實はこれ「ルッソウ」が本色なり、何んとなれば、彼は鮮風に雛論するものに非ず、たゞ直感直覺するまゝを述るものなればなり。彼は云く子供は保姆に托す可らず、その母直ちに之を乳養せざる可らずと。即はち曰く、母なき所には子供なく、又母なき所には家族なしと (Where there is no mother, there is no child; where there is no mother, there is no family.) 斯て曰く、左れば人々をして其初めの義務に立反らしめよ、先づ母をして其子を養はし

めよ、何加に絶大なる變化を世表に呈す可きか、汝は之を見て喫驚す可しと。母が直接に其子を乳養するの利益數々あり。左れど、ルッソウが尤とも主張する所のものは、之れ啻に子供の爲の健全なるのみならず、實に之れ家族の紲なり道徳なりホームの尊實なりと云ふにあり。而してこの最始の義務を盡すを行れなば、其后の多くの事務何如に容易すく行るべきかと歎じぬ。この一段は、容赦なく受入る可き名說なり。

(八)、自然によりて身躰を健全強固にする事、

ルッソウは、自然によりて身躰を發育し健康にせしめんとす、故に、エミールは初より何如に耐ゆべきか、何如に苦む可きかを覺り、直接に自然の影響を樂りて其感化を在のまゝに受けたり。エミールは彼「ダーチセチス」の如く跣足にして履を穿たず、ロックは其徒弟に薄き靴を穿たしめしが、ルッソウは、即はち之をすら與へず、云く自然には靴なし、人は跣足なり、靴は后代に至て人の發明せしものなりと。この故に、エミールは亦暗黑裏を光明なしに獨行せり、何んとなれば蠟燭も亦后代の發明にして自然に存せざるものなればなり、云く、エミールは蠟燭屋の店に於て光明を得んよりも、其指の先にて光明を得んと。蓋し指を以て觸れて道を見出すことを云ふなり。又、エミールは種痘せず、種痘も亦た人の后代の發明なれば也。藥を服用せず、醫師を招かず、たゞ死に瀕するに至て醫師の力を賴む。又通常世に行はるゝが如き赤子を酒の中にて洗ふことを不可とせり、何んとなれば酒は泡醸せしものにて自然になきものなればなり。又、人の手にて造りたる「おもちや」は不可なり、之れ自然に存せざるものなればなり。樹の枝、又は罌粟の頭にて十分なりと、

自然に隨はんとするの極度如此き極端に走る、如此き教育はこれ人を野蠻人の昔に反らしむるなり、多くの發明品は人の造るものなりと云へども、亦人が「自然」の教養を受たる結果に過ぎず即はち亦第二の「自然」なり。此の第二の「自然」を賴まずして、一々太古初元の「自然」の如きものに立歸らしめんとするは、文明を一々根こぎにし、喬木を悉く一歲枯れの灌木となすに異ならず、人世の進歩遂に望む可らざるなり。左れど、其言の過激極端なるに關はらず、多くの眞理を含む、通俗の教育に子供を屋外に出さず直接に自然に觸れしめず、但だ器械的の世界にのみ寓居せしめんとするの大弊を破るが爲には、亦この痛快の議論を要するなり。

(九)、教へざるの教育即ち、ネガチーブ、エヂユケイシヨン十二才に至る教育は、教授するにあらずして放任するなり、即はち「ネガチーブ」の教育なり、エミールを監督する教師は何事をも教ゆることなく、只だ「エミール」が自ら學ぶの世話を爲すのみ、之をして自ら發明せしむるの準備を爲すのみなり。故に云く、汝が子弟に口づから教科を教ゆるなかれ、たゞ經驗によれる外何ものをも承知せしむるなかれ、教育に尤も大切、尤も有要なる規則は時を益せんとするにあらず、時を損せんとするなり、Is not to gain time, but to lose it. 又云く子弟が自ら味解し得べき區域の内に問題を置き、彼をして自ら解釋せしめよ、之に教へたるが故に知らしむることなかれ、たゞ自から悟りたるが故に知らしめよと。又云く、一日に百回倒れしむるとも可なり、多きほど更に可なり、何となれば、彼は之によりて彌よ自ら扶持するの法を悟るが故也、之を自由にすれば、更に大なる傷を蒙るべき恐を償ふべしと。

この說は「スペンサー」が切りに唱和する所にして、多くの眞理を存す、全く放任すべからずと云へども、放任せしと同樣の自由を成べく多く之に得せしめて以て万事を自ら學び、自ら悟らしむるやふに取扱はざる可らず。故にこの一段の說に至ては多く服膺すべき眞理を存するなり、

(十)、子供は幸福を享受すべし。

子供を尊重すべし、子供は子供たる一個人なり。其幸福を得せしむべし、其需むる所を受けしむべしと。これ「ルッソウ」が尤とも強く主張する所ろたり。云く、子供を愛せよ、その遊戯を勵ませ、其快樂、其の幸福を覓むるの天性を勵ませ、諸君何んぞ彼の唇に笑あり魂常に平和なりける彼の幼時の事を追懷して坐ろに之を羨慕せざる、左ればこの短かき時限、そは直ちに過ぎ去るべき此の短き時限の快樂と、敢て妄用するの恐れなき此の尊き幸とを受るの樂と何故にこの罪なき幼き兒に與へざる乎、一と度び去て亦歸らざる、かく迅速に過ぎ行くべき初年代を、何故苦痛と悲哀とにて滿たしめんとする乎、多くの人の子の父よ、諸君は其子の上に待てる死の近きことを知り玉はざる乎、自然が之に與へたる幸福を其愛子より奪ふことを恐まざる乎、左れば彼の幼兒をして世に生存するの快樂を感ぜしむることを得るの時代とならば則ち直ちにこの快樂を感ぜしむるやふにすべし、何如なる時、神之を招きて眠らしむるとも、其以前すでに生存の康樂快味を感ぜしむべし、

未だ此惑なくして早く死せしむるとある可らずと。

(十一、) 智育の無効

十二才に至る迄では、智育を與ふるは無用なり、之に歴史を教ゆるも無効なり、外國語を教ゆるも自國語と區別して明白に之を記憶することなかるべし、文學を教ゆるも味あはざるべし、一册の書と云へども之に與ふ可らず、ラ、フホンテンの小供談と云へども之に與ふ可らず、とは云ふ。云く、十二才に至る迄は、書物とは何如なるものなりや、をも知らずして可なりと。后に、實物教育(ナブゼクト、レッソン)と云ひ、又は直覺教育(インチウイチーブ、メソード)と云ふものは、旣に、「エミール」の中にあり、眞理の種旣にこゝに萠す、たゞ之を述ることの極めて度に過たるの恐ひあるのみ。

(十二、) 以上第一、第二卷に記したる、エミールは第三卷に入りて十二才以后十五才に至る、この間は即ち智育上の開發の時代なり、過十二年間自然のまゝに殘育したる暴寶見は、以后三年間の智育によりて磨かるべきなり、三年の間甚だ短し、故に尤も用愼して尤巧みに教へざる可らず、而して、エミールも亦た此の教育を受るに堪ゆるものとなれりとぞ。斯てこの三年間の教育法として記載したるものゝ中に就き、其尤も注意すべきものを左に摘示すべし、

(十三、) 教科を撰定すべし、

この短き年代間に教ゆべき學科は尤も愼密に撰取せざる可らずとて、エミールの爲に撰みたるものは即はち皆な實用的なり、云く、この時に適し且つこの用に應ず可き學科を撰まざる可らず、通常學科と稱するものに或ものは僞なり或ものは無用なり更に或るものは只だ虛榮の爲なり如此き學科は賢き人の注意採用すべきものにあらず。たゞ人世の實益となるべきものを撰むべし、即はち斯るものゝみを子弟に教ゆ可し。何ものをも知らんとするを旨とせず、尤も益ある者を學ぶとを主意とすべし、(It is not a question of knowing what is, but only what is useful)

これ、スペンサーが如何なる智識か尤も價あると論じたるものゝ主旨と同じ。全く實利的の論旨なり。蓋し無用なるものは學ぶべきに非ず、左れば何如なるものが實用なる、これ問題のかゝる所なり。たゞ日常平易のとの爲にのみ着目し、衣食生存するの爲にのみ實用を旨とせば、人生最高の目的に對して人は最早死せるに均し、故に有益と云ふとを旨とするは可なり、たゞ有益とは何如なるとぞやと反問せざる可らず。左れど、ルッソウの實益とは實利論者の言ふ所に同じ、如此實利主義の教育は、人の眞の教育の只一部分をのみ言ふなり。未だ全部を知る者に非ず。然れども、學科は固より撰まざる可らず、何ものをも悉とく教ゆべきに非ず、スペンサーが所以は、益に立つと云ふの隙にて、すべてを學ぶ可らず、尤も多く益に立つものは何ぞと云ひて學ばざる可らず。然るに實際教育上度々この誤に陷ひるものあり、一種の教育者は何ものをも其の子弟に教へんとはするなり。アッベ、ザウ、セント、ピーレの如き即はちこの類なり、彼は學校にて万事を教へんとす、七八才の頃ろ少しく醫術を教へ、其后、數學、畵紋術、法學、獨逸語、伊太利語、蹈舞、朗讀、政治學、倫理學、天文學、解剖學、化學、其他二十余の學科を悉とく教へんとしたり、如此きは固より失策なり。學科は固より撰まざる可らず、たゝ實用の主旨を狹くし、人を利益卑近の爲のみの動物と爲す可らざるなり。

(十四、) エミールの學科

エミールに敎へたる學科は第一に諸の理學なり而して理學の中に於ては天文學を第一とし次に地理學を置けり、地理學を教ゆるには地圖を用ひず實際に旅行せしむるの方を用ひぬ。云く、汝は何故に球、圖、地圖の如きものを用ひんとする乎、これ何如なる器械ぞ、何の故にかゝる代用物を用ゆる乎、須からく第一に之に實物を示すべしと。而して只だ智識の多きことを貪ぼり其の實用と俯瞰とに着意せざるの愚を非りて曰く、彼の智識に戀慕し其網に眩せられ何處に止まるべきやを知らずして一より他へと走り行く人を見れば、余は宛がら海濱にありて貝を拾ひ前途にある美しきを見て手元にあるを放擲し、たゞ前にくと眩して進み遂に何れを撰むべきやに惑ひ何をも得ず空手にして家に歸る幼兒の如しとは思ふ也と。此故に、エミールの學科には無用の多くの科を用ひずと云へり、即はち文典及び古典を廢し又歷史をも廢せり。蓋し歷史を教ゆるは人を社會に復するものにて、人を不完全なる社會に入るとを教ゆるは、好ましからずと思惟せるが故なり。如此き撰定法は矯激にして確かに其正當を失へり左れど其中ち亦た多少の眞理なきにあらず、之を參考とせば一助なきにあらず。

(十五、) 教科書を用ひざる事

自然によりて教育せんとす、故に教科書を用ふるを甚はだ不可なりとせり、之を

不可とするや、殆ど極端に走る、ルッソウは寧ろ書物を忌み憎むに至れり、かくてエミールの教育は第十二歳に至る迄は、書物と云へる物は、果して何如なる物なりやと云ふをすら知らしむ可らずと云へり。嘗て曰く、余は書籍を惡む、書籍は已が知らざるとを話す術を教ゆるもののみと、さればエミールの教科には、一書を用いず、只一つ讀みて可なるは、ロビンソン、クルーソウのみ之れ蓋し其全体の旨向相均しく社會を離れて獨自一己の棲居を主張する者なるが故なり。

書物は意見を表す者なり、其文字は意見の思想を一々書き表すもの也。左れば幼き者は其形に僻して、其思想に入るを難し、故になる可く書を用ひざるを可とす、直接に天然物に觸れしむるか、又は直接教師の思想にふれしむ可し、其間に文字書物を挾む可らざるなり、日本從來の誤過頗る此の點に多し、床の間に山水を寫せし小さき幅を見て、出て偉なる山水を直感せしむるが如く、文字に偏よりて思想を後にするの通弊あり、此の如き通弊に對してルエミールに於けるルッソウの過激なる論辯も尚ほ聞いて用ゆ可しと云はん、左れど教科書に全く書物を廢す可きにあらず、殊に子弟長じ、その文字の裏に思想を透觀するを得可き樣の格に達したらんには書によりて教ゆるは極めて簡便、且つ極めて迅速の法たる可し、只人の性とかく物に僻して、無形の想を後にするの通弊あるが故、之を教ゆる者は常に此通弊に失せざるの覺悟を存す可きなり。

(十六)、教授法

曰く、幼兒をして其理解すると能はざる論辯を聞かしむるとなかれ。教師の講述には一の叙事躰、一の雄辯、一の形容詞を要せず、只其幼兒に相當したる目的を示す已にて足れり、教ゆる人の感想が直ちに教へらるゝ子の感念となる可きなり、然れども、感觸す可き有形物より、一躍して無形の智識上の目的物にとばしむるを勿れ、順次漸々に時至りて其進歩を段々たらしめよ、要するに實物の代りに標形を用ゆ可らず之を用ゆるは只其實物を得ると能はざるの時にのみ限る可しと、又曰く余は説明又は談話と云ふ事を好まず、大切なるは實物なり、實物なるかなく〵、今の教育者が余り多く重きを其言語の上になくの誤を指辨するも尚足らざるを覺ゆ、「多言の教育は只多言の子を生ずるのみ、(Bubbling education make only bubbles.)と。此教授法の説も又過激の弊を存するの失あり、左れど又多くの眞理を存す。ソクラテース、歐陽明の流、知は即ち知なり、行ひ難きは知に非ずと云ふ、又之れ極端の説と雖も、同じく同一の眞理を示す、凡そ知るは經驗の結果なり、未だ經驗せざるとは、之を知る頗る難し。而して已に經驗せしとより一歩を推して究知するは極めて易く、又元より行ひ易きなり。斯るを眞の「知る」とは云ふと。此説一理なきに非ず、要するに人に教ゆるには其從來已に確知せる行即はち其從來已に多く經驗せしとを取り、之を利用して以て新智識を得せしむるの法を知らざる可からず。ルッソーの言元より過激なりとは雖も、よく此大切なる眞理を示すものなり。

(十七)、動元刺激の時期、

人の動作を刺激するに或る年代、或る發達に從ひて、尤も感じ易き感覺相違す、之を動元(モテーヴ)の相違と云ふ、此相違をよく認知し、之に從て刺擊を施すの覺悟を造ると極めて緊要なりとて、エミールには年代に從て明らかに其動元の區別あるとを示せり。曰く、十二歳に至る迄には專ら必要によりて刺擊せらる、即ち外物の刺擊により必要に迫まれて動くと多し、故に十二歳迄の取扱方は必しも人間と云はず、一種の天然物とし之に加はりたる天然力の中出來可きはなし、出來がたきはなさゞるの躰にて其必要の儘動作せしむ可し。十二歳に達すれば既に幾分の判斷力あり、故に此判斷力に訴へ、其動元によりて動作せしむる樣に取扱ふべし、而して此判斷力は利益を主とする功利主義の判斷ならん、さて十五歳に達すれば、已に情に訴て其動元により動作せしむるとを得、即ち必要の故にあらず、利益の故にあらず、更に高尚、善良、大氣ある心根によりて動作するに至らしむるとを得と。

年代によりて動元の增加伸張を計るはよし、左れど生る人間は斯の如く分割し其年齡によりて、かく迄明白に動元を限るは誤なり、必要利益、感情、道念等の動元は何れの年代に於ても、同じく刺擊せざる可らず、或年代に於て只其一にのみ訴ふ可からざる也。然れども年と共に此動元に多少あるは云ふ迄もなし。

(十八)、商法自活の道

エミールは十五歳に至り歴史を知らず、人情を知らず、文藝美術をしらず、又神と云へる事に付きて毫も知るとあらず。然れども、商賣手工上の商賣といへるものは知る可し。之れ一朝何事かの變動あらんとき、自ら活くる用をなさんが爲なりと、ルッソウかつて曰く、今や改革世紀の近づきつゝあるなり、此時に當りて人

々何知になる可きや、今日其保證を與ふるもの決してなし。歐洲の大王國の王と云へども最早此の上長く續くとあるまじ、彼等は既に榮華の頂點を越へたり。此然として今盛りなる多くの國家も、もはや降り路にありと。斯る意想ありて人の子の教育を論ず。故に何よりも先づ自活の職業を大切とし、エミールをして之を學ばしめたり、

(十九)、十五才に於るエミール、
第三卷の終り、即ちエミールの十五才に達せしときの言動風采は如何、ルッソウ之を記して曰く、此時、エミールは僅かの智識を有せり、左れど其少かの智識は皆實に彼自身の所有なり、彼は其所有する者を全躰一々知り悉し半分半躰の智識に止る者なし、其知れるものは少なけれど、皆よく知れり。他人の知りて而してエミールの知らざるもの多し、左れどそは他日知るとを得可し、未だ知らざる者と云ふとを歎ぜば世人悉く知るとの外にも尙ほ何人の知らざる者ある可し。知るの貴きはよく知るにあり、エミールは、知れると少なし、然れども普通普用の心(ユニバーサル、マインド)を存す。未だ實に知らずと云へども此心を用ひて其未だ知らざる智識を知るとを得べし、エミールは敏捷開豁にして、万事を知るに堪ゆる心を有す。即ちモンテーンの云へる「未だ教へずと云へども之を覺ゆるに足るの心」を有す。余は滿足すエミールは其なす所の万事に於て、之れ何の善の爲めぞやと云ひ其信する所ろの万事て於て、之れ何の理の爲ぞやと云ふの習慣を得たり。要するに、吾目的は、彼に智識を與へんとに非ず、必要あるとき、如何にして其智識を得べきやの術を教へんとにてありき。又智識なるもの、眞の價値をしり、万物に越へて之を愛す可きとを知らしめんとにてありき此故に余が教育の方法に於ては進歩甚だをそし、然れども一も誤りたる歩みなし、一旦の歩みも繰り返さしむ可き掛念もなし。

ルッソウが想像的教育の方法によりて斯如き結果を得べきや否やは、之れ別問題なり。されど智識を與ふるの目的は即ち斯の如く又其教育の結果にして、かくならんとは當然の理想なりとす。

(二十)、以上第三卷十二才より十五才に至る迄の教育は、所謂判斷力の動元を刺激し、實用の學科を教へたるものなり。第四卷に入りて感情及宗教上の動元を刺擊するの教育初まる、其大意を例の如く摘載すれば左の如し、

(廿一)、此卷に入りて、ルッソウが所謂チリキウアの教育なるもの丶極めて不足せるとを確む、凡そ人の感情を養ふは人なり、人の中の母なり。然るにエミールは母の膝下に居せず、ホームの中に住せず又共に交はる可き友もあらず、何を以てか其感情を養ふとを得ん、殊に宗教上の感想に至りて所謂自然的の教師のみにて足らざるは古來已に定論あるなり、されどルッソウは物質界の自然をのみ用いて此感情及び宗教上の感想を現はさんとし殊に一定の學科を示すが如き方法にて之を養はんとするは頗ぶる不可也。

(廿二)、道德上の德育、
ルッソウは、思へらく、善惡を區別するの道念は同情(Sympathy)及び社交上仁慈(Social benevolence)の感より根すと、故に此感を養ふを以て德育の主眼とせり。曰く、人の心の發情は、自ら其心の想を現はせり。愛憎の感の中には、已に善惡の種を兆す、されば善と云ひ、正と云ふとは智性にして判斷認識したる抽象的の辭にはあらず、實に道理にて研きたる靈魂の實際の感情なりと。されど此感情を養ふのみにて德育全しと云ふ可らず、後回德育を論ずるの章に於て批評す可し。

(廿三)、宗教上の教育、
宗教々育を十六歲乃至十八歲迄延引す可しと云ふは幼兒が其感情的の想像をもて神を拜せしに、却て之を偶像にするの恐れあるべしと案ずればなり。曰く、凡そ一度想像の力をもて神を見とめなば智性をもて之を知るを極めて難しと盖し幼にして神を拜せしむるときは迷に入り、其心正しく進む可からずとなすなり。故に相應の發達をなし、理性の眞理を認むる事を得るの時代に達する迄は之に宗教を語る可らず、之れ宗教のため利益なりとは云ふ。此の說尤も不可なり、人の宗教上の思想の暫時に進步す可き者なり、例へ年長じ相應の理性を延し得たる曉と雖も其宗教上の思想決して純の純たる者となる可らざるなり、所謂大哲學なるもの丶信仰と云ふと雖も、異日更に進步したる日の信仰より之を顧みれば、又之れ一種の迷想を混じたるとなからんか、宗教上の思想に敏む可きは其智識にあらずして、其信仰にあり、而して信仰は人の天性に十六乃至十八の年に至りて初めて生ずる者にはあらざるなり、故に宗教々育は德育と均しく決して十五以後に至りて初めて施す可きものにあらず、尤とも幼なるの時

より之を施す可きなり、只其方法に至りては年代に隨て異らしめざる可らず。ゼルマンの哲學者センテニスの記事─────むしろ其心理上の懺悔の記の如きものに曰く、センテニスの父はエミールの說を用いて彼を敎育したり、彼れ優しき母を幼にして失ふ、父は學識深慮ある君子なりしが即はち彼を伴つて片田舍に隱れ、他人に交通するを遮斷して天然物により彼を敎育開發したり、書物を用いず、直接に言語を學ばしめ、且つ尤も注意して神の事を言ひきかすことなかりき、されはセンテニスは十歲に至るまで神と云ふ此大なる名を讀み、又きくことなかりし也、されど其心は自からにして之を感ぜしか每朝東天に登る日輪を見て全能の恩人の如く思はれしかば、朝な〳〵ひれ伏し、之を拜するの習慣を自ら作りぬ、其父甚だ不審しみ一朝其實を見て其誤を正し、日輪は之れ空間にある一の星にすぎざる由を敎示したり、センテニス之を聽きて失望を究め其禮拜す可き物を奪ひ取られて深痛せり、其歎き非常にして見るに堪へざりしかば其父遂に胸を打たる、止むことを得ず實を告げて天地間に眞の神一の造主あることを敎示したりしとぞ。人が神を知るは其天性なり、習慣若しくは誤れる激論ありて此自然を消さんとすと云ふと雖とも天眞久しく隱るゝを能はず、異樣變形の姿を取りてだに表に現せずと云ふとなし、

(廿四)、女子敎育、

エミールの最後に女子敎育の事に說き及ぼしぬ、之れエミールの同伴者たるソフヒーを出さんが爲也。此故に女は只男の爲めに存する者の如くに解し、其敎育法に至りては自ら欠くる所多し。曰く女子の敎育は男子の敎育に關係連契し、之に比較的に存す可きを忘る可らず、其主旨は男子を喜ばせ男子の爲めに從ひ立ち、男子に稱められ愛せられ子供を敎育し老父を助け男子に助言し慰め男子の爲めに生涯を樂しくし面白くするに足るが如き女子を育するにあり。之れ即ち何の年代に在るに係らず常に女子の義務とす可き所るなりと。「ミチエレツト」曰く眞人は妻を創造すと、ルツソウ又此意見を所有し女子は婚姻後初めて生るゝ物の如くに考へたり。故にソフイーを敎へ導き之を如何なる模型となさんかはエミール自身の理想の中にありとしたり。只其宗敎の事に至りてはエミールは長じて後初めて之を學ぶべしと云へど、ソフイーは極めて幼き時より之を學ぶべし、之れ順從服從の德を得るが爲なりと。而して尤も長ずべきは裁縫なり。ルツソウ曰く、ソフヒーが尤もよく知れる者即ち尤も注意して敎へられたる者は女性たる者の工事即ち彼女は針仕事(Neddlework)の中にていかなる事にてもなし難き事あらずと。之れルツソーがある敎育にないてほこる所なり。

(廿五)、以上は即ちエミール全體の摘要なり。カムペーヤ之を總稱して曰く、エミールの新價値を辨ぜんには其末段に記したる論辨を讀て感ずる不快の思ひを先づ放擲せざる可らず、エミールを評する者は、之を全體の上より大觀す可し、其各部分に小入するを勿れ。要するに此書の大體は嘆美す可し、深長なり、若し之を解剖すれば即ち其味を存す、其眞價値をしらんには、全く通讀するを要す、之を通讀せばルツソウが冒を一寫万年したる感情と直接に其溫き情にふれ知ることを得吾人は其誤謬をゆるし、其迷惑をゆるし却て通讀の折一步〳〵に出合ふ可き洪大なる眞理を取らざる可からず、殊に吾人がルツソウが此書をあらはしたる當時の時勢を辨知せざる可からず、之を著はしたる當時の時の情を參酌せざる可からず、若し三十年後革命の曉自由なる民の爲めに之を著はしたらんには、エミールの調子も又一變じたりしならん。ルツソウにして若し共和黨の社會、若しくは共和黨の社會たらんと欲する社會のためにエミールを著せば、彼は決して實際と云ふ者を嫌惡せず、かく迄に矯激孤獨なる敎育をよしとせざりしなる可し、此評實に公事經営なり、カント之を評して曰く、凡そ虛榮の爲め、又時を費さんが爲めに讀むに非ずして、眞に書を讀まんとするの人にしてエミールを讀まば(ルツソウの書を讀まばとあり。)先づ第一に感動するは彼が驚く可き天才の感動力と高尙なるインスピレーションと感情に充ち〳〵たる靈魂に觸るゝとにて、他の時代、他の國、他の記者に於て決して出逢はざる所ろの者なり。之に付て、直ちに感ずるは彼が發表する志想の非常にして、且つ解し難きとより生ずる驚歎なり…………余はルツソウを一讀し再讀し、其文體の美が余を感動せざるに至り而して後ち初めて余が理性をもて彼を評せざる可らずと、エミールの人を動かすと實に斯の如きなり、左れば其出版後當時を激動せしとの甚しき實に驚く可き者ありき。モルレー曰くエミールは之れ文學の歷史中に存する尤も急激なる者の一なり堆積せる偏見、黯濇たる頑結せる習慣を打破し敎育を暗き機械的の技術の一となしたる通弊を淸拂し去り以て洪明淸氣の洪波を密閉せる育兒園學校室の中に透射せしめたるは、皆エミールの功德なり。

三段テーチュア

(一)登山を出で丶流水に浮ぶ時は快云ふ可からず局促細末なる束縛の天地を離れて廣々漠々なる大宇宙を望むは樂み如何ぞや末節末技に拘々たりし教育論よりして彼の偉大なるテーチュアの論に從ふときは快樂例へがたしルッソー先づ之を主唱しペスタロッチ、フレーベルを經て近世スペンサーに至る迄其テーチュア論(放任教育論)一陸離として光彩を放ち顯暐として天下の大喝采を博するに至りたるは抑々當然なり

(二)左れば暫らく思を澄め靜に沈思して抑々所謂テーチュアとは果して如何なる者ぞと究問すべし頗る漠然たる心地なきにしもあらずイリ、アル、シル女史奇態の言葉を放ちて曰く教育論に於ける普通の詭辯の十分の九は彼のテーチュアといへる文字の意味を明瞭にする事をもて解散するを得可しとゼレミー、ベンタム又曰くテーチュアなるものは一種の女神にして極めて人望ある女神なり人は凡て善なりと認めたるものを悉く此女神の力に歸し之にて其善なる所以を確證し得たりと滿足す此解釋の方法は甚だ簡畧なり此解釋法に倣ふもの多し之に註釋するもの多し之に類似したる先輩多し然れども此解釋は到底何物をも解釋せし事なし之によりて一層困難なる問題を生じ來れりと又曰くテーチュアなるものは一種の小説やの人物の如し書くにも談ずにも折々は此一人物を出現せしめざるを得ざるなり左れど之を誘引して毛氈の上に來らしむれば彼女は其當然の姿の儘にて出で來る即ち裸體の儘にて出て來る彼の女の本体は無一物なり如何なる資性にて飾るにもあらず貴む可き德性又は退く可き否德備ふるにもあらず即ち裸体なりと吾人テーチュアの意味を考ふる時漠然として捕束し難きものあり遂に斯の如き言語を發することを得ざることなきに非ずテーチュアなる文學は一種のステーションなり八方の論線を暫らく此所に集止し而して后其正當なる方向に押す彼は暫らくの間の氣休めなり更に一層の深義を研究確定せずんはある可からず

(三)テーチュアなる文學の奥義を確定せんとするに當り古來諸名家が之を使用したる形跡を畧叙し而してのち概括要决する所あらん

アリストートル曰くテーチュアに由りて或人は命令し或人は從服し之れ相互ひの安全の爲めなり蓋し全權の分別の性を受けたる人はテーチュアに由りて優者たり智者たるべし只躰力をもて勤務する事を得可き人は劣者なりテーチュアの奴隷たる可し又曰く如何なる狀態(ステート)も皆テーチュアの工作なり社會上の最初の結付けはテーチュアなり万物若し完全なる狀態に達しなば之其物のテーチュアなり人にても馬にても家にても皆然りプラト曰くテーチュアの規則によれば不正の事に耐ふるは一層の不名譽なりと云々テーチュアの彼の女自身は教ゆるなり善人が惡人よりも多く所有するは正きことなりと如何なる理由によりてザーキセス、ヘラスを犯し其父シシャンスを侵せしが其は此等の兩人テーチュアに從て働らく所の人の家なるが故なり然り天に由りて又テーチュアの規則に從ひて働らく所の人なるが故なりとメニヤス曰く吾等成功を期して教へ若しくは學ばんには如何にすべき他なしテーチュアの(mode of operation.)働き方を發見し之に吾れ一身を適應和合(コモデート)せしむるにありテーチュアは相應適當したる時に來るなりテーチュアは之に形躰を與ふるに先づ其材料を準備するなりテーチュアは其運動に相應せる物を取り上げて又は之を相應ならしむる爲に注意用心すテーチュアは其動作に於て混雑する事なし明白に一事より一事に進行すテーチュアは凡て其働きを內より外の方へ及ぼすテーチュアは大躰より初めて特別個分に進むテーチュアは飛翔して進まず歩々を重ねて進むテーチュアは一度び進み行き初めては其工事を成就する迄然る事なしルッソー曰く注意してテーチュアを吟味せよ而して汝が爲めに開きたる其道に從ひ行けよ吾等が能力及び吾等が機關の內部に於て發達するはテーチュアが吾等に與へたる教育なり苛酷なる教師我儘なる兩親をして其徒らなる爭論を其儘携提してテーチュアの元に至らしめ彼等自身が方法を誇るの前先づテーチュア彼の女自身の方法を學ばしめよペスタロッチ曰く吾等を善になす所の者は一人テーチュアなり吾等を眞理と智慧とに導く所の者は敗廢するとなき援すと能はざる彼のテーチュア已なくも凡て教育の方法に二種の良き方法あることなし又ある事能はず良き方法は只一なり而して此只一のよき方法は必ずやテーチュアの永久なる方則の上に安んずる第一の教師はテーチュアなり其授業は幼兒の感覺が周圍の世界の感銘を受くるに足るものとなりたる瞬間時より初まるフレーベル曰く神の聖氣(スピリット)はテーチュアの力に休み生き且つ働らく其表はるゝやテーチュアに由る常にテーチュアの中に又はテーチュアに由りて成形す左れどテーチュア其れ自身が神の体なるにはあらず神は一軒の家の中に住ひ給はざると等しく又テーチュアの中に住み給ふことなし只神の聖氣テーチュアの中に入り以てテーチ

ウアを產し護り養ひ且つ發育するなり、スペンサー曰く吾等に有する樣々の官覺及び嗜欲によりてオーチウアは身心の主なる必要に對し相互の適合を內すべき保險を供ふ。ネーチウアは彼の女自身が嚴格なる計算簿に於て決して脫漏せざる所の數個あり。古來代々に增し得たる現象の方則と親近せる事により吾等が必要の爲にはネーチウアを服從せしめ採用する事を得るに至れり。云々の如き事はネーチウアの美しき經濟法と全く矛盾するなりネーチウアは最も簡單なる法方にて道德修練の眞の理及術を說明す。ネーチウアは嚴格なる計算家なり汝若し一方に於て彼女が與へしとて用意したるよりも多く要求せば同時に他の何處に於てか差引かれて其計算を調ふるなり。ゼヨウセスペーン曰くネーチウアは何如にして教授するや彼女は實物教授(チアゼクトレッスン)によりて智識を供ふ彼女は爲さしむるによりて爲す事を教へ生計せしむる事によりて生計を教ゆ彼女は見る事聞く事の爲めに其文典を教ゆる事なし彼女が教方は復習多し彼女は靜かに教へ書生を數ば妨ぐる杯の事ある事なし彼女は書生の働きより結果する關係を必しも心配して妨ぐる事なし寧ろ之れを經驗せしめ以て智慧を得せしむ或時はその指を燒かしめ其苦痛の中に存する道德上の學科によりて學理に存する明かなる方則を學ばしむネーチウアの教授は屢ば不精密なる事ありそは教授法の不精密なるにあらずその書生が欠點を遺傳するによる教育上のインフルエンス即ち教育家はネーチウーア及び子チウラルの事情によりて代表されたる神なり

(四)右に掲けたる諸名家が言語の用方によりネーチウアなる文字の意義を考ふるに之に二種の意味を存する者の如く悟らるゝ也一は性質と云ふが如く他は自然と云ふが如しアリストートル曰く萬物若其完全なる狀態に達しなば之れ其ものゝ「ネーチウア」なりと即ち人にても馬にても凡そ物には皆その當に達し到るべき完全なる狀態を存す種子が二葉となり遂に大木となるべき如く物には皆な當に成就すべき先定あり而して先定に達せんが爲に絕へず發達進向するの傾きをば其ものゝ「ネーチウア」とも云ふ即はち通俗性質といふものなり故に若々の「子ーチウア」あり酸素水に若々の子ーチウアありと云ふときは此等のものが事情に應じて其先定固有の性質を發現する事を云ふものなり左れば此の意義に於て「子ーチウア」といふときは其物の性質又は其物の働きの法則若くは其物の生長の法則と云ふの義に同じ之れ前に掲げたる多くの用字法の一種の意義なり

(五)右の外に尙は一種の意義を存す即はち之を自然宇宙と云ふが如き意義に用ひ之に一種の人性(パーソナリテー)生命權力を附給して天地間に存する一大勢力なるか如く視倣すなり「子ーチウア」斯く教ゆ子ーチウアは斯く支配すと云ふときと之を一種の活力ある存在者の如くに思惟すペーン曰く昔は天地に万の神ありと信じパルカン、セレス、ジウー、ペルメス等を特の外尊崇したり左れど今は「子ーチウア」と云へる女神を信奉し之に歸依し多神より一神には移りたりと云へと均しく亦偶像禮拜なりと實に然り。

(六)此の二種の意義ある事を明かにして而して教育を行ふに當り子ーチウアに放任すと云ふは如何なる意味なるやを研究せざる可からず一の意味に於て其性質のまゝに放任すと云ふことなりとせんか凡そ教育上の開發は其性質に順ふことなり之か天に順ふにある事勿論なれば所謂る「子ーチウア」なる其性質に順ひ亦或る限り迄は此の性質の儘に放任せざるべからざるは云ふ迄もなき事なり然れども如何なるも之を放任するを以て常理なりとすべからず放任せざるべからざるが如く亦保護せざるべからず放任も保護も共に性質の當然に逆ふ事なかる可きは勿論なりと雖ども常に之を放任すべきと思惟するは誤れり一層切に云はゞ保護すべきか放任すべきか是も亦物當然の性質に從ひて施す可きものなり故に之を其「子ーチウア」(性質)に從ふてと云ふ事を得而して「子ーチウア」に隨て教育せんとするに當りては「子ーチウア」の抑も如何なるものなりやを承知せざるべからず此に於てか其の「子ーチウア」を研究するを要す此の研究すべき「子ーチウア」は即ち理法なり理法を研究し此の理法に隨ひて教育すと云はゞ「子ーチウアに隨ひて教育す」と云ふことの他の言語は「その物の理法に隨ひて教育を施す」と云ふに異なる事なし之れ尋常當然の義理なり。

(七)第二の意味に於て自然又は宇宙なるものゝ手に放任すと云ふ事なりとせんか果して然らば之れ今の文明人を反して昔しの野蠻人となすものなり所謂る人のアート(工藝技術)はもと自然又は宇宙の働き方即はち其現象に隨ひて學びたるものなり既に之を學ぶによりて人世の文明を形造りたり而して文明既に幾階級の上に達したる今日に生れ出る人の子を擧けて翻然之を昔日太古の未だ人の「アート」あらざる時代の狀態に放ち反らしめんとするは不當にあらずや今日の人の子は多くの文明を集積したる人の子にして且つ多くのアートの結果を遺傳したる人の子なり

左れば之を鈍々たる昔日の蠻人の子の如くならしめて再び之をアートなき太古の自然のまゝに反らしむるは大なる誤謬ならん。

(八)この故にネーチウアに托すと云ふの說は一半に於て尋常當然なる眞理を存し又の一半に於て警戒すべき放任說を存す物の性質に隨ひて教育するは當然なり左れど人の手を掛けず全たくネーチウアに放任し去んとするは誤りなりネーチウアに委托すと云へる極めて自由主義に似たる美辭により反て大なる誤謬を爲す事あり

(九)左れど物の眞性質を辨せず徒らに人の手を出し反て其の盛に發達するを妨け若くは窮屈なる制限を立てゝその性質のまゝに開發せんとする進歩を害する事甚た多し教育上の誤謬に陷れる事數は之れあり此に於てかネーチウアに托せよ自然に任せよと云ふの義俠なる放任論を生ず亦これ一種の救濟策なりと云へども抑もこの救濟策は或る偏僻したる干渉の說を打破せんが爲めに反發したる一時の策にして定時常然の常道にあらず十八世紀に於けるルツソウ十九世紀に於けるスペンサーの如き皆な時弊に對して論を立てたり其論煥焉光彩をはなち且つ益を奏したる事固より多し彼等が云ふ所の自然放任說は如此き時代の爲めに或る益を立てたり即はち無智窮屈なる愚人の干渉を打破し去りたり左れど此の變時の益を以て常時の大道と見做すことあるべからず。

三籟第壹號目次

定價 壹冊 金六錢　六冊(半ヶ年) 金三十六錢　郵税 五厘

發行所　牛込區市ヶ谷仲町四十番地　三籟社

特別賣捌所　東京々橋區出町雲一番地　警醒社書店

文學界

第二號要目　三月卅一日發兌

改正定價表

	東京市内	地方郵税共
一冊	六錢	八錢
六冊	卅三錢	四十五錢
十二冊	六十錢	八十四錢

本紙は非常に愛顧を給ひて**第壹號**の**再版**及び**第二號**共に**賣切**に相成切角の御注文に反き申譯御座なく、第三號よりは、猶一層部數を増刊候仕間何卒引續き御愛讀奉願上候

文學界發送部

當社又**東京麻布區霞町廿一番へ移轉す**

東京赤坂區仲之町二番地三號より

注文通信共當所へ御遣し被下度候

但爲替振出局は從前通芝口郵便局の事

東京麻布區霞町二十一番地

護教社

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃も濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊金六錢　郵税金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三